とゞ、今少し小くて氣近きにこそおはすめれ(一)。日に二度三度はありし御文に「人に見せ奉り給ふな」とのみありしかばこそ侍りけめ。藤壺の御方よりも、生ひまさり給ひなむかし」(二)大殿「いでや、容貌あるも(三)、言ひ騒げばあまりに聞きにくしや」など宣ふ(四)。内侍のすけに、御衣櫃に女の裝束一くだり、夜の裝束一くだり、絹三十四、綿など入れて取らせ給ふ。

畫詞　こゝは源中納言殿。

かくて大將殿(五)は、晝の御座所に、犬宮いだきて臥し給へり。宮(六)もかたはらに御殿籠り給へり。源中納言殿より奉り給へる物どもは、絲を藁にて、白き組を荒巻にて、きぬ一匹を魚にて、そを五葉の造り枝につけつゝ十枝、鯛鯉は、生きてはたらく樣にて、同じ造り枝につけたり。雉子の腹には、黑方を丸かし入れ、骸をば銀にて造れり。鳩は黃金、その腹には黃金入れたり。小鳥には、黑方を丸かしたり。折櫃は銀、鰹は沈、壺燒の鮑は黑方、海松、青海苔は絲、甘海苔は綿を染めてしたり。壺には綾、衝重にはすはうの物入れたり。洲濱を見給へに中納言殿の御手にて、

涼　ゆく水のすむかげきみにかふるまで汀の鶴は生ひも立たなむ

とあり。

〔語釋〕
(二)「大殿の北方」なるべし
(五)仲忠
(六)女一宮

〔考異〕
(一)おはすめれ―おはすれ
(三)あるも―あなるも
(四)宣ふ―宣ひし

畫詞　こゝは源中納言殿。臺盤所におもと人たち居て物食ふ。碁代もみなあり。みな分けつゝ。

かくて源中納言殿より大將殿に、昨夜のかち(一)物錢いま一餌袋、白き添へて、心きたなと中納言の御消息にて有り。御返り、

涼　いと行く先長く思しまうくめる物を、などか忘れさせ給ひにける。心きたなき上達部も侍るものを。

仲忠　人にかきあづけて(二)かは色こそかはれ、いかゞ。

となむ宣へり(三)。

〔語釋〕
(一)「かけ物」歟
(二)「あづけてしかば」歟
(三)「宣へる」なるべし

話㊀仲夫婦に内侍のすけ忠の噂。忠俊夫婦仲違の噂。

かくて内侍のすけ、いと淸らに裝束きて御前に參り給ひて、すけ「犬宮のいと戀しくはおはしつれば、「今日明日は」と(一)侍りつれど、急ぎて參りつるなり」おとゞ、仲忠「いと嬉しかなり。日頃うしろめたかりつる。御方々はなどておはしつるぞ。あまた御聲せしは、幾所にか」すけ「大將北の方の御子にし奉れ給へば、いたく惱み給ひしかばおはしぬ。式部卿の宮の御方は、御子をいと安く生み給へばあえ物にとて。(二)大納言殿の(三)北の方は、いづれとも元よりいみじき思ひはらからにて、心細き心などきこえ給へば、かねて渡らせ給ひにける。如何なるか侍らむ、大納言殿御中違にて、日頃は夜毎におはして、簀子になむ居明かし給ふめる。御格子はとくおろしてさしめぐり、人物きこゆればいみじうさいなみ給へば、一所なむ。一夜はいとほしがりて、(四)中納言の君對面し給へりしかば、それも逐ひ出でられてなむ。今日は北の大殿に渡り給ひぬらむ。さるは、(五)それもかやうの事ありげにおはすめり。宜なりけり、例はいたう空めいたる人のいとまめに見え給ひしは」

〔語釋〕
(一)涼方にて仰せられしかど
(二)忠俊
(三)七の君
(四)忠澄
(五)七の君もやがて御產あるべし

仲忠「此の君の御容貌は如何おはする」すけ、「内裏の御方の樣にていとをかしげになむ」大將、仲忠「見奉らざらむ人は知りがたくぞ」すけ、「何か、氣色はいとよくぞ」仲忠「さて源(一)中納言殿は」すけ、「それは、宮の御樣の人の若く淸らにおはすること。御方々いと淸らにおはします」宮はおどろき給ひて、女二「何事ぞ。あれ、聞きにくしや」大將殿、仲忠「夢見給へるか。人の物や言ひつる」とて、「中納言と君と(二)の御中は如何なるぞ。兒まろがやうに抱くや」すけ、「御中はいとめでたく思ひ聞え給へり。いたう煩らひ給ひし時は、泣く〳〵手惑をぞし給ひし。兒は、見には見給ふ。おそろしとて抱き給はず」おとゞ、仲忠「また見ずなど宣ひしかば、いぶかしきにや」(三)などて内侍のすけ、犬宮いだきて入りぬ。おとゞ、宮は、(四)仲忠「起き居給ひて、昨夜の所よりある物ども見給へ。これらとり置かせ給へれ(五)。かゝる物の用あるとき、俄にすれば煩はしき」と聞え給ふ。おき給ひて、昨夜のかづけ物ども見給ふ。おとゞ、仲忠「みな人かゝる事すれ。いとあやしく、物の具など有り

〔語釋〕
(一)今宮をいふ「殿のは」なるべし
(二)今宮との
(三)「などとて」なるべし
(四)「宮に」なるべし
(五)「れ」衍文なるべし

（語釋）
（一）仁壽殿
（二）俊蔭女
（五）「まうでこ」なるべし
（六）明るき中に
（七）女三宮

㊂兼雅仲忠、女三宮以下を三條に迎ふ

（考異）
（三）一つら—一すく—一すぢ
（四）三十人—二十人

がたく淸らにする所にこそあれ。このうち添ひたるは、お前に奉らむ。唐衣添ひたるは、内裏の（一）御方の參らせ給はむ御料に奉れ給へ」宮、女二「かたへは（二）三條に奉れむ」おとゞ、仲忠「あな見苦しや。片隅に籠り居たる、生女の著るべき物かは」など宣ひて、その日はおはしまし暮らして、又の日、仲忠「三條にまかりてすべき事侍り」とて、うへの衣裝束淸らにして薫物どもして出で給ひぬ。

三條殿にまうで給ひて、南の大殿を見給へば、いと淸らにしつらはれたり。しばしあれば、殿ばらより御車ども奉れ給へり。源中納言殿より、あたらしき黃金作に男ども二十餘人、裝束（三）一つらにて、擇り立てて奉り給へり。絲毛には、さぶらひの下臈の男どもに、うへのきぬなど著せて、三十人ばかりつけたり。御前四位十人、五位二十人、六位（四）三十人。大將は、仲忠「馬に鞍おきて、男どもかへるべきやうにゐて（五）まうで、三條殿に」と言ひおき給ひて、父おとゞ一つ御車にて、御前二人ばかりして、（六）あかく物し給ひぬ。西の御門よりおり給ひて、右大將は（七）宮

（語釋）
（一）陶碗歟
（二）ひめ粥
（六）「こめの」歟、一本「二三の」

（考異）
（三）すみおり—すしをり
（四）堅い鹽—堅鹽
（五）櫛の—梨子地の
（七）やは—「は」ナシ

の御前へ、左大將は忍びて中の君の御方に參りて見給へば、うち破れたる屛風一雙ばかり、夏のかたびらの煤けたる几帳、一つ二つ立てて、君は綾かいねりの所所破れたる單がさね、すゞけたる白衣著て、火桶のすゞけたるに、火わづかにおこしたるに、臺一つたてて、白き、（一）たうわんに御物、（二）ひめめきて少し盛りて、（三）すみおり薑、漬けたる蕪、（四）堅い鹽ばかりして、夜さりの御物にもあらず、旦の物にもあらぬ程にまゐりたり。御前には、古びたる蒔繪の（五）櫛の箱同じやうなる硯の箱するゐて、櫛の箱蓋をとり除けて、一日の柑子の壺の殘をとり出でて、乳母かけて見などす。その女孫など、童にて有り。下仕、一人ばかりなむ有りける。おとど見廻らして、とばかり物も宣はず、たゞ泣きに（六）こゝの御衣の袖のしとゞになりぬまで泣き給ふ。御前なる硯を引きよせて、懷紙に、かく書きて、うち置きて立ち給ひぬれば、中の君、「我斯くていみじき樣を見えぬるは、さもあらばあれ、他世に（七）やは經たる。かくなしたるにこそはあめれ。これをかくすと見えぬるは、い

〔語釋〕
(二)「わかれし人は」歟
四)兼雅

〔考異〕
(一)恥見る—恥を見る
(三)見えねば—見えねど
(五)おとゞは…御たち二十餘人—左大將ありかゝりて南のおとゞの方へおはしぬれば御たち二十餘人

みじく悲しき事。わが幸なく恥(一)見るべき宿世の有りければ、幾多の年月こそあれ、かゝる年月を見る事」と伏しまろび泣き給ふ。乳母の孫のわらは、「御硯にかゝる物こそ侍れ」とて取りて奉る。見給へば、

兼雅ともかくもいふべき方も思ほえず見るに涙の降るにまどひて

君、これが返事をだにいかで言はむと思して、かく書き給ふ、

中君ながめつる雲居をのみぞ恨みつる(二)わかれの人は目にも(三)見えねば

と書きて、いかで遣らむと思せど、出で走るべき姿したる人もなければ、おし揉みて手に握りて、寝殿にむかひたる柱のもとに立ちて見給へば、(四)おとゞは下り給ひて、東の一の對の方へおはしぬ。なほ其處に立ち居給へり。かくて(五)おとゞは、宮の御方に參り給ひぬれば、御たち二十餘人ばかり、裝束淸らにして、わらは四人、青色にあをし重ねて著たり。おはする所のさま、昔に劣らず。御褥敷きて、御簾の前に居給へり。宮は昔の御かたちに劣り給はず、綾かい

〔語釋〕
(一)「こきうすき」は「こうちき」なるべし
(四)女四宮

〔考異〕
(二)いと斯くても—いとよくかくても
(三)苦しう—苦しく
(五)嵯峨院にては

ねりのこ(一)きうすき織物のほそながなど奉りて、御火桶淸らにておはす。角櫃に火などおこしたり。御臺一よろひ、かねの御器などして、例のやうにて物まゐれり。おとゞ、兼雅「年頃はあさましく公にも棄てられ奉りたるやうにて。昔は、ゆくさきも人なみ〳〵にや、と思う給へて、かゝる宮仕もさる方なりしを、今は限のやうなる身に侍れば、さふらはむも御面伏なるやうなれば、かゝる身にあえぬべき者の許に籠り侍るを、然てのみやは行くさきも短くなりぬる心地し侍ればなむ。蜑の苫屋のやうなる所に、時々通ひおはしましなむや」と聞え給へり。女三「世の中はい(二)と斯くてもありぬべしや。たゞ(三)苦しう覺ゆるは、東宮の(四)御方なり。身は心と世の中に住みはふれて、「帝、后の御面を伏すること」と宣ふなれば、と參らで年を經るなむ、悲しき。昔はしば〳〵こそものせしかど、今は參り給へぬをなむ、(五)彼處にはうしろめたう宣ふ」おとゞ、兼雅「春宮の御方は、中納言かくて侍れば、いと

よく仕うまつりなむ。御上をぞかしこまり思う給へる」御いらへ、女三「今は、ともかくもしなし捨てられなむ儘にを、となむ、一日中納言にものせし」と宣ふほどに、(一)おとゞ御前に、昔のやうにて御臺まゐれり。多くの御物語し給ふほどに右大將は少將の妹の方におはして、簀子のもとに立(二)ち給ひて、仲頼妹「あな覺えず所たがへか」と聞え給へば、仲忠「人々もとめ給ひしかば、いとば、それ聞えむとてなむ」いらへ、仲頼妹「かゝる人のしるべきと宣ひしかば、いとよくぞ思ひ知りにき」(三)などて簾のもとに几帳立て、褥さし出でて、赤色の火桶、繪をかしくかきたるに、火おこして出だしたり。大將、仲忠「今すこし近く寄らせ給へ。(四)山籠の君を、昔はいみじう語らひ聞えしかば、さりとも聞召すやうも有りけむ」いらへ、仲頼妹「(五)山籠しける人やはと」大將、仲忠「何か、いとよく承はりたりや。一日も、聞えさすべかりけれども、斯くておはすらむともえ知り給はで有り(六)しを、かくておはせ給ひし由聞えしかばなむ。かく承らましかば。山の君の哀

〔語釋〕
(一)「おとゞの御前に」なるべし
(二)「立ち給へり」なるべし
(三)「などとて」なるべし
(四)仲頼
〔考異〕
(五)山籠しける人—山籠の知るべき人
(六)有りしをかくて—ありしかはかうて

におぼえ給へば、(一)かばかりに聞えまはしくなむ」いらへ、仲頼妹「常に聞ゆめりしかば、餘所にえ(二)承りなどしたれど、疎々しく思されし筋にや、と思ひ給ふるなむ」大將、仲忠「それは、親二所おはすとなむ、(三)殿の御かはり、かの君の御かはりに、人數に侍らずとも相思ほせ。さても、いかでかは、(四)かの君たち世に經給はぬに、斯くては。この(五)宮內卿殿のは何處にぞ。いかでか」いらへ、仲頼妹「親の御許にこそは。(六)さきにもしの給へりしには、(七)みになむ、吹上のかへさを思ひ出でて、いみじくなむ(八)泣かるなりし。かの人、(九)「同じやうなる樣になりなむ」などあめれど、親の許さねば、心は同じやうにてなむ」大將、仲忠「幼き人など物しげなりしかば、(一〇)何にぞ。(一一)いくつばかりにて、何處にか」いらへ、仲頼女「女一人十餘ばかりにて、男二人、一つ二つが弟にてなむ。女は母君の御許に、男は、物ならはさむとて、山へむかへ侍りき。兄なるは、何事も親には勝りぬべかめり。弟はえせで騷がれ侍るなり」大將、仲忠「あそびの具も、いとかしこくて持(一二)給へりし。(一三)持てのぼり給ひにしか」い

〔語釋〕
(一)「かはりに」歟
(二)「え」は「こそ」歟
(三)兼雅と仲頼の代
(四)仲頼等
(五)忠俊の娘、仲頼の妻
(六)「さきにものし給へりしには」歟—一本「さきにもしのびしには」又一本「さきにし給へりしには」
(七)誤あるべし
(九)出家したしと
(一〇)「なりしは」歟
(一一)男子か女子か
(一二)仲頼が
(一三)山へ
〔考異〕
(八)泣かる—泣く

〔語釋〕
（一）後に山へ取りよせたり

〔考異〕
（二）妹を―今は

（三）いかで―人の

（四）せむや―せよや

らへ、仲頼妹「子どもに物習はさむとて、後になむ。（一）女にえ習はさぬは、少し外の方にさし出でて、物の音など調べおきて、彼處よりも深く入りなむとて、常に言ひおこせ侍りつる」大將、仲忠「あはれ、さる所に、何心を思ひて幼き子どもと居給ふらむ。

仲忠むつまじき疎きと妹を（二）ふりすてて山邊にひとりいかで（三）住むらむと宣へば、妹の君いみじく泣きて、

仲頼妹頼みしも見えしもさらに忘られでひとりは里もすみ憂かりけり

と聞ゆれば大將、仲忠「今日は宮の御方の三條へわたり給ふとてなむ、物せられつる。仲忠侍る所も今いと廣くなりぬべし。今そこに御迎せむ。しばしなほ斯くておはせよ。な思し疎みそ」とて立ちて、宮の御方へおはしぬ。

おとゞ、兼雅「此處にや」と宣ひて、兼雅「右近や。昔思ほえてまかなひせむや。（四）湯漬せよ」など宣へば、同じやうなるかねの坏にして、湯漬して、あはせいと淸げに

て外にまゐる。おほん酒などまゐる程に日くれて、御車御前など参りたり。政所より炭多く出だして、所々に火おこさせて、車添などするゐて、餅、乾物など取り出で、酒樽に入れてするゐてまがり(一)して、湧しつゝ飲ます。御前どもに、菓物乾物などして酒飲ます。

かくて先づ、うなゐ、下仕等人給へ乗る。御車寄せて、奉りて、引出づれば中の君、「さば斯くするなりけり。我如何様にあらむとすらむ。この文をだに見せずなりぬる事」と泣く〳〵持ちて思ひ立ち給へり。おとゞ、御車出だしてしばし有りて、(二)立ち寄り給ひて、兼雅「今日は便のやう(三)なり。今ことさらにを」とて帰り給ふに、この文投げ出だし給へれば御供の人取りて御車に奉りぬ。大将は御馬に乗りて、御さきに仕うまつり給ふ。世の中の人、「右大将は、繼母の宮むかへ奉りて、御前していますべかなり」とて車ひき立てて見る。御續松ともしわたして、はやる馬に乗り、をりまはしておはする御様を、車どもより面をさし出でつゝ見

〔語釈〕
(一)合子、漆塗りの食器
(二)中の君の方に
(三)序の様で面白からず

る。由ある檳榔毛の車の簾をいと高くあげて、落ちぬばかりこぼれ出でて見るあり。大将うち寄りて、仲忠「何見給ふ。まろより外にあらじかし」と宣へば、「かかるあたには有りければ」大将、仲忠「のちおひといふなればぞ」とておはしぬ。かくて三條殿におはして、南の大殿に御車寄せつ。みな下り給ひぬ。今宵のまうけ人々にあづけられたれば、皆まゐりたり。父大殿は、やがてこゝに御殿籠る。大将、仲忠「今なむまかづる。明日もさふらはむ」と北の方(一)に聞え給ひて帰り給ひぬ。

(二)右の大殿は、藤壺の御迎し給はむとて、やがてその車にことなど加へて、絲毛三つ、黄金作たうきり(三)、うなゐ車、下仕車、あはせて二十ばかり、御前の人、國なるのみこそ残れ、京なるは四位五位無きなし。おとゞ、正頼「暇ゆるされざなるを、参りてまかでさせむ」と宣ひて出立ち給へば、御子ども、中納言(四)をはなちては、皆御供にまうで給ふ。縫殿の陣に御車ひき立て、まうで給ふ。宮(五)は晝よりさ

〔語釈〕
(一)俊蔭女
(二)正頼
(四)忠澄
(五)東宮
㊃正頼あて宮の迎に参内す。東宮あて宮の退出を許さず。

〔考異〕
(三)たうきり—とうきり—のたうきり

る氣色御覽じて、東宮「怪しく心地のあしきかな」とて(一)とらへて臥し給ひぬるまゝに起き出で給はず。おとゞ參り給へれど宮入り臥し給へればえのぼり給はで、下に立ち給へれば、君たちはさながら土に立ち給へり。おとゞ、これかれして(二)君に消息申し給へど、え聞え次がぬほどに、(三)大殿の君の御方に言ふやう、「こゝらの年(四)月日もへだたりつる人の、今宵かく、辛うじて率て(五)去なれぬるかな。如何に腐り亂れたらむ。さるは這ひ出でむぞかし。その樣の聞えぞすめる」と言ふ。又(六)院の御方の下仕へ、わらはなど、「今宵はよき日なるべし。縫殿の陣の方に、俄に物まきたる車ども、北に立てりつ。今宵ぞ持て出でらるべかめる。(七)もよずはへして、よく打たばや」など言ひあへり。おとゞ爪彈をして、正頼「女子もちたらむ人は、よき犬乞食なりけり。中にらうたしと思ひしものをしも、出だし立てて、かゝる耳を聞くこと。なほ犬烏にもくれて、籠めすゑたらましものを」と言ひ立ち給へるを、(八)宮はいとよく聞召す。

(語釋)
(一)あて宮を
(二)あて宮に
(三)昭陽殿
(五)「去なれぬべきかな」歟、一本「ぬられぬべきかな」
(六)女四宮
(七)百本の鞭を用意して
(八)東宮

(考異)
(四)日もへだたりつる—もへざりつる

これかれ「夜更けぬ」と消息申せど、「え聞えず」とのみ申す。孫王の君を呼び寄せて、正頼「御後の方より忍びてまうでて申せ。「度々まかでさせずとのみあれば、思ほえず敵など持ち給へれば、うしろめたさに、御迎に」など申し給へ」と宣へば、孫王「聞えむ」とて御後の方よりやをらすべり入るを、宮御殿籠り起くるやうにて、いとあらく走り(一)踏ませ給へば、御脇息に(二)倒れかゝりて、腰を突きつ。御屛風、御几帳もこほ〳〵と倒れぬ。孫王の君、いと久しくためらひて、斯う〳〵と(三)聞ゆれば、正頼「(四)翁かく夜のほどに參りて、たゞにやは。顯澄啓せよ、(五)宮の亮なれば。藏人ならずとも」と宣へど、顯澄「何か。御氣色よろしからぬに(六)こそ」とて申し給はねば、(七)むつかり給ふを、宮きこしめして、女君をつと搔き寄せて宣ふやう、東宮「其處は、我をいかに言ひくたしてか、(八)親同胞ひき連れさせて、我をば責めさする。萬のこと、我に知らせてこそ、參りもまかでもせられめ。我に知らせで、親はらから一つ心にて、我をや責めさせむずる。そこを放ち遣りては、我はあるべくも

(語釋)
(二)孫王の君が
(三)正頼に
(五)汝は東宮亮なれば
(七)正頼が
(八)あて宮

(考異)
(一)踏ませ—出でさせ
(四)翁かく夜のほどに—おふなく夜のほどろに
(六)こそとて—ともかく

〔語釋〕
(二)懷胎五ケ月の腹
(四)仲忠をいふ歟
(五)あて宮が

〔考異〕
(一)となめり—との事なめり
(三)宣ひきこえねば—宣ふうつちむは

あらず。斯く強ひてまかり出でさするは、また參らせじとなめり(一)。斯くながら、我もそこも死なむ」と宣ひて、つと抱きて臥し給へば、(二)五月ばかりの腹、いみじうはたらきて、たゞ惑ひに惑ひ給ひ、いみじう泣き給ふ。宮いと憎しと思せど、腹の騒ぐにいみじと思して、うちゆるして、東宮「宣ひきこえねば(三)いましむるぞ」と宣ふ。東宮「我は、そこによりては、せぬ業々をこそしつべけれ。かく心を隔てて、心強くあしきは、仲忠の朝臣のするぞ。これに逢はずなりにたるをぞ、いと悔しと思ひいますめる。人のいとかなしくする(四)一子、帝の二つなくいたはり給ふ聟、我が國に面もたげたる人、徒らになして、天の下の人かなしませ給ふらむに、そこは容貌よかめれど、心こそえ良からざりけれ」と宣へば、(五)水の戰して、汗にしとゞに濡れて、屈まり伏し給へれば、流石にをかしと思して、東宮「今より、我に知らせぬ心な遣はれそよ。まかでらるべき事あめれば、今しばしこそあれ。強ひて斯くすればいと憎きぞかし」と宣へば、夜半過るまで立ち給ひて、曉にぞお

〔語釋〕
(一)近澄、一本「うまのかみ」
(七)あて宮に

〔考異〕
(二)賜はり給ひて—賜はりて
(三)はど—はどに
(四)宣ひしかば—のありしかば
(五)恥かしく侍りしか—恥かしかりしか
(六)有るを—あり

とゞは歸り給ひける。

つとめて、(一)内藏頭の君を御使にて、おとゞの御文あり。正頼「昨夜は、路の程うしろめたさに、御迎に參り來たりしかど、御暇を賜はり給はざりければ、曉になむまかで候ひつる。御暇(二)賜はり給ひて、消息は宣へ。車どもなど調へさするも煩はしきを。いでや、子ども二十人にかゝりて持て侍れど、そこをば懷といふばかりに生し立て奉りしかば、いつしかも人々しくなり、面たゞしき目をも見給へむとこそ思ひ奉りしか。消息申しつがぬはど(三)、うち休らひつゝ聞き侍りしかば、ある所々に、忌しくいみじき事ども宣ひしかば(四)、いと心憂くなむ。自らはさるものにて、若きものども、人人にも聞きしこそいと恥かしく侍りしか(五)。げに、暫しまかで給ひて、人の目どももやすめ奉り給へ。」
(六)と有るを、老人とりて(七)御前に奉れば、宮、東宮「持て來や」とて御覽じて、いとい

とほしとは思せど、まかで給へとあるをいと憎しと思して、おし揉みて投げやり給ひて、東宮「人々の物すらむことは、こゝには得知らず。面伏なりと思さば、見給ふまじくこそはとなむ」と言はせ給へば、内藏頭、(一)いとはしたなくいとほしと思して、まかで給ひて斯う〳〵と申し給へば、これかれ、いとほしがり騷ぎ給ふ。大宮、「事しも有り顔に、おふな〳〵子どもひき連れて、何かよからぬ文書をして、かゝることもいだし給ふ。そこはとまれ、若き人々の行く末の爲こそあぢきなけれ」と宣ふ。右大將殿聞き給ひて、仲忠「さればこそ聞えしか、えまかで給はじと。おほろけに御心輕くおはしますにもあらぬに、いとほしき事かな」と宣ふ。

かくて、今日は司召なれば、左右のおとゞ右大將など、一日定められて、夜召す。東宮は、その夕さり藤壺もろともに上り給ひて、例の如しつらはせておはします。つとめて、司召はてゝのゝしる。いと多く召したり。左衞門督に忠澄の中納言、右近少將には近澄の内藏頭かけて、左衞門尉にあこ君なり給へれど、宮に(一)はよろこびも申させ給はず。宮(一)の上におはしませば、人々、殿上人などよろこびて、左大將(二)も參り給へり。うたて(三)ある事は宣ひつれど、まめなる(四)御心にしあらねば、召して物宣ひなどす。東宮「さいつ頃、いと間近かりしかど、こと〳〵なかりし程にて、こと〳〵にさやうなる事あるべきやうにはあべかりしを、今年は不用なめりな」正頼「大將(五)のこの頃仕うまつるべく侍りつるを、さる事侍りてなむ。年かへりてぞ仕うまつるべく侍る」とてまかで給ひぬ。藤壺を下へおろし給はで、いと近く御局し給ひて、兵衞の君、孫王の君、あこきばかりして、また人召し寄せ(六)ず。東宮「人の用あらば、この人をつかひ給へ」とてすゑ奉り(七)給へれば、御氣色のいと恐ろしかりつるに怖(八)ぢまどひて、物も聞えでさふらひ給ふ。

晝詞 こゝは司召。よろこびの人いと多かり。殿上にもさふらふ。こゝは東宮。

かくて、晦にもなりぬれば、こゝかしこに節料いと多く奉る。そが中に種松はお(九)

〔語釋〕
(一)東宮

〔考異〕
(一)内藏頭―うまのかみ

五 除目。忠澄、近澄等昇進。東宮あて宮を抑留す。

〔語釋〕
(一)東宮
(二)「右大殿も」なるべし 正頼なり
(三)正頼があて宮の迎にゆきし時の事
(四)眞からの懇言でもなき故
(五)仲忠が
(八)あて宮が
(九)正賴、仲忠

〔考異〕
(六)寄せず―寄せて
(七)給へれば―給ひつれば

六 仲忠、節料の米炭等を仲賴の妹に贈る。

とゞ、右大將殿の粥の料、すべて調じて奉る。おとゞには炭三十荷、米三十石、右大將殿には炭十荷、米十石奉れたり。大將、三條殿に米一石と(二)、炭二荷奉り(一)給ふ。又同じ數に、米も炭も、御厩の草刈、馬人召しておほせて、小さき童一人、大きなる法師雜仕もとめさせ給ひて、一條殿に、少將の妹につかはす。

仲忠 一日はこと〴〵にと思ひ給ひしかど、日の暮れにしかばなむ。なほ聞えしやうに、何方にも〳〵むつまじき筋にを。さてこの炭は、(三)水尾に見くらべ給へとてなむ。

と書きてぢうしのすくよかなるに包みて、「山より」とて少將の手にいとよく書き(四)似せて、近く使ひ給ふ上童そへて、仲忠「栗出しゝ處に(五)おしへ入れて、歸りまうで來ね」とて遣はしければ、到りて、「水尾より」とて入れたれば、見るに、炭二十(六)籠をいと細かに積みて(七)、とのこす(八)を貫き立てて、錢二十貫一籠に入れて、物覆して結ひたり。米は、(九)しけいと俵に編みて、絹五十疋入れて三俵、今一つには、い

〔語釈〕
(一)仲忠
(二)「と」衍文なるべし
(三)仲頼の許より來る品と
(五)「おしいれて」歟
(八)未詳、誤あらんか
(九)絹糸の粗なるもの

〔考異〕
(四)書き―ナシ
(六)二十籠を―はみを
(七)積みて―くみて

みじくうるはしき綿二十屯入れたり。見給ひて、仲頼妹「いと物覺えず、づしやかなる節料も賜へ(一)るかな。これを如何にせむ」と宣へば、乳母など、「(二)これもおとゞの御德にてこそあめれ。知らぬ人、御よばひ人ならばこそは、取り入れ給はずもあらめ。はや御返聞え給へ」と言へば、御使を呼び入れて、物食はせ、酒飲ませなどして、大いなる童には白きうちき一つ、小きには單衣一つづつ賜ひて、懷に入れさせて御返し、

仲頼妹 承りぬ。一日は、げに理にも聞えさせずなりにけるかな。山の代と宣はすれば、(三)うまのたとひの侍らむ心地して、いとも〳〵嬉しくなむ。さては、これは炭燒をさへせさせ給ひければ、いかに御手黑(四)かるらむとなむ思ひ遣られける。

と聞えつ。取りひろげて、御たち喜ぶ。仲頼妹「あなかまや。かの君の御物と聞きて(五)いき集まりてうけび呪ひぞせむ」とて母君の御許、水尾の料など取り置き、宮内

〔語釈〕
(二)仲忠をいふ
(五)「聞きては來集まりて」なるべし、同邸内の他の姿たちが也

〔考異〕
(一)賜へるかな―賜ひつるかな
(三)うまのたとひ―うまたとひ―むさのたとひ
(四)黑かるらむ―黑からむ

卿の殿にも奉れなどし給ふ。水尾には、大將殿(一)、御文添へて、子どもの衣など調じて奉り給ふ。

【晝詞】こゝは少將の妹の御方。御たち四人、わらは、下仕一人づつ、女房二人ばかりあり。君、三十餘ばかりにて、愛敬づき、匂ひやかなり。前にことども置きて、住ひよげなり。

かくて種松は、左大將殿にも、きぬ綿など大きなる櫃につみて錦(二)など、世になき錦(三)を奉れり。宮(四)の御方にも、御莊々より、節料多く奉れり。おとゞ(五)なほ北の方の御許にのみ夜晝おはする、物(六)などはたゞ此處に、あなたには時々晝間などにまうで給ふ。北の方に、一日中の君の有りしやう語り給ひて、投げ(七)出だし給ひし文見せ奉れば、北の方いみじく泣き給ひて、俊蔭女「あはれ、親におくれ奉りて、心細き住居するはいみじきものを。若くて親にはおくれ奉りてけり、そこには年頃思ひ聞え給ふとみえず。げに何心地し給はむ。などか(八)、さ哀に親の

〔語釋〕
(一)「大將殿の御文」なるべし
(四)大宮
(五)兼雅
(六)食事なども俊蔭女の方にてのみ食し
(七)兼雅、式部卿宮の中君に衣食の料を贈る。

〔考異〕
(二)錦—きにし
(三)錦を—しきりに
(七)出し給ひし—出したりし
(八)などか—などかは

聞えおき給ひけむものを斯くは(一)」おとゞ、兼雅「いさや、其處を見つけ奉りしに、胸心もつぶれて、萬のこと覺えざりしかば、然し(二)さりつるにや。この中納言の言ひ出でて、斯して、忘れ(三)たりつる見苦しき者どもも思ひ出でさするにこそは。如何に、訪らひにやらむ。食物などこそいとあはれなりしか」など宣ふほどに、「右大將殿より」とて、この炭(四)きを奉り給へればおとゞ、兼雅「氣色ある物かな。持て來」とて御前に召して、あけさせて見給へば、少將の妹の賜へりし、おなじ樣なり。きぬなどはまつべしやと委しく御覽ずるに、いと美しげなる白きぬどもなり。北の方、(五)俊蔭女「これを遣(六)りて宣ひつる所には物し給へ」と聞え給へば、おとゞ、兼雅「よき事なり」とて、車のはづしたる、破れたる下簾などかけて入れさせ給ふ。納殿、贄(七)殿、魚、鳥、菓物など、よきを擇らせて、炭、油など長櫃に積ませ給ひて、御(八)文は、兼雅「一日は見給へしに目もくれて、物覺えざりしかばなむえ聞えざりしと思せ。

〔語釋〕
(二)「さしたりつるにや」なるべし
(四)「炭米を」歟
(五)誤あらんか
(六)「遣りて」は「やがて」なるべし
(七)「贄殿の魚」なるべし

〔考異〕
(一)斯くは—からくは
(三)忘れたりつる—忘れたりし
(八)御文は—「は」ナシ

それも今は、

あまぐもは見ゆとも今は何かせむ見えぬこの世の人はとふとも

さてこのこめは、(一)夏衣にや。「ひとへなるしも」(二)とかいふなれば、今よりだに。

とて奉り給へれば君物どもよりも、一日の文を見てなど思して御返し、

中君一日は、おぼえぬ便なりしをなむ、めづらしき心地せられしかど、(三)この世の外の心になむ。されど、(四)

まつ人は多くの月日見えねどもいづれの暮か雲を見ざらむ

とあり。かの包みし金は、百兩に足らでぞありける。唐人の來たる頃にて、要ずる物せむとしければ、かゝる物どもあれば、ありしやうに入れて持給へり。衣など人々(五)に著せ給ふと聞きて、里に出で居し人々、空言しつゝ出で來たり。物いとおほく取りひろげて、賑はしければ、ことかたぐ〜の人は、いみじく羨みのゝしる。

〔語釋〕(一)米を穀にかけたるか
(二)拾遺集「夏衣薄きながらぞ頼まるゝひとへなるしも身に近ければ」
(五)此處誤あらんか
(六)仲忠兼雅と物語。家交換の約束。宮あこ祐澄等の噂。
〔考異〕(三)せられしかど—せられしかば
(四)されど—されども

かくて晦の日、三條殿に、「大將殿に聞ゆべき事あり」(一)とありければ、まうで給へり。おとゞ、兼雅「申すべき事ありてなむ。此度御勞(二)にてなりぬる近江守の家なむ、こゝに切なる用あるを、其處につかひ給ふ人(三)にこそあなれ(四)。用ぜらるゝ二條の院の東なる、こゝに領するにをとものせられよ」大將、仲忠「いと易きことなり。さらずも奉り侍りなむ。いとよく叶ひ侍る人なれば、此度は、右大臣ものしと思したりつれど、強ひて申しなし侍りぬるなり。さても、(五)身には過ぎ侍りきや。かの家三條の院のもとなる所になむ。(六)ことに狹けれど、いとをかしげに造りて侍る。宮あこにと思ひて侍る妻の料に侍るなるを、宮あこはおよすけたる心ばへなれば、(七)みも不益になむ」おとゞ、兼雅「さりとも代なくては如何。宮あこは、などかさも得させ給はずなりぬらむ」大將、仲忠「まづかうぶりをとにや侍らむ」おとゞ、兼雅「藏人の少將(八)の、弟まさりになり勝られぬべかめるかな。たゞ今の上人は、これ一人なめりかし。心もよげなり。(九)誰をか持たる」大將、仲忠「侍りしかど(一〇)、今

〔語釋〕(一)仲忠
(二)仲忠の庇護にて
(三)近江守は其方の家來なれば彼の家を我が二條院の東なる家と交換する樣に言ひつけてくれ　かの意なるべし
(五)近江守になりたるは過分の出世なり
(七)「そも」なるべし
(八)近澄が兄を越えて出世しそうなり
(九)誰を妻にして居る
(一〇)妻ありしかど
〔考異〕(四)あなれ—あんなれ
(六)ことに—御には

は侍らて、宮あこと二人、親のもとになむ。少將はあるまじき心ばへ(一)なれば、親など制し給ふなれば、「さて仲忠侍らずや」(二)とものすれば、「それは不意に賜へばこそあれ、きむちは、如何なる道、何によりて」となむ、切に責め(三)給ふなれど、思ひやまでなむ。心地もしらぬ(四)べき者なめりとなむ歎かる(五)」おとゞ、兼雅「侍從は誰よ(六)りかは。もし宮か」仲忠「知らず。氣色見給へむとてものせしかど、異筋こそとなむ。夜晝あそび(七)、物思へりしかば、かく世の短かるべ(八)ければにや、とこそ見給へりしか」おとゞ、兼雅「例(九)なる事なれば、げに嘆かれぬべくこそは。何れをかは」大將、仲忠「二の宮こそは御裳著給ひてこそは。いまだ小さくなむ」おとゞ、兼雅「御容貌などはいかゞ物し給ふらむ」大將、仲忠「かしこきは、われか人かとのみあるは、まさり給へるにこそ」北の方、俊蔭女「いでや、宮(一〇)はいとめでたくおはするものを。さるかたち族にて、御子たちにさへおはすれば、色あひ御髪筋などはいかでかは。又然る(一一)は見ね。髪のかゝりばこそあき給へらずなりにしかば、いかでか参

〔語釋〕
(一)非分の望をもち居る故
(二)近澄がいふ故
(三)親が
(四)誤あるべし
(五)「歎かるゝ」歟
(六)「誰をかは」にて誰を思ひ居るかの意なるべし
(七)誤あるべし
(九)仲澄の例もある事故
(一〇)女一宮
(一一)御器量よしの御家柄て

〔考異〕
(八)べければ―べかりければ

りて見奉らむ」おとゞ、兼雅「髪よく容貌よくある人は見しや」仲忠「この中に、ここにおはする宮(一)と、中の君と、御髪はありがたかりし。こゝの御様(二)なるはされど無し。かやうにものし給ふ」北の方、俊蔭女「あなむくつけや。容貌は年こそ。そがうちに、[illegible]るものともせで、うち捨てたるに、(三)かれは、女御の夜晝撫でつくろひ奉り給へば、いといみじや」大將、仲忠「御様になむ常に似たりと聞ゆれば、かれとはいとよきものを。藤壺の(四)こそ。宣ふ(五)この宮は、かの御様にてをかしげなるとなむ承る」兼雅「年老いぬるばかりの寶は無かりけり。昔なりせば、この人たち如何に見まほしからましと(六)」大將、(七)仲忠「こまがへらせ給へかし」おとゞ、兼雅「いまその駒や」(八)などて、「宮のあと(九)は誰をか」大將、仲忠「宰相中將(一〇)(一一)の三の宮にと思ひて侍る女をとなむ。かの君はた、さる御心も無かなれば」おとゞ、兼雅「それも用なかなりや」大將、仲忠「かの宰相こそ、(一二)この宮を、あらはれて、女御にも自らにも物せらるなれ」おとゞ、兼雅「(一三)わか君をば如何にせむとにかあらむ。(一四)おとゞみ

〔語釋〕
(一)女一宮
(二)俊蔭女に比すべきものはなし
(三)女二は
(四)こそ宣ふ―こそと宣ふ
(五)女二宮はあて宮に似て
(六)「と」衍文なるべし
(八)「などとて」なるべし
(九)「あこは」なるべし
(一〇)祐澄
(一二)女二宮を得たき由を公然女御にも仲忠にも語る
(一三)嵯峨院皇女、祐澄の妻
(一四)誤あるべし

〔考異〕
(七)大將―ナシ
(一一)宰相中將―宰相の中將

こふさいなりや。あなかしこ、(一)いとおふけなき人ぞや。わか君をば、わが一條にありし前よりこそ、取りもて來しか。又取らずや」(二)大將、仲忠「さらばかの家のことは、又宣ひて、申さむに隨ひて」(三)などて歸り給ひぬ。

畫詞　こゝは三條殿。

かくて右大臣殿には、(四)大殿の御方に、(五)大納言殿の(六)北の方わたりておはす。大宮、(七)「かゝる折にかく離れ居給へれば、(八)かしこは便なくおぼすらむ。(九)父おとゞも怪しからぬ樣に聞き給ふらむ。(一〇)何事によりたる御中ぞ」と宣へば、七君「何にかは。今は人と思はであなづれば、見え侍らじとて」大宮、(一一)「をさなき子どもあり、又たゞに物せられざめり。便なきこと。年のはじめに一人はいかでか。今宵はや渡り給ひね」(一二)と聞え給へど、いらへも聞え給はず。御子は五つなる男、三つなる女、はらみ給へり。(一三)女君はいとをかしければ、父君いとかなしうし給ふ。殿には人々の奉りたる物いと多かり。(一四)種松ぞ奉りたる米五石、炭五荷、女御の君の御かたにと(一五)宮

〔語釋〕
(一)祐澄を誘る也
(二)又女二をも奪ひ取るかも知れぬ
(三)「などとて」なるべし
(四)大宮
(五)忠俊
(六)七の君
(七)懷胎の折に
❾大宮、七の君の夫と中違せるを戒む。
(八)忠俊
(九)忠雅
(一〇)夫と中違ひしたるはどういふ譯ぞ
(一二)夫の許へ歸られよ
(一三)三つなる女の兒也
(一四)「種松が」なるべし
(一五)「にも宮の御方に」も歟

〔考異〕
(一一)をさなき子―をさなど

の御方に奉り給ふ。

かくて年かへりて朔日の日になりて、殿君たちよりはじめて、十所あまり一所、北のおとどの東面に竝み(一)立ち給ひて、宮おとど拜み奉り給ふ。しばしあれば宮たち四所、いと淸らに裝束き給ひて、女御の御前に參り給ふ。右大將うちつぎて參りて拜み奉り給ふ。宮たち、(二)大將殿も參り給ひぬ。あを色に蘇枋がさね著たるわらはべ、御裍まゐり物まゐりなどす。御酒參らむとする程に、十の宮に御土器もたせ奉りて、書きて出だし給へり。

正賴　けふのごと我思ふ人とまとゐしていくよの春を共にまち出む

とて大將に奉り給ふ。大將、宮をかき抱きて、土器を見てかく聞ゆ、

兼雅　まとゐして今日まつことはかはらじを春の來ざらむ年はありとも

と聞えて、土器度々になりぬ。

かくてみな內裏に參り給ひぬ、何方にも〳〵、上達部參り給はぬなきに、(三)藤大納

(十)新年の拜賀。仲忠、梨壺を訪ふ。正賴以下位階昇進。

〔語釋〕

(二)兼雅

(三)忠俊

〔考異〕

(一)竝み立ち給ひて—みな立ちて

言殿は、北の方籠りゐて御裝束えし給はねば、參り給はで、子どもうつくしみて居給へり。かくて上達部は、右近の陣に居きぬ。女御の御腹の御子たち五所(一)。右大將は御前に參り給ふ。例の御局どもの前をわたり給へば、后の宮の人々いふ、「かの仁壽殿の腹の御子たちを見よや。有心にこそあれ。女御子のうち連れたるに(二)こそはあめれ。(三)有所に、などこの名だたる容貌のみこ、大將に氣取られたる」また他人のいふ、「近衞づかさ(四)大將を、上にこそはあめれ」など口々に言ひ騷げど、見ぬやうにてわたらせ給ふ。一宮三品、帥の宮四品、今一所は無品、二所は色ゆるされ給へり。十の御子は未し。皆蘇枋がさねの綾のうへのはかま著給へり。宮たちは御所にさふらひ給ふ。

大將は(五)藤壺にまうで給ひて、孫王の君に、「參り來たるよし聞え給へ」と申し給へば、孫王「日頃は上の御局になむ。一夜(六)おとどの物し給へりしに、御氣色いとあしくて、その夜さりゐて出で給ひて、御局の人も寄せ給はず。さればえ聞えじ」と

〔語釋〕

(三)誤あるべし

(四)誤あるべし

(五)「御前に」なるべし

(六)正賴

〔考異〕

(一)五所—四所

(二)こそは—「は」ナシ

〔語釋〕
(一)梨壺の居られそうな時分なれば
(二)東宮
(三)誤ならんか
(四)女四宮
(六)御身の懷胎の事を東宮は何と仰せらるゝ

〔考異〕
(五)何とにか—などか

聞ゆれは、仲忠「人は無しや」孫王「たゞ一二人なむ。兵衛あこぎになむ」大將、仲忠「よし然らば」とて歸り給ひぬ。(一)わたり給ふとおぼえたる程なれば、梨壺にまうで給ひて、對面し給へり。君、梨壺「一日、人の宮は殿になど言ひしは如何なる事ぞ。(二)宮は聞召して、「上の、己を宣ひしに驚きてこそ、(三)よきやうにそこに給へるならむ」となむ」大將、仲忠「内裏にも然ぞ宣ふなるや。内裏にも、とまれ然ておはすか」いらへ、梨壺「いとみさをなりや。内々のこと知らねども」大將、仲忠「さも聞えねど、さてのみはいかでかはとて、えこそ」(四)君、梨壺「一夜召したり。まう上りたりしに、「院の御方をぞ、いかでかはと思ひきこゆれど、恐ろしく宣ひしのみ覺えて、えこそ聞えね」など宣ひし」仲忠「藤壺は何と(五)にかあらむ」梨壺「たゞ御簾の前に局して苦しげにてぞ。乳母たちなどは、「如何なるにかあらむ。こととあからめをこそし給はね。如何なるべき御中にかあらむ」とぞ嘆くなりし」大將、仲忠「あぢきなの嘆や。時めく人は然こそは。たゞの人も思ふ時には、片時外にとやは覺ゆる。(六)御

〔語釋〕
(一)東宮が御寵愛なき事はあらじ
(二)同じく懷胎せり
(三)「はやう」歟
●十 犬宮の百箇日の產養。仲忠、東宮の御子たちに玩物を奉る。

上をばいかゞ宣ふ。おとゞに申しゝかば、「宮は然など宣はすらむや。如何なることぞ」などなむいぶかしがり聞え給ふなりかし。君をともかくも、(一)いかゞ思召さぬ事は」梨壺「一日も「藤壺もかやうに(二)ぞあめる。年頃さもあらざりしことを」などぞ宣ひし」など宣ひてまかで給ひぬ。

【畫詞】こゝは梨壺。

かくて七日になりて、人々加階し給ふ。右おとゞ正二位、左大將殿從二位、左衞門佐四位、宮あこかうぶり得給ふ。女叙位、一階こえて内侍のかみ三位の加階し給ふ。

かくて賭弓に、左大將參り給はず。右負け給ひぬ。内宴はきこしめさず。

二十五日に出で來る乙子は、犬宮の御百日にあたりけり。此度は内侍のかんの殿し給ふ。やがて子日がてら參り給ふ。(三)やうは右大將は、東宮の若宮に、をかしき弄び物、まゐり物調ぜさせ給ひ、雛の絲毛、黄金造の車、いろ〱に調じて人乘せ、黄金の黄牛かけて、割籠ども、銀、黄金てうじて、入れ物いとをかしくて、

駒に人乗せなどしてまうけ給へり。

斯くてその日になりて、内侍のかんの殿、車六つして參り給へり。御前の物ども、(一)犬宮の御前には、沈の折敷十二、かねの坏ども。御前どもに樣々にしたり。檜割籠百。かくて右大臣は、昨夜つかさめしの夜なれば、左大臣も參り給ひぬ。(二)宮の女御の御前の物ども參れり。男宮たちの御前にも、例の御衝重、割籠、大宮にも御前の物して參れり。檜割籠にすゑて奉れ給へり。女御の君の御方の人々おなじかず、東宮の若宮たちの人々のも、檜割籠五つに、さての御方々にもみな奉れ給ふ。藤壺に檜割籠十たゞの十奉り給ふとて、女御の君の御文、

仁壽あたらしき年は、すなはちと思う給へしを、怪しく、このわたりの御文は見給はぬやうに承はりしかばつゝましかりつるほどに、(三)犬のかゝるわざする程になりにけるを、斯くなむとも聞えでやはとてなむ。

〈語釋〉
(一)正頼邸へ
(二)「うちの女御」歟

〈考異〉
(三)犬の―犬こその―犬宮の

萬世のゆくへも知らで思ひいづる小松にけふぞ子日しらする

と青き色紙にかきて、小松につけて奉り給ふ。藤壺は、踏歌の夜よりは下におはしませば、御消息も聞え、君だちも參り給ふ。檜割籠どもは殿上に出だし給ひて、御返、

あて宮けに覺束なきまで、日頃は御里の御文も見給へざりきや。對面にそ聞えさすべき。この頃はいかでかと思ひ給へつるになむ。さてこれは、

萬世の子日しるらむ姫松につくべきことの我もあるかな

まかで侍らむと思ひ給ふれど、心にもあらずのみなむ。

と聞え給へり。

かくて犬宮に、餅まゐり給ふとて、女御の君、折敷の洲濱を見給へば、例の鶴二羽、しかよろひて有り。松生ひたり。左大將殿の御手にてかき給へり、

兼雅百日がは今日としらせつ乙子をぞかぞへて千代となせよ姫松

〈語釋〉
(一)此の歌が丁度よき手本なり
(二)「うへの」は「かんの」なるべし
(四)仲忠
〈考異〉
(三)おとゞ—ナシ

とあり。女御、「いとよき物の師にこそは」(一)とて、

仁壽 生ひてさは百日がはにや なりにける子日を千代と かぞふべき松

内侍のかみ、

俊蔭女 かぞへつる今日をけふ知る姫松は千世てふことは習はざらめや

一の宮、

女一 姫松は ねのびを多く かぞへつゝ あまたの世をも 過すべきかな

とてうへのおとゞ、折敷ながら、外にさし出だし給へれば右大將、

仲忠 (二)姫松は おとねの かぎり 數へつゝ 千年の春は みつと 知らなむ

とてさし入るれば、他人は見給はず。(三)おとゞ宮たち、宰相の中將、良中將、藏人の少將、宮あこの太夫、みな讀み給へれど書かず。

右大將(四)は、東のおとゞの南の方にまゐり給ひて、宮たちの御前に沈の折敷、瑠璃の御坏の小きして、物まゐり給ふを、車二つづつ、銀、黄金の馬、さまぐ\いろ

〈語釋〉
(一)東宮第一の皇子　あて宮腹
(三)お餘りを大宮に食せしめんとて
〈考異〉
(二)程—ナシ
(四)わざを—わざをも—わざも

いろ取りたてて、仲忠「宮たち出でさせ給へ」と聞え給ふ。はじめの宮は若宮と聞ゆ。御年五つ。(二)程大きに、御色あひ、御髮の筋、母君に似給へれど、(一)これは宮の御樣にて、氣高くおはす。御髮背中ばかりなど、海松をつくりつけたる樣なり。綾かいねり一かさね、あはせのはかま、織物の直衣著給へり。弟の宮は四つ。御髮肩わたりにて、兄宮のやうなり。それも同じごと裝束き給へり。大將、二所ながら御膝にすゑ奉り給ひて聞え給ふ、仲忠「彼處に侍りつる子に餅くはせ侍るを、まづ聞食させて、(三)おろしをとてなむ。」若宮、「わが見に出でたりしかば、宮のかくして見せ給はざりし」二の宮、「見せ給はざりしかば、いみじう泣きしかばこそ見せ給ひしか。抱きしかば、うち落して騷がれき」大將、仲忠「さて如何御覽ぜし。憎げにや侍りし」宮、「いな、いと美しかりき。こなたに率て來などせさせしかば、ののしりて留めき。たゞ今抱きておはせよ」と宣へば、仲忠「たゞ今は、穢げにむづかしう、なめげなるわざ(四)をし侍れば、今大きになりなむ時に、召してらうたうし

〔語釋〕
(二)「かんの」なるべし
(三)「かんの」なるべし
(四)「うちの女御の君」歟
(五)「かんの」なるべし

〔考異〕
(一)いと—いとく

て使はせ給へ」宮、「いと嬉しかりなむ。あそぶ人無くていとあし」と宣ふ。大將手づから賄して、宮たちに物くゝめつゝ參り給ひて、車どもを、仲忠「雛に子日せさせ給へ」とて率て參りつる」とて奉り給へば、宮たちも喜びてもてあそび給ふ。

かくて常にをかしき弄び物は奉り給ひけり。

畫詞　こゝは東の大殿。

かくて大將は中の大殿にわたり給ひぬ。(一)うへのおとゞは、賭弓の料にまうけられたりしかづけ物ども、取りに遣はして、(二)宮たち三所にはうちき、はかま添へたる女のよそひ、宰相の中將、良中將には、例の裝束、藏人の少將、太夫の君には織物のほそなが、あはせのはかまなどかづけ給ふ。かくてみなかへり給ひぬ。

畫詞　(三)うへのおとゞ南面に御座よそひて、御供の人々など其處にさぶらふ。御みづからは、(四)宮の女御の君に御物語きこえ給ふ。こゝは百日の所。(五)うへのおとゞ、曉にわたり給ひぬ。犬宮は頸いとよく居て、おきかへりなどし給ふ。人

〔語釋〕
(一)兼澄
(二)この任命はむづかしかりしを
(三)道具類
(四)仲忠約束の家を兼雅に引渡す。

〔考異〕
(四)家ゆへぬしばかり所のかき—家ゆゑぬしばかりの所のかき—家の邊のしばかりそのかき
(五)入る—入らる

見ては、たゞ笑ひに笑ひ、うつくし。大將内裏に參り給ふ。司召には、宮あこ侍從に、(一)兵部の大輔は左衞門佐になり給ひぬ。さては人々、わたくしの御勞あり。右大將は、昔山よりおり給ひし馬添、一人は伊豫介、いと(二)難かりけるを、勞りなし給ふ。その時は、大學の允、所の衆にて有りし。かゝる程に、月たちて、二月になりぬ。右大將、三條殿にかの宣ひし家の劵奉り給へり。おとゞに申し給ふ、仲忠「仰せられし家奉り侍る。仰せ賜はりなば、これかくばかりの家は造り侍りぬべし。これは、かく小くくち惜しき所なれど、これをと仰せらるればなむ。やがて内の具(三)ぐして奉り侍るめり。目錄」とてその文奉り給ふ。見給へば厨子、辛櫃、几帳、屛風よりはじめて、人の家の具あり。藏に物おきたり。この家ゆへ(四)ぬしばかり所のかき、いと全くあたらしく造りて、檜皮の大殿、いとをかしげに造りて、たゞ這ひ入る(五)ばかりにしつらひたり。おとゞ、兼雅「この代の家は如何ものする。然るべくば春ものせむ」大將、仲忠「更に賜はら

〔語釋〕
(一)「ばかり」衍文なるべし
㊟兼雅、中君を三條の東の家に迎ふ。中君を俊蔭女に托す。
(二)兼雅が
(五)「物し給ふをもえ尋ねきこえざりつる」歟
(七)「身は」は「こゝは」の誤なるべし
〔考異〕
(三)這ひ入り—まゐり
(四)來たりしかどえも聞えず—來たりしかどもえ聞えず—來たりしかどえ聞えず
(六)かの三條の—かの件の三條の

じと申し侍り。「いかばかりの拙きものと御覽ぜられたれば、斯う仰せらるらむ」となむばかり(一)畏まり侍る」と申し給ひてかへり給ひぬ。

二月五日ばかりに、中の君の御許に、車三つばかり、著給ふべき御衣、御衣箱に入れて、御車に入れて、むつましき人五六人ばかりして、忍びて一條殿に、夜更けておはして(二)、中の君の御方に這ひ入り(三)給へば、人々裝束して、御たち四人、わらは、下仕など二人、君も白き衣などあまた著給ひて、御殿油などともしたり。おとゞきこえ給ふ、兼雅「さきに來たりしかど(四)、えも聞えずなりにき。志はさらに怠らねど、あやしく、童なりし時哀なりし人の、己だに知らで隱れにしを見つけて、それを哀と見つゝ年頃侍りつる程に、かくて物宣ふ(五)をもえ聞えざりつる。よし、それはしめやかに聞えむ。(六)かの三條の東の外に向ひたる家小きあり。そこにわたり給ひて、いと心易くてものし給へ。身(七)は、かくおほぞうなる所の、心を心にまかせ給はぬなれば、御迎にとてなむ」と宣へば、中君「俄にてはいかゞ」と宣

〔語釋〕
(一)「しろうて」歟

へばおとゞ、兼雅「なでふ物あらばこそあらめ。いさゝかならむ調度などは、こゝに乳母をとゞめ給ひて。今日よき日なり」と宣へば、中君「さらば」とて御車寄させ給ひて、載せ奉り給ひて、人給には、ある御たちなど載せたまひて、御包など入れて、いと忍びて、西の御門より出でて、かの殿に入りて見給へば、御座所あたらしく、淸げなる屛風、几帳など立てたり。取りつかひ給ふべき調度、なき無し。おとゞ、さてその夜は、其處にとゞまり給ひて、御まうけいと淸らにしたり。おとゞ、つとめて、殿のうちを見給へば、しらたて(一)被したる辛櫃二よろひ、錠さして、鍵結ひつけたり。さしあけ見給へば、かうの辛櫃どもなり。あるには、御衣ども樣々にし入れ、あるにはよき衣、綿、おの〳〵かみなどあり。御衣掛に被して、御衾など懸けたり。さらぬ物ども、つき、辛櫃など多かり。外には四尺の御厨子三よろひ、三尺の一よろひ、被したり。それにも錠鍵あり。あけて見給へば、男女の御調度二よろひ、被して、硯の具などあり。大いなる厨子、二よ

（語釋）
（二）「はづしてあり」歟
（三）「おものの具」なるべし
（四）中君
（五）「織物のほそなが」歟
（六）誤あるべし
（七）中君に
（考異）
（一）一つには燈臺―一つには調度燈臺

ろひ、一つにはから物、いとようし置きたり。（一）一つには燈臺の具などあり。壁代は白くてあたらし。寢殿の北に、あたらしき長屋あり。隔ごとのうちあまたして、贄殿、酢、酒つくり、漬物、炭、木、油などおきたり。藏一つ、それには、錢、米、よからぬ衣どもなどおきて、錠さして、鍵はづしにあり（二）御厨子所、おほとの具い（三）とよくしおきてたり。

おとゞ見廻りておはし給へれば、君、（四）昨夜おとゞの包ませておはしたる綾、かいねり、（五）織物、ほそながなど著給ひて、年四十に一つ二つ足らぬほどなれど、いとあてはかに見めきて、らうたげなる顔して、髪長に二尺ばかり餘り給へり。いとわかく見え給ふ。おとゞ、兼雅「留まりにし人のもとに、「其處なるむづかしき物どもは、乳母のやどりに殘さず取らせて、そこ〲をよく掃き淸めて、夜さりわたりね」と言ひ遣はせよ」と宣ふ。（六）昨夜より三日の家あるじの近江守、今日は御臺かねの御つきして、おとゞ、家の券奉りたる目錄そへて奉り（七）給ふ。兼雅「これは

（語釋）
（一）「我」は「わかき」の誤歟
（二）「北の方の御かたち容體」なるべし、一本「北のかたちきやうだい」―北の方に御方のちやうだい

確ならむ物に入れておき給へ。これをさへはかなくしなし給ふな。こゝには常にも得まうで來じ。近ければ、時々あからさまにこそまうで來む。今は我人にもお（一）はせず、親もものし給はず、有りつる樣にてあらむとな思ほしそ。彼處にある子の母、いと心よく有りがたき人なり。それは思ほし疎まず、語らひて物し給へ」とてわたり給ひぬ。

畫詞　こゝは中の君の御殿。

かくて北の方の御許におはして見給へば、裝束淸らにして、頭梳りて居給へれば、たゞ今聟取もしつべき女のやうにて、いとめでたし。住居、しつらひいふ方なく、くらき所にも北の方御かたちやうだい、（二）照りかゞやきて見ゆ。香のかうばしき事は更にも言はず。御たちもかく容貌あるは三十人ばかり出で入りすれど、なほ二十人ばかり絶えずあり。童、しもづかへも數多あり。この殿は一町なれど、年頃かい廣げつゝ、心に入れておほくの大殿造り重ねたり。北の方におとゞの聞え給

（語釋）
（一）中の君
（二）「め」衍文なるべし
（四）中君をわがものと思ひて
（五）これより自分の過去の事をいふ也
（六）父母が
（考異）
（三）有りし物ともなく—ありしものともなくとく—なりしものともなくて

ふ、兼雅「年頃いとほしと思ひつる人々すませて侍るなり。取りすゑたるこの人(一)いとはかなき人なり。父宮の、多くの財、よき莊どもなど持給へめ(二)りしかど、年頃口入れざりしほどに、有りし物ともなく(三)、みな失なひてけり。有りし人もたつきなくなりければ、皆出で去にけり。斯う哀なる人になむ。其處にも、ことに思す人もなかめるを、私の人にしても、見え聞えずとも、思しやりて心しらひ給へ」北の方、俊蔭女「若き人(四)の、親物し給はず、御口入るゝ人もなくては、いかでかは。さてもよくこそ。さしもあらで有りぬべかりける人も、世を過ぐらむやうも知らで、親とてありし人(五)も、呪ふ様に、「惡しかるべくば、よかれと思ふとも惑ひなむ。よかるべくば、恐ろしき物の中に棄てたりともあへなむ。たゞ神佛にまかせ奉る」とゆゝしく言はれて有りし程に、うち續きて(六)亡くなりにしかばこそ、あさましかりしか。まして、御子たちの御子と言はむ人は何事をかは」と聞え給へば、兼雅「げに然ぞあらむ。女子を數多持たらぬこそ安けれ」など宣ひて、兼雅「今日はかゝる日

（語釋）
（一）嵯峨院の女三宮
（二）女一宮
㊃兼雅、女三宮を訪ふ。
（三）女三宮
（四）俊蔭女
（六）俊蔭女の方に
（考異）
（五）見出でて—見つけて

になしてむ。宮とぶらひ奉りてまうで來なむ」とて宮(一)の御方に參り給ふ。

畫詞　こゝは左大將殿。御方に一の宮(二)通はし奉らむとおほして、寝殿の南遠く離りて、池山近き所、月見給ふべくとて、高くいかめしき家造られたり。西の對、廊あり。御たち十人ばかり。童べなどあり。

(三)宮は、いとらうらうじう、氣高く、ものものしき顏して居給へり。おとゞ宮に、兼雅「年頃おぼつかなくて侍りつるを、近くておはしまさする時だに、しばしば參り來まほしけれど、この侍る人(四)は、彼もまだ小く、己もまだ世の中も知らざりし時より侍りて有りし程に、子なむ有りけるを知らせで、いさゝかなる事に倦じて隱れにしを、年頃はえ求めいでざりしに、辛うじて見出で(五)て侍りしかばなむ、あからさまにとてまうでにしまゝに、やがてまかり(六)留りにしかば、如何に怪しく思されけむ。さて、この年頃まかり避る所もなく、宮仕も有りしやうにも仕うまつらで、籠り侍るにならひたるに、例ならずならはぬ様に思はれ侍れば、又

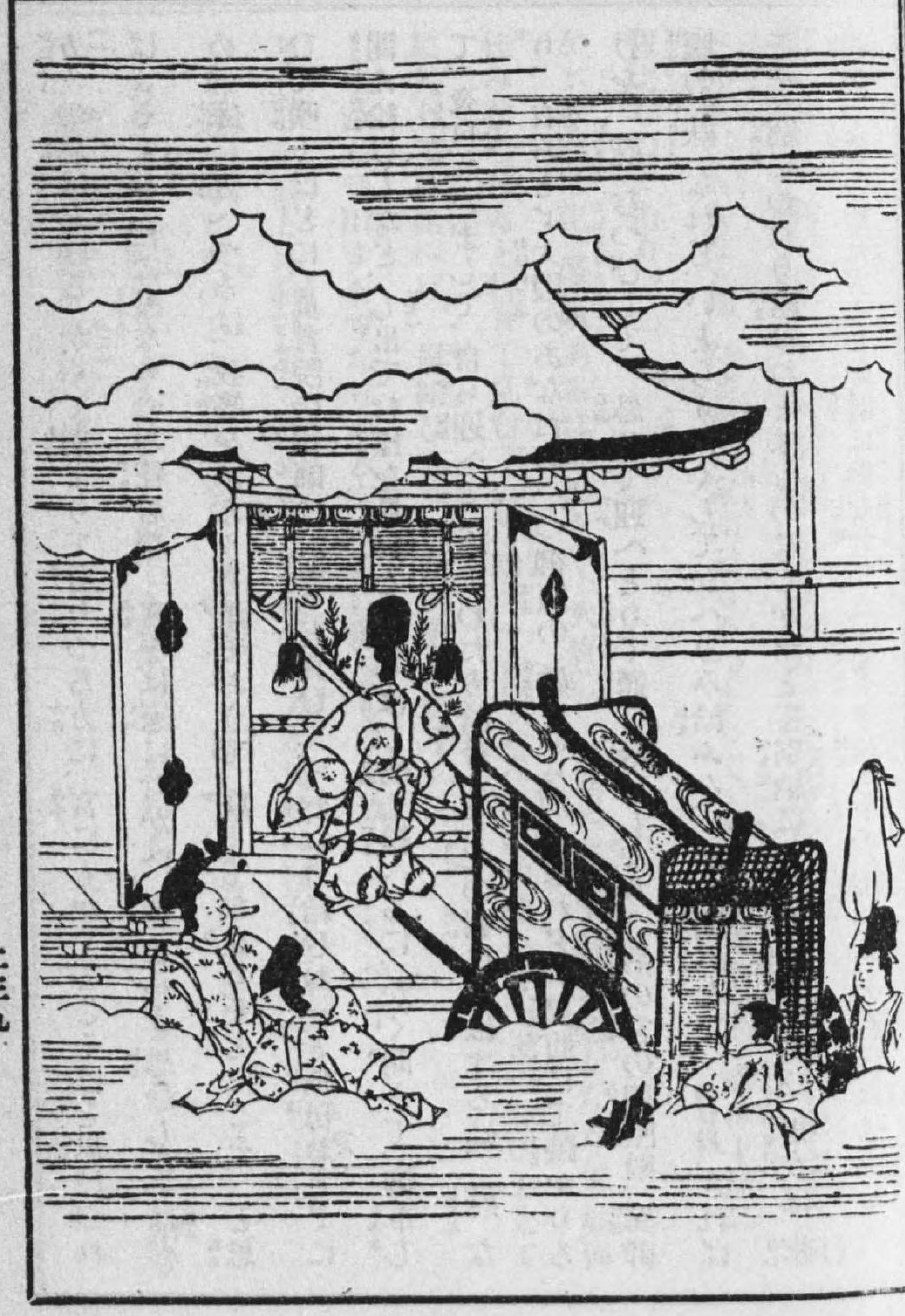
〔語釋〕
(一)仲忠は私の子どもしからぬ男なれば
(三)女一宮一人を守り居るのも
(四)親たる私が年がひもなく
(五)兼雅は俊蔭女が有名なる美人故一人を守る事になりしならん

〔考異〕
(二)侍れど—侍るなれど

如何なる隱れなどかせむとて、いと心深く、有りがたき心ゆるひも侍らず。息子の仲忠の朝臣此處に侍れば、親になむし給ふ。それが見思はむ事もつゝましく。おのづから御覽ずらむ、(一)あやしく兼雅が子にはあらぬものなれば、わかく侍れど、(二)いとまめに、(三)一所につき奉りて侍るめるも、(四)をさなく此處彼處にまかりありかむを見むが恥かしさになむ。今も昔のやうに侍りぬべけれど、「え」など聞え給へば宮、女三「何か、中納言も、昔は其處の御有樣にもおとらず聞えしかど、この宮の名だたり給へる人なれば、いとまめになられたるにこそ。(五)こゝにこの内侍のかみの、世の中にまぎれなきものにものし給ふなれば、一人になりにたるにこそ。他人のえしづめざりしぞや」など御物語おほくして歸り給ひぬ。

畫詞 こゝは三條殿、宮の御方。

かくて一條殿には、夜更けて、おとゞは車ながらさし寄せて、下り給ひしかば、かたゞゝの人えしり給はざりしを斯く物はこび、家淸めなどするにおどろきて、



(十五)一條に殘れる兼雅の妾たちそれ〴〵分散す。

〔語釋〕
(一)同居の女たち
(二)以下女たちの心
(三)女三宮と同居して居てさへ
(四)誤あるべし
(五)「え」衍文なるべし
(七)兼雅の仕方を見ん
(八)忠こそが
(九)誤あるべし、「右のおとゞの大い殿の上の御おとうと」歟
(一〇)此妹を別屋に引取りたり
(一一)梅壺
(一二)わが生みたる嵯峨院の皇女

〔考異〕
(六)おとゞに―おとゞを

方々の思ほしける、(二)かくて集まりて有りつる方に、宮にもかくてこそはと思ひつれ(一)ばこそ、さてだに漫なりつる住居を、宮をば家にむかへ奉らむと思ひしを、(四)はじめの家に(三)迎へつるは、我等をばえ(五)うち棄ておきて、斯くてな在りそとにこそ、と思ひて嘆くほどに、眞言院の律師は、家など買ひて、「わたり給ひね」と伯母(六)おとゞに聞え給ひしかど、(七)し出でむ樣を見むとて、しばし物し給へるに、かく聞きて、御車して、(八)夜自らいまして、自ら迎へて、率てわたり給ひぬ。北の對におはするは、妹なり。(九)右おとゞ大殿のあなたの一つ御腹の妹、はらからなれど、異腹にて疎かりけるを、妹むつびして、忍びて迎へとりて通ひ給ひしなり。后の宮の御匣殿、異御腹の妹なれど、いとらうたくしてかへりみ給ふを、かく聞召して、御匣殿「さればこそ、竊にわたり給ひねとはものせしか」とて別納に(一〇)わたし奉りつ。(一一)更衣は、宰相の中將のわたくしの殿に御女(一二)むかへ奉り給ひて、西の一の對におはするは、

(十六)兼雅仲忠、一條の空屋敷を訪ふ。

〔語釋〕
(一)兼雅の心

〔考異〕
(一)まづ北の―中の

宰相ばかりの人の女、わかくて奉りたるなりけり。それは兄などのありければ、迎へつ。少將の妹は、大將殿二條の院のかごやかなる家に、しばしとてすゑ給へれば、人もなし。たゞ宮の家司どもあつまりて、妻子ひき率て、或は下屋に、曹司しつゝあり。

かゝる程に花盛興あるに、おとゞ、大將に、兼雅「一條の人氣も無かなるを、如何住みなしたると行きて見む。いざ給へ」ともろ共におはして、(一)まづ北のおとゞに入りて見給へば、居給ひし所にかの君の御手にて、

中君いもせ川すまずなりぬる宿ゆゑに涙をもなほ流しつるかな

とあるを哀と見給ひて、西の對の更衣の御方を見給へば、居給ひし所の柱に、

梅壺近かりし雲のおりゐて見るべきに風ふく塵とまどふ身はなぞ

とあり。(二)げに院にさふらひしを率てまかでにしぞかし、あないとほし、と見給ひて、同じ一の對を見給へば、

宰相上 故郷におほくの年を待ちわびてわたり川にもとはじとやする

とあればまして、哀何方へならむ、いかでこれが返事せむ、と思す。東の二の對に入りて見給へば、その對の前に、さま〴〵(一)の對にあたれる柱に、

來ぬ人を待ちわたりつる我なくてまがきの竹よ誰をはらはむ

と有るをいとあはれと見給ふ。ふるものと言ひし所とおぼして、一の對に入りて見給へば、居給ひし柱よせに、

來つゝ見しやどにぞ影もたのまれし我だに知らぬ方へゆくかな

と(二)ざればみ書きたり。おとゞ、兼雅「この人何方ならむ。母宮の御許にはたあらざめり」と宣へば、大將、仲忠「仲忠なむ二條の院にわたし奉りて侍り。いま、彼處廣うなりぬべかなれば、そこにかの物したまふが、遊する人なくて、さう〴〵しくし給へば、迎へ侍り」と申し給ふ。おとゞ、兼雅「恥かしく若くよかりし人(三)とて、よからぬこともあらむものを」大將、仲忠「いと目やすくて、らうある人にこそ物し

〈語釋〉
(一)誤あるべし

〈考異〉
(二)ざればみ―草に
(三)人とて―人ぞ

給ひけれ。とかくあるべき事は、皆物して侍り」おとゞ、兼雅「あないとほしや」と宣ふ。

かくておとゞ、廻りて(一)見給ひて、昔はかた〴〵に、我も〳〵と淸らをつくして住みしものを、今日はかい掃ひて人もなし、花は色々に咲き亂れたり、さすがに見給ふに哀に思さるれば、うち泣きて、

兼雅 花だにもむかしの色はかはらぬをまつときゝにし人ぞ散りぬる

と宣へば大將、仲忠「これにも」とて、

仲忠 年を經てまつをもちらす宿なれば春なる梅の嘆かるゝかな

と申し給へば、兼雅「あな思ひぐまなや」と宣ひて、御修理すべきことなど宣ひて、かへり給ひぬ。

〔畫詞〕こゝは一條殿。

かくて北の方に、おとゞ、兼雅「年頃一條のいぶかしかりしかど人々の苦しげにて

〈語釋〉
(一)「見給ふに」歟

〔語釋〕
(一)俊蔭女の方にのみ
(二)女三宮へ兼雅が奉らぬ意と見えたり、此處脫文あるべし
(三)大宮など
(四)兼雅が

あらむと、いとほしかりつれば物せざりし。人も無しと聞きてまかりたりければ、いとこそ哀なりつれ。廣き家に、屋どもおほかるに、人はみな住みあまりてこそ侍りしか、人音もせず、おろし籠めて、草木ばかりぞ有りつる。方々に書きつけたること」など聞え給へば、北の方、昔の京極を思して、かく書きつけて見せ奉り給ふ、

俊蔭女待つとては尾上の瀧ぞながれにし君すみよしにいかゞありけむ

とて見せ奉り給へば、兼雅「身をつみてのみはた」と宣ふ。おとゞは、たゞこゝ(一)にのみ物し給ふ。物などは奉(二)れ給はねど、かくておはしませば、わが御方のもの、御莊々より持てつみて奉り、(三)御はらからの宮たちよりも、かく旅におはするなりとて、とぶらひ聞え給へば、これもその御徳にぞあるべき。中の君は、贈物何も〳〵、少しづつ物わけ奉り給ふ。夜は(四)おはすべくもあらず。時々宵の間などになむ。

㊆梨壺退出。兼雅仲忠迎に參る

〔語釋〕
(一)臺間枕席に侍するをいふ歟
(二)東宮
(三)其方も行くに及ばず

かゝる程に、梨壺まかで給ひなむと聞え給へり。右大將ものし給へるにおとゞ、兼雅「宮のまかでむとあめるは。如何なるべきことにか。かゝる人は帳臺(一)の宿直などしてこそは。許されむとすらむやは」大將、仲忠「いかゞ然侍らむ。先つ頃たびたびまうのぼり給ひけるものを。(二)宮、「藤壺もかやうにてぞ」などこそ宣ひけれ」おとゞ、兼雅「いさや、うたて聞ゆる世なれば、人もやうたて言ひなさむとてぞや。車どもなどして迎に遣らむかし」とて御車とゝのへさせ給ふ。兼雅「一條はたゞ今恐ろしげなめり。此處にてこそは、ともかくも」とて、宮の御方の西おもて、西の對かけて、一條殿の御調度ども運ばせ給ひしつらはせ給ひて、御車十二、御前こゝかしこ取り合せて、數知らず多くて、御迎に宮の御方の御たち二十人ばかり參る。右大將、仲忠「かの御迎に參り侍る。おはしまさむとする」と聞え給へば、おとゞ、兼雅「何しにかは、(三)そこにも。內裏の聞召すにもことなる樣にもこそ」大將、仲忠「いかゞ參らざらむ。女は、さるべき人の追從するにつけてこそ、やんご

となくも。なほおはしませ。人の見る所も、宮のきこしめす所も侍り」と聞え給へば、おとゞ(一)、兼雅「右のおとゞの引き連れて參り給ひて、騷がれ給ふこそ」大將、仲忠「惜まれ給へば(二)めぼくあれ。まかでますとて無期の勘事にもあづかれ、それによりて親兄弟の勘ぜられむこそいとやさしかるべけれ」と、澁り給ふを强ひてそのかし立て給ひて參り給ひて、御局におはすと聞召して、宮(三)「まかでぬべかなり」とてわたり給へり。二大將物し給へば宮は、東宮「こゝにぞまかでらるべかりけれ。かの左大將、いと珍らしうこそ。今年對面せざりつるかな」おとゞ、兼雅「甚だかしこきことに侍り。今は身を捨ててこもり侍りつれ(四)、久しう内裏にも參らず侍るを、今宵、この女の童、まかでむと申して侍りつれば、かく無德に侍れば、從ふ下人も侍らねば、車につきてまかでさせむとて」宮、うち笑はせ給ひて、東宮「いとありがたき車添つかふべき人にこそは(五)。無德なるにはあらで、有り難きにこそ。さても斯く疎からぬ近き衞は、昔も今もえあらじを。いと有り難きことなりや。こ(六)

〔語釋〕
(二)「めぼくあれ」は「めいぼくあり」なるべし
(三)東宮
(四)「つればゞ」なるべし
(六)梨壺は

〔考異〕
(一)おとゞ—ナシ
(五)こそは—「は」ナシ

こには、この頃ならずともまかでられなむ。又此處にものする人も(一)、暇乞ふをと思へど、この頃は神事のころなれば、げにいかでかはとてなむ」など宣ふほどに、夜更けぬとて急ぎてまかで給ひぬ。かくて南の大殿にまかで給ひぬ。御まうけ、殿の政所より、いと淸らにて參れり。おとゞ梨壺と物語きこえ給ふ。兼雅「この夢(二)のやうなることは、宮はまめやかに思したりや。前々も、世人もよからぬ事言はるれば、これをなむ、夜晝思とするを、今宵ほのめかし給へるは、如何に思したるぞ」きみ、梨壺「知ろしめしゝは如何は。とかく思ほすらむことは知らず。まかでむと申させたりしかば、まうのぼりて侍りし」おとゞ、兼雅「世の人のすることを如何は」君、梨壺「さやうになむ」おとゞ、兼雅「さらばいと嬉しかなり。後はとまれかくまれ、然とだに宣はゞ(三)(四)、恥かくれぬべし」など御物語し給ひて、やがて其處にとまり給ひぬ。つとめて、御物(五)まゐるとておはする程に、宮より御文あり、

〔語釋〕
(一)あて宮
(二)懷胎の事
(三)東宮が我子と認めて下さりさへすれば

〔考異〕
(四)然とだに—しるとだに
(五)御物—御湯

東宮 昨夜は、怪しく急がれしかば、こと〴〵にものせずなどなむ。さりぬべき昔
も有りしを、人々に恨みらるゝ、今しも哀にて、まかでられにしをなむ。今
宵は、

近くても見ぬ間もおほくありしかどなど春の夜をあかしかねつる

空言人になりぬべしや。さらば、思ふやうに平(一)かにてを早う。
とて、うすき紫の色紙にかきて、梅の花につけて奉れ給へるを、おとゞ取りて
見給ひて、兼雅「今ぞ心(二)落ち居ぬる。この御文は、櫛の箱の底によくをさめおき給
へれ」とて御使に酒賜びて、物かづけ給(三)ひて、いみじくいたはらせ給ひて、御返、
梨壺 昨夜は、夜更けぬと人々いそがれしかば、心あわたゞしくてなむ。空言人と
か、これはかりなむ。まことには、

出で入ると餘所には見つゝ雲居にておほくの日をも過し來(四)しかな

何か、さふらひ侍りても。

〔語釋〕
(一)早く安産せよ
〔考異〕
(二)心—心地
(三)給ひて—給ひ
(四)來しかな—てしかな

ときこえ給ふ。左大將、檜割籠など調じて奉れ給へり。おとゞは寢殿(一)にわたり
給ひぬ。

畫詞 此處は梨壺まかで給ふ。こゝは梨壺、おとゞも御物語し給ふ。大將殿
の奉り給へる檜割籠、御前にあり。御たち、取りわたし食ふ。檜皮の屋ども
多かり。

〔考異〕
(一)寢殿に—寢殿へ

國讓（上）

梗　　概

(一)正頼の家に同居せし人々の別居。　太政大臣季明病篤し。正頼と實忠とを招く。遺言。薨去。(三)あて宮退出。涼の接待。(四)涼の訪問。彈正宮の訪問。大宮、近澄の身上を仁壽殿女御に嘆く。(五)仲忠の訪問。皇子に讀書を授け奉るべき約束。(六)大宮等涼の贈物及び殿內を見る。涼、堀川の邸に移る。(七)季明の葬送。(八)あて宮文を實忠に贈る。實忠の返事。(九)實正兄に昔あて宮を見し時の事を語る。東宮より昭陽殿へ御文。昭陽殿の狂言。(十)あて宮の使復命。東宮よりあて宮へ御文。御返事。(十一)あて宮わが襖殿に歸らんとす。實忠の噂。仲忠の噂。忠澄等兄弟交代にあて宮の爲に宿直せんとす。あて宮歸る。(十二)あて宮の假御殿の有樣。仲忠約束の手本をあて宮に奉る。あて宮東宮と文贈答。あて宮の髮を結ぶ前にて侍女たち實忠の噂をす。孫王の君、兵衛、木工等の容貌性質。(十三)女一宮、女二宮、女三宮を伴ひてあて宮を訪ふ。仲忠母子の琴の噂。髮の長さを較ぶ。孫王の君姉妹、上野宮の噂をす。(十四)あて宮女一宮等奏樂。仲忠、女一宮の迎に來りて立聽く。女一宮歸らず。仲忠再び迎に來る。なほ歸らず。仲忠、あて宮の方に宿す。(十五)梨壺皇子を産みたりとの報知によりて仲忠夫婦歸る。あて宮、藏人に梨壺の樣子を聞く。(十六)梨壺腹の皇子の產養。兼雅皇子を酷愛す。梨壺の母女三宮の勢やうやく盛なり。(十七)仁壽殿女御、女一宮に女二宮の保護を托して內裏に歸る。(十八)あて宮の安產及びあて宮腹の皇子立太子の祈禱。(十九)忠雅

㊀正頼の家に同居せし人人の別居。

〔語釋〕
(一)正頼邸
(三)今明日中にも女御后になり給ふべきあて宮が

〔考異〕
(二)給ふべかなり—給ふべかめり—給ひぬべかなり
(四)げに—ナシ
(五)さらば—さて
(六)六の君、五の君
(七)七君

正頼兼雅仲忠等昇進。人々の御禮廻り。㊁實忠、あて宮の許に禮廻りに來る。あて宮實忠に山を出でて舊妻と同棲せんことを勸む。

右の大殿(一)には、御聟の殿ばら、宮ばら、御子どもも、上達部に物し給ふは、ひろき殿おもしろく淸らに造りて、萬の調度、寶おきつゝ、「殿のゆるし給はねば、えわたり給はで、狹き住居をする事」とむつかり給ふ。右大將は、仲忠「藤壺まかで(二)給ふべかなり。(三)今日明日、女御后がねなどの、對に住み給はむには、いかでか上にはのぼり侍るべき。西の對しつらひて、其處にわたり給へ」と聞え給ふ。おとゞ聞召して、正頼「(四)げに年頃もむつかり給ふなるを、今は、(五)さらば、殿々にわたり給へかし」と宣ふときこしめして、殿ばら、宮ばら喜び給ふ。源中納言殿も限なくよろこび給ひて、まづ出で給ひなむとすれど、藤壺待ちつけ奉らむとおぼす程に(六)左の大殿、式部卿の宮よりはじめ奉りて、移ひ給ひぬ。(七)大納言殿は、まだ出で給はず。西北の町なり。宮たちは、北の方のおほん親につきて、みな出で

給ひぬ。男君たちも、御妻につきてみなわたり給ひぬ。右大將は、家あれどまだ造らで、西の對にわたりて、住み給ひぬ。さて人々のあがれ給ひし後は、右大將殿のわたりて住み給ひし町(一)を、女御の君に奉り給へれ(二)ば、さて移り給ふ。今まで、殿ばら、宮ばら住み給へりし町をば、藤壺に奉り給ひ、いま一町をば、(三)あなたの北の方に奉らせ給ふ。御子どももおほく外へわたり給ふやうなれど、たゞ此の殿のめぐりに、あるは向に、あるは傍に、遠しとて、一町、二町を離りつゝ住み給へば、同じやうに、御門の隣といふばかりになむ。

かゝる程に、(四)大納言殿、北の方、まだ對面し給はねば、移ろひもえし給はず、侘びおはす。忠役「あやしうはかなき事にて、この月頃怨じ給ひてかゝる事」となげき給ひつゝ、御文たび〳〵奉り給へど、御返なし。たち返り聞え給ふ。忠役「彼處に待ちわたりなむとするを、人の忌むといふなるを、たゞあからさまに

〔語釋〕
(三)大臣上
(四)

〔考異〕
(一)町を―町は―との町を
(二)へればさて移り給ふ―ナシ

わたり給ひて歸り給ひねかし。かく年月隔てて怨じ給ふべき事とも思えぬを、人の空言いふにつけてやは。明日よき日なるを、必ず。早わたり給へ。いかでか一所と聞え給へれば大宮、「げにいと見苦しきことなり(一)。」など聞え給へば、御返に、七君「いは物し給はむ。かう事なきやうに見え給ふこそ」など聞え給へば、御返に、七君「いざ、さらば渡らむ。ゆゝしげなる人かな」とぞ聞え給ひける。さてそれもわたり給ひぬ。かなたには女御の君、大宮の住み給ひし北のおとゞには、女君たちひき率て、西の二の對かけて住み給ふ。大將殿の(二)御方は、東の一二の對、廊かけてすみ給ふ。西の一の對には彈正の宮すみ給ふ。東の一の對の北面、よくしつらひて、少將の妹むかへてすませ給ふ。藤壺のえ給へる町は、左の大殿住み給へるを、外へわたり給はむとて、御簾かけ、壁代、御帳、御座など、いと淸げにしつらひ給へり。式部卿の宮の御方も、御簾などかけ替へ給へり。對どもには然もせず。

〔語釋〕
(二)女一宮

〔考異〕
(一)ことなり―ことなろり

㊃太政大臣季明病篤し。正頼と實忠とを招く。遺言。薨去。

（語釋）
（一）季明
（二）照陽殿
（四）親ある時さへ
（五）實忠
（七）實正、實頼
（考異）
（三）がたしーがたう
（六）交ちはずー交るはず

かゝる程に、藤壺、「たゞ今出で給はむ」と宮に聞え給へれば、東宮「梨壺も、その程は過してこそまかでつれ。などか其處にしもかねて急ぎ給ふ」と聞え給ふ。

畫詞　こゝは藤壺。

かくて太政大臣（一）は、御年高くなり給ひにければ、そこはかとなく惱み給ひて、心細くおぼす事どもありければ、季明「君たちみな公に仕うまつり、不益なるもなし。たゞ我うち棄てて亡くなるとも、右の大殿のものし給へば、顧み思ひてむ。たゞうしろめたきものは宮の君（二）、實忠思ふに、冥路も往きがたし（三）。ある世にだに（四）、女子は、よろづの事むつかしくやさしきものなり。宰相（五）の朝臣、おほやけに仕うまつりぬべく、容貌、心、人には劣らざりしかば、わが家繼ぐべきはこれかとこそ思ひしか。あさましく幸なくて、物にあやまれる樣に、心魂もなくなりはてて、世に出で交らはず（六）なりぬる事」をなむ萬に思ほえて、民部卿（七）の君、中將の君などに聞え給ふ、季明「日頃經るまゝに、心地のえあるまじくのみ思ゆるを、いかで右の大殿に對面

（語釋）
（一）實忠に
（三）「たると告げに」なるべし
（四）實忠の閑居
（考異）
（二）如何なるにかー如何なる事にか
（五）思ひー思う

せむ。然なむと申し奉れ給へ。さては宰相（一）に、わが非常の時にも逢ひ見で歇みぬべきか、いかに思ひたるぞ、世の中にかなしきものは親をこそ言へ、そが上も知らず、さてもありぬべかりし身をも捨ててあるは如何なるにかあらむ（二）、哀になりはてぬべき人かな、斯う心地なむ弱くなりにたること（三）、告げにやり給へ。今一度だに見るまじきか」と宣へば、君たちいみじう泣き給ひて、右の大殿には民部卿の君（四）、小野には中將まうで給ひて、有りつる樣をくはしく聞え給へば、宰相とばかり物も宣はで、いと久しく忍びためらひて、實忠「惱み給ふとは、承はりて久しくなりぬるを、いかで參り來むとは思ひ給ふれど、世の中にまだ侍りけると、人の見むも、有樣なども其の人にも侍らず。人々の見給はむことなど思ひ（五）給へつゝなむ。かく重く惱ませ給ふなるを、いかでか參らざらむ」とて夜にかくれて出で立ち給ふ。

民部卿は右の大殿にかうかうなど申し給へば、參り給へり。太政大臣、御脇息に

（語釋）
（一）父の居る處の屏風の後に
（二）昭陽殿
（三）「女御」は「女子」なるべし

押しかゝりおはしまして、内に請じ入れ給へり。御物語など聞え給ふに、中將の君、實頼「宰相の朝臣參り侍り給ふ」と申し給ふ。おとゞ、季明「此方に呼べ」と宣ふ。宰相、右のおとゞさふらひ給へば、更に出で給はず。度々召せども參り給はず。おとゞ（一）おはします御屏風の後方に、忍びてさふらひ給ふ。（二）宮の君參りて、おとゞにつき奉り給ひて物し給ふ。右のおとゞに聞え給ふ。季明「月日の經るまゝに病のまされば、なほえ侍るまじきにこそあめれ。何か、人の惜むべき程にもあらず、又命の惜かるべきにもあらず。七十にあまりて、公にも仕うまつりぬれば、理。たゞ思ひ侍ることは、子二人が上をなむ思ひ侍る。實頼も、まだかう下臈に侍れば、うしろめたけれど、殿の物し給へば、さりともと頼み聞えたり。（三）女御の上は、人に聞えおくべきにもあらず。たゞ宰相をなむ思ひ侍るに、冥路も安くもまかるまじく、萬の所の關となる心地し侍るを、心もて身を徒らになしつる人にこそはと見侍れど、なほこれなむあたらしく、うしろめたう見侍る。折あらば、これ顧みさせ給へ。世中思ひ捨てて侍れど、これ徒らになし給ふな」と泣く〳〵聞え給ふ。右のおとゞ、正頼「いとも〳〵珍らしくこゝに（一）參り給ふなるを、などか御前にはさふらひ給はぬ。年頃、昔よりいかで志ふかしとは、（二）此の君をこそ思ひ聞えしか。又侍る所に物し給ひしかば、哀にむつましきものに思ひ聞えしかども、あやしう年頃（三）山里に籠りものし給ふらむは、世中に倦じたまふ事やあらむ。なでふ御心ありてか、など思ひ給ふるを。されど、年頃これかれものし給ふこと侍るとき、早くより思う給へ志し侍りしものを、雜役などにも使ひ給へ、など御息聞えたりしに、御返り見給ひしかば、思ほす心あるやうになむ見給へし。それは、此の宮にさふらふ（四）もののまだ里にさふらひし時なむ、（五）物など宣ひけるを、さらに知り給へざりける。そが中にも、宣旨侍りて「源中納言に賜へ」と仰せられしかば、（六）背かぬものなれば、（七）然思ひ給へしを、宮より重く勘當せられしかば、參らせ侍りしなり。これにこそなむ、人々おほく恨ども侍りける。宰相の君におき奉りては、

（語釋）
（一）實忠が
（二）實忠
（三）實忠は正頼邸に住み居し故
（四）あて宮
（五）實忠が懸想せしを
（六）勅命は背かれぬものなれば
（考異）
（七）思ひ—思う

〔語釋〕
(二)季明の御頼なくとも
(三)わが子どもよりも
(六)遺產處分の證書
(七)其の次なる邸に
(一二)次の詞へつゞく
(一三)袖君也

〔考異〕
(一)委しく―委しう
(四)思ひ―思う
(五)己―我
(八)さし次ぎたるに―さしつぎたるは
(九)莊―莊々
(一〇)國々なる―國々にあなるに
(一一)し給ひたる―したまひおいたる

正頼に委しく(一)言ふ人侍らましかば、何か、ともかくも思ひ給へまし。(二)仰せごとなくとも、昔のことをさらに忘れ侍らず。いはむや、更にかく仰せらるれば、よか(三)らぬ男どもよりもいかで、となむ(四)思ひ給ふる」など聞え給ふ。おとゞ、いとかしこくおほんしほたれ給ひて、季明「などか實忠の朝臣の、辛うじて物したなるを、此方には物せぬ。すべて、己(五)には逢ひ見じ、と思ふ心やある」と宣へど參り給はねば、右のおとゞいといとほしと思す。さておとゞ民部卿に筆取らせ給ひて、御處分(六)の文かゝせ給ふ。季明「大きなる殿三つあるを、この住み給ふをば宮の君に、いま一つさし(七)(八)次ぎたるに、大きなる莊(九)どもの國々なる(一〇)、昔より中に寶にし給(一一)ひたる細かなる物そへて、源宰相に、いま一つの殿に、女のつかひ給ふべき調度(一二)加へて」と宣ふ。季明「これは宰相の朝臣の忘れにし人の女子一人(一三)あらむ、今は大きになりたらむ。あさましう心あやまりしたる樣にて、よろしく聞えし女子をも、徒らになしつめるを、それに取らす」と宣ひて、中將の君などには、所々に領じ

〔語釋〕
(三)實忠の母
(六)後妻を迎へずして
(七)實忠の妻
(九)眞砂君

〔考異〕
(一)得給ふそれは―え給ひければ
(二)御覽―御名―御判
(四)思う―思ひ
(五)思う―思ひ
(八)ものしにし―ものせし
(一〇)めり―めりき
(一一)さへ―さへは

給ふ所あまたあり、何も〱、民部卿など、みな同じごとく得(一)給ふ。それは、この二所皆え給ひて、斯く書かせ奉り給ひて、御名押し給ふ。右の大殿にも御覽(二)ぜさせ奉り給ふ。さて、よろづの御物語聞えさせ給ひて泣きたまふ。源宰相もいみじう泣きたまふ。御前には、いまだ出で給はず。さて、右のおとゞまかで給ひぬ、宰相、おとゞの御前に參り給ふ。おとゞ萬の御物語し給ふ、季明「世の中といふもの、事につけて、とある事かゝる事あれど、知らぬやうにて經ればこそあれ、はかなき女の上などにつけて、身を徒らになしつる事」など宣へば、宰相、實忠「何か、さやうなる事にも侍らず。(三)殿の上かくれ給ひにし後、世の中心憂く思う(四)給へしかば、すべて世に侍らじと思う(五)給へしなり」おとゞ、季明「それは、我もいみじく悲しと思ひしかばこそ、(六)また人をも捿ませで、年頃一人はありつれ。そも〱、かの子ども持たりし人(七)は、何方かものし(八)にし。年頃は、たゞ行人男子(九)は、はかなくて失ひつめり(一〇)。女子(一一)さへ如何にしなしてし。

〔語釋〕
（三）實忠の舊妻は
（五）元は三條に居たりしに
（六）「言ひしちがふ」歟
（七）祐澄
（九）仲忠

〔考異〕
（一）いと―けに―ナシ
（二）にも―をも
（四）御昔人―「御」ナシ
（八）籠られ―こもり
（一〇）其處にこそ―そこか
（一一）ありける心地―ありけるこころの心地

よりもいと哀にてあり經めれば、子といふもの無かめり。如何にせよと思ふぞ。など宣ふ。（一）宰相、實忠「知り侍らず。かの侍りし所にも今は物せずとなむ承る。世の中心憂しと思ひ給へしかば、たづね侍らず」おとゞ、季明「いと怪しかなり。はや求めさせよ。すべて、現心もなき人にこそあめれ。まづは、我かく世の果に、年頃ありて逢ひたるにも、ことに悲しとも思ひたらざめるをや。いとかなしき人にもあるかな」と宣へば、（二）涙を雨の如くこぼす。御前なる人、涙を落さぬなし。民部卿實正「此處の（三）御昔人は、（四）志賀の山本、比叡の辻のわたりに、いとをかしき山里侍り、其處にこそ、年頃物せらるゝなれ。三條にものせられけるに、（五）これかれ好きごと言ひちがふ（六）宰相の中將など、（七）消息絶えずありければ、それに思ひ倦じて籠られたるとなむ（八）承りし」宰相、右大將殿の中將なりし時、（九）もろ共に往きたりし所は、然ば其處にこそ、（一〇）若き人の聲せしは、わが女にやありけむ、あやしく、人は住むものから、音せぬ所、とは思ひしぞかし、あさましく物覺えずありける心地（一一）

〔語釋〕
(二)我が如き位に上ることは出來まじとの意歟
(三)袖君を季明の子分にして
(六)實正
(八)東宮

〔考異〕
(一)在所―在所を
(四)あなり―あり
(五)その―この
(七)こそは―「は」ナシ

かな、如何にをかしくも怪しくも思ひけむ、など思ほすに、哀に悲しく覺ゆること限なし。おとゞ、季明「はや、その人の在所(一)たづねよ。その女子をだに、徒らになし果つな。朝臣はた、不益の人なめれば、たゞ今のごとわが位はえ有るまじかめり。(二)わが子になして、宮仕をも、よろしからむ事もせさせよ、とてなむ、些なる物どもも物する」など多くの御物語などし給ふ。

かくて、宮の君に聞え給ふ、季明「此の家に、開けつかはぬ納殿五つあなり。(四)その(五)二つの屋々には、やんごとなき物どももあらむ。三つの屋々には、人のなくてえあらぬ物ども、品々置かせたり。莊々あまたある中に、遠江、丹波の國、尾張、信濃、飛驒なるは、ことに勝れたなるを渡せしぞかし。これをだにな失ひ給ひそ。それぞ、御この東宮に侍る君の少し情なくぞ。民部卿心廣くうしろ安き人なり。それぞ、御口入れ奉りてむ。われを忘れざらむ人は、こゝをこそ(六)はとぶらひ申さめ(七)」など宣ふ。宮の君の聞え給ふ。昭陽「自ら御覽じけむ。宮(八)も、昔は斯くもおはしまさどり

〔語釋〕
(一)「給へつる」歟

き。この藤壺といふもの參りてなむ。己ならぬやんごとなき人の御爲も、斯くのみなむ。世中に經侍る年頃の世の、人のとありかゝりと承ることには、殿の御事を思う給へつる、(一)胸つぶれておそろしく侍りつれ。かゝる事宣はすなる、いみじく悲しきこと。え免れおはしまさぬものならば、もろ共に率ておはしましね。萬のたからを賜ひても、おはしまさゞらむ世には、いかでか侍らむ。萬のものも女領ずれば片時に無くなる物にこそ侍るなれ」と泣きまどひ給ふ。おとゞ、季明「何かそは。いとよく物し給ひなむ。今は、ことなる事なくば、な參り給ひそ。わがありつる折、牛車供の人具して參りものし給ひつる時だに、覺束なかりつるものを、人笑はれにて出入し給ふ、いと見苦しかならむ」など聞え給ふ。

かくて萬のあるべき事、後の御世の事など書かせ給ひて、御位かへし奉れ給ひ、御髮おろし給ひてかくれ給ひぬ。二月晦太政大臣の御とぶらひに、左右の大將、一つ御腹の右の大殿の君たち、日々に參り給ふ。

㊂あて宮退出、涼の接待

〔語釋〕
(一)季明の同母弟
(三)忌引
(五)女四宮
(六)照陽殿
(七)日頃他の妃妾たちを顧みぬはあて宮あればなりけりと
(九)照陽殿

〔考異〕
(二)おはすれば—おはせれば
(四)給ひつらむ—給へらむ
(八)御心持給へるにぞ—心持給へるこそ

かくて右の大臣殿は、一つ(一)御腹の弟(二)におはすれば、殿の君たち、おとども御暇(三)になり給ひぬれば、藤壺も、夜さりまかで給ひなむとす。宮も此度はえとゞめ給はで、その日は入り臥し給へり。御物語し給ふ。東宮「斯うてあり習ひて、物言ひ觸るゝ人なくてあらむ。梨壺さへまかで(四)給ひつらむこそ」君、あて宮「院の御方(五)、左の(六)おとゞのなど物し給ふめり。そがうち式部卿宮のも、今日明日ものし給ひぬべかめり」宮、東宮「そこにものし給はざらむ程(七)に人に物言はじとぞ思ふ。そこにするなりけり、とていとゞ言はんものを。院のは、いとかたじけなく哀にも思ひ聞ゆれど、恐ろしく荒々しき御(八)心持給へるにぞ。女は、何心なく物思ひ知らぬ樣なるこそ。かつは、そこを惡み給ふこそ、然らでも有りぬべき事なれ。さてはこのさ(九)がな者こそ、今はいとらうたけれ。心を人に見ゆべくもあらず、見る目もことなる事なし。子なども今はいかでか。同胞ども、數多あめれども、いとよくもあらざめり。親のものせられつる時こそ、さてもありつれ、いかに心細く侘しからむ。

〔語釋〕
(一)父季明
(三)「べき」は「べし」歟
(五)あて宮の兄弟
(六)仲忠が梨壺と
(七)あて宮の入内と共に

〔考異〕
(二)歎くと聞きしものを—歎きしと聞えつれば
(四)とこそ—ナシ
(八)言ひに—「に」ナシ
(九)つけて—かこつけて
(一〇)身ならば數知らず—身ならねば數知らずとも

いかに訪らひてむ。故太政大臣の(一)、いといたう歎く(二)と聞きしものを、我だに心止めて思はずば、惑ひぬべき(三)」君、あて宮「實忠の朝臣の爲には、聞きにくき事言ふとて、もとより消息も聞え給はざりき。里にまかでゝ、人はうたて言なすとも、實忠の朝臣とふらひに遣はさむとこそ(四)」宮、東宮「それならぬこそ。疎からぬ中らひなる中にも(五)、此の人々どもは、妹の爲ぞ疎なるや。さるは、おなじ親にこそあめれ。右(六)の大將の、同じ腹にもあらず中もよろしかるまじきが、兄妹哀に思ひためれば、誰々にも心見えてあらまほしくこそ」君、あて宮「あまた侍らねばいかでか。昔里に侍りし時、はかなき言いふ者あまた侍りしを(七)、すなはち皆忘れぬめりしに、實忠の朝臣今に忘れず、宮仕をもせず侍るなれば、あるが中に、心長かりけるよろこび、言ひ(八)に遣はさむとなり」宮、東宮「心長さは嬉しや。さらばこゝには賴もしかなり。そこには、此の事今は思し遣るにつけ(九)て、退出をのみせらるれば、苦しくこそ。とてもかうても、諸共に見るべき身(一〇)ならば、數知らずもあらせまほしき

を、然はたあるまじければ、いと苦しくなむ」とて例の御車むかへ人參り給へれど、ゆるし給はず。宮、東宮「例の、まかで給ひてば、とみに參られで、待たせ給はむとや」君、あて宮「何か、いかなるにか侍らむ。此度はあやしく心細くのみ侍れば、え參るまじきにや」とて、

あて宮 草の葉に露のわが身し消えざらばまつにも何かかゝらざるべき
(一)　　　　(二)

宮、東宮「あなゆゝしや」とて、

東宮 露のよもまつにかゝれば貫きとめて風にも消えぬ玉とこそなれ

と宣ひて、夜更くるまてまかで給はず。大殿、君たち、前に懲り給ひて、ものも宣はず、待ちわび奉り給ひ、たちかへりつゝ御消息申させ給ふ。君、あて宮「まかでて思ふやうに侍らば、かく承ればしづ心も侍らじ、いと疾く此度は。たゞ知らぬをのこゝなむ」宮、
(三)　　(四)

東宮 散る花も夢にみゆなる春の夜を君外にてはいかに寐よとぞ

〔考異〕
(一)身し—身も
(二)まつにも何か—まつも何かは
(三)待ちわび—待ちわづらひ
(四)をのこゝなむ—をこなむ

わりなくこそ」君、

あて宮 花だにも同じ春にてはかなきをわかれて外に行くをこそ思へ
(一)

と宣ひて、夜半過ぎて曉までまかで給はねば、おとゞ、忍びて御局におはす。君だちは曹司々々に立寄りつゝ物宣ひ、わらは大人は、裝束き立ちて待ち奉れど出で給はねば、君、あて宮「さらばまかで侍りなむ。大殿參りて侍る、心もとなくて侍らむ。今幾日、色のものなどして、立たむ月の程には、夜の間は忍びて參り侍らむ」と聞え給へば、宮、東宮「いと嬉しかなり。人の參るやうにて、出し車にて、夜必ず、さらずば相思はれざりけりとなむ」とて辛うじて出で給ひぬ。おとゞおはしぬれば、まかで給ふ。御車二十、大人四十人ばかり、わらは、下仕八人、ひすまし二人。おとゞ上達部三所は御車にて、兵部大輔の君よりはじめて、皆御馬にて、世の中に目あきたる人の限は四位も五位も、無きなし。六位はものとも見えず。御車、御前乘りつゞきて、源中納言殿の住み給ひし、西の一の對の、
(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)(九)

〔語釋〕
(四)父正頼
(五)喪服をきて
(七)其方を薄情なりと思はん
(九)顯澄

〔考異〕
(一)わかれて—わがなは
(二)夜半過ぎて—夜半うちすぎて
(三)物宣ひ—物し給ふ
(六)夜の間は—夜の間に
(八)辛うじて出で給ひぬ—辛くして起き給ひて

南の階に御車よせて、左大辨(一)の君、宰相中將(二)の君と御几帳さして、おとゞ、左衞門(三)督の君、御車の簾ひきあげて、おろし奉り給ふ。こと君たちは、みな御車のもとに立ち給へり。御車には、四位五位(四)にだにかゝりて寄せたり。思ひ(五)給ふさま、親同胞の御前なれど、めでたき事物に似ず。御裝束、御かたち、物の香など、限なくめでたし。御車には兵衞の君、孫王の君などぞさふらひける。昨夜より、大宮、女御君(六)、ゐ立ちて待ち奉りておはします。源中納言殿(七)の北の方は、この御方に入れすゑ奉り給ひて、かはりて出でむと思して、まだ物し給ふ。おとゞ、上達部も、南の廂に、こと君たちは簀子におはするほどに、明くなりにたり。おとゞ、正頼「自らしもまうでで有りぬべけれど、怪しく人に許され(八)給はねば、路のほど腹汚き人もやと思ひて、まうでたりつるに、遲く出で給ひつる、いと心もとなくなむ」藤壺、あて宮「みな人まか(九)でたる頃しも」とて暇を賜はざりつれば、辛くして、とかく聞えてなむ」おとゞ、正頼「前に催し申して騷がれければ、煩はし

〔語釋〕
(一)諸澄
(二)祐澄
(三)忠澄
(四)「四位五位ふさにかかりて」歟
(七)涼の妻今宮
(八)人に妬まれ居る其方故

〔考異〕
(五)思ひ給ふ―思ふ
(六)女御君…おはします―女御君たち待ち奉り給ふ
(九)まかでたる―まかで給ひたる

さに、物も申さでこそは待ち奉りつれ」と宣へば大宮、「あさましう久しく、一昨年の秋參り給ひにしまゝに、對面せざりつる。かゝる事なくては、えこそ出で給はざめれ。何ぞと見む(一)。かき出で給へれ」とあれば、わらひ給ひて、あて宮「見苦し」と聞え給ふ。女御、仁壽「まかで給ふによりてこそは。內裏にも昔は、後々にこそ。まかづるを喜にも」大宮、「いで、なほいぶかしや」とて御衣をかきあげて見奉りて、大宮「此度も(二)同じものにこそは」と聞え給へば君、あて宮「いづら、この幼き人々は。まづそれをこそ、いつしかと」大宮、「渡りはじめ給ふ所なれば、三日までとて。若宮はいと大人しくなり給ひたり。今一所は、すゞろなる聲をうち出だし給へば、いと心もとなうて(三)」君、あて宮「然言はせ奉るまじくこそは(四)。心もとなくはいかでか」と宣ふ。明くなりゆくまゝに見給へば、此の大殿の造り樣、しつらひ、さらに言ふべくもあらず。やがて出で給へるまゝに、御座ばかりをぞ敷きかへて、夢ばかり取りおとし給ふ物なし。たゞ御みづからぞわたり給へりき。

〔語釋〕
(一)懷胎の子は男か女か鑒定せん
(二)矢張男子なるべし

〔考異〕
(三)いと心もとなうて―一所はよにもとて
(四)まじくこそは―まじくてこそは

源中納言殿は、沈の小辛櫃のをかしげなるに、鋌、鍵、とり具して奉り給ふ。涼「これ、よき隙なれば奉りてむ。こゝに待てつかひ持る物どもなり。まかり渡るべき所にも侍るなれば、何かはとて。たゞ預からせ給へ」とて、涼「さて、こゝにおはし(一)ませ給へ。寝殿はいと悪かめり。これは、もとのをば(二)取り違へて、かの吹上といひける所のを、取りに遣りて奉るなめれば、いと住みよし。この西なる屋どもなんども、彼處(三)のなれば、對の樣になむ。そが中にも、とかく善かるべきにせさせたる所なめり」と聞え給へば大宮、女御の君、「げに、いかでか。これが樣なる所はいづくにもあらじ。いとものよくこそは(四)、このすぢあたり給はすめれ」と宣ふほどに、源中納言(五)の君は、涼「やがて三日の參り物仕うまつりてまかでむ」と宣ひて、東の對を行事所にて、家司ども、紀伊守などして、御饗仕うまつる。男にも女にも、おはします限、御折敷九つ、下﨟には六つ四つなど(六)づつすゑ渡したり。かゝる程に、紫の色紙にかきて櫻の枝(七)につけたる御文、宮より、御使藏人なり。

〔語釋〕
(一)「おはしまさせ給へ」なるべし
(二)誤あるべし
(三)吹上の建物なれば

〔考異〕
(四)よくこそはこのすぢあたり給はすめれ—よくこそこのすぢあたり給ふめれ—よくこそこのすぢあたり給はす
(五)の君—殿
(六)など—なんど
(七)枝—花

あけて見給へば、

東宮「たゞ今の程は如何となむ。かくてはえ有るまじかりけり。何せむにまかでさせて、妬うこそ。

吹く風に花はのどかに見ゆれどもしづ心なきわが身何ぞも

前々いかでありけむとこそ。」

とあり。おとゞ、正頼「この御手こそ久しく見ね」とて見給ひて、正頼「いと善くなりにけり」とてさし入れ給へば、女御の君、仁壽「かしこけれど、この御手こそ右(一)大將の御手におぼえ給へれ」藤壺、あて宮「たゞその書きて奉られたる本をこそは、男手(二)も女手もならひ給ふめれ。それ昔(三)のぞとて、今の召(四)すなれど、まだ奉られざめりしかば、それおどろかせ(五)などぞ宣はせし」女御の君、仁壽「御文かゝむとてなりと聞きしは、然にやあらむ」おとゞ、正頼「萬(六)のこと、人には勝らむとなれる人にこそ」とて、宮の御使に饗し、物かづけ給ふ。御返、

〔語釋〕
(一)仲忠の手に似て居る
(二)漢字をも假名をも
(三)其手本は昔かきたるなればとて
(五)催促せよ
(六)仲忠をほむる也

〔考異〕
(四)召すなれど—召すなめれど

〔語釋〕
(一)「夕つ方」の下「源中納言」あるべし
(三)仲忠は

四涼の訪問。彈正宮の訪問、大宮、近澄の身上を仁壽殿女御に聞く。

〔考異〕
(二)さまも「も」ナシ

あて宮今の程は旅にて、しづかなるにとなむ。

とて、

あて宮花よりもしづかならぬは君やさは風もふきあへぬ心なるらむ

と思う給へるこそ。

とて奉り給ひつ。

かくて三日過してかへり給はむとて、女御の君おはす。男は、はじめのはおはし代りつゝ、珍しがり聞え給ふ。かくて夕つかた、(一)直衣姿にて、いとめでたくて參り給へり。簀子に御座敷きわたしたり。あこ君、簾のもとに御几帳たてて、御袖さし出でたれば、中納言、涼「昔の人にたがはず」など聞ゆ。見ればいとあてになまめきたる人の、右大將のさまも(二)同じ樣にもてなしたる人の、(三)彼はこよなうなりにたるなれど、これもいと花やかに鬢つき色きはなどいとめでたし。あこ君して、涼「かく承らましかば、さる心もすべう侍りけるを、曹司に侍りしかば、身の程にと

〔語釋〕
(一)「きゝ」は「磨き」歟
(二)「さすれど」なるべし
(三)御無沙汰なりとて御咎めもあるべきかと憚り思ふ
(四)「いて」は「いちへ」なるべし
(七)あて宮をいふ
(八)東宮へ
(九)あて宮へ

〔考異〕
(五)とう―たふ
(六)とう―たふ

て、葎のやどにて侍りつるを、俄にわたりおはしましたれば、思ふ様にはあれどむつかしげになむある」と聞え給へば藤壺、あて宮「千年を重ねてきゝ(一)給ふと、これよりはいかでか」と宣ふ。御聲もいとほのかにて聞ゆれば、涼「申しつがぬにしも、この度ばかりは心し侍りなまし」とて、涼「參り侍るときは、かならず御消息聞え(二)さすなど、人も聞えつがねば、(三)聞えさせずとて宣はせやすらむと、つゝましくなむ」(四)御いて、あて宮「交らひするは、(五)とう給ふべきことの(六)とう給はぬこそ、あやしき事に。君の宣はざらむには、志ありとも、あこきなどはいかでか」中納言、涼「常にこそ聞えさすと思ほゆれ。御返は今日のみこそなむ」と聞え給ふ程に、彈正宮おはしませば、立ち給ひぬ。宮は御簾のうちに入り給ひぬ。女御の君に、忠康「などか彼方には。十の親王も、こゝにもとめ奉り給ふめり」と聞え給へば、仁壽「こゝに、いと(七)珍らしき人に對面賜へるはや。彼方になほ、暫しおはしませ」と聞え給ふ。彈正宮、忠康「げに珍らしうこそは。(八)宮に參る時は、すゞろなるやうなれば、(九)御

〔語釋〕
(二)引歌未考
(四)忠康
(六)誤あらんか
(七)仁壽殿方の内々へも入れざりしが
(八)妻を定めて
(一一)近澄が
(一二)我慢出來ずば如何なる非常手段をもせんと思へども

〔考異〕
(一)もえぞ聞えず―をもとし聞えず
(三)宿守に―やどりもりに―やどりとりに
(五)子にて持たる―こそ
(九)其處にも―そこには
(一〇)おのれ何せむに侘びぬ―おのれせむなう―おのれがせむなり

消息もえぞ聞え(一)給はず。例の覺束なうこそあらめと思へば、これよりもしば〳〵聞えさせず。先つ頃も、參らせ給へりと承りしかど、え聞えさせず。(二)「我をまつちの」とかや云ふ様になむ」と聞え給ふほどに、夜さりの御物御前ごとに參る。御折敷など取りかへてまゐる。かくて彈正宮は、忠康「今つねに參り來む。うしろめたきこと侍れば、(三)宿守に」とて立ち給ひぬ。大宮、「この犬の餅まゐりし日、この(四)宮の怪しきことを宣ひしはまことか」と聞え給へば、あて宮「知らずや。何事にかは」大宮、「世の中に苦しかるべきものは、若き人の好いたる、(五)子にて持たる、うたてき事なりや。見苦しういみじきものを見るこそ、いと命長くなりなまほしけれ。この近澄といふ人の、童よりあやしく好きて見えしかば、(六)そへ物になりぬべし、とて、(七)彼處にもゆるし給ばでありしものの、(八)人さだめてありしかば、目やすしと見しを、如何しけむ、(九)其處にもあらで、たゞ彼方にのみありて、(一〇)おのれ何せむに(一一)侘びぬ。そのいふ様は、(一二)「心ひとつにえたへず

ば、如何にも〳〵と思へども、親のさきに命なき人あらはなれば(一)、(二)かく申すに、その如くなし給へとにはあらず。佛神にも、この事な思はせ給ひそ、と申させむ(三)などこそ」など言ひつゝ。常に喜び樂しむを見るこそ、いと世に經まほしけれ」と聞え給ふ(四)。藤壺、あて宮「何事をいかに思すぞ。すゞろなる事、あるまじき、思ひ初むるも、よからぬわざにこそ」と宣へば、大宮「知らずや。その言ふこと、いと恐ろしや。この中らひにこそは、あめれ」女御の君、仁壽「いづれぞ。(五)一の宮をこそ、人よりはことに思ひ(六)聞え給ふべかめれ」宮、大宮「あなうたてや。いかでか。そは、(七)若宮にこそあべかめれ。まだ西の對におはせし時、かいまみをなむしたりしかば、(八)一の宮と御碁うち給ひしを見奉りしまゝに、いとのち(九)ながうなれしかば、かくてやむるならむとぞいふ」女御の君、仁壽「一の宮も、昨日今日侍從(一〇)なりし人につきてこそはあるなるに、上もこよなう(一一)思ひ聞え給ふめりし。かゝるわざ、帝のしおき給ふめりしかば、外に(一二)だに斯くてこそは、我も、とこそは(一三)思ふらめ」宮、大宮「あ

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)我が願を成就せしめ給へと祈るに非ず
(五)女一宮、仲忠の妻
(六)近澄が
(七)女二宮
(八)女二宮が
(一〇)仲忠
(一一)仲忠を
(一二)他人も帝の聟になる上は我もなられぬ筈なしと

〔考異〕
(三)などこそ—などとこそ
(四)給ふ藤壺—給へば藤壺
(九)のち…とぞいふ—いのちながらなれしかばかくてやかならむとぞいふ
(一三)こそは—「は」ナシ

なめざましや。(一)一口にてもはた。人は位かは。有樣するわざなどこそ。(二)がくしらは、(三)みかどをも、とるかどなるらむをばなににかは。あやしく、見聞けば、物し給ふ人にこそ物し給ふめれ。(四)てしにもゆるされたるやうによき人もあしき人も、いかでこの人に物を言ひわたらひにしがなと思はれ給へつるは如何なる(五)にか。上達部、君だち、(六)近く親にものし給ふめれど、同じことをもろ共に申しなるゝにのこ(七)りなり。かしこ(八)のみならざんめるに、若き人の昨日今日出で立つに、なさるゝ事、さらぬは心よから(九)ざるれど、見る顔かたちに、わけて皆なびき從ひてこそ。かく有り難き人の、(一〇)皆ならひはててや。うたていかでかはすらむ」藤壺、あて宮「かしこくものし給ふなれば、然聞え給ふにこそ。はかなきことを、心一つに思ひて、はかなくなる時は、いと幼しや。よう心し給へと聞ゆるやう有り。いづれとにあらねど、(一一)そが中にも如何なる人にもなり給ひぬべかめるものを(一二)」と聞え給へば女御の君、仁壽「こゝにも思ふ樣有りや。衣更してば參りなむとするを、この宮たちを

〔語釋〕
(一)近澄と仲忠を一つ口に言ふべきに非ず
(二)此處の詞解しがたき處多し誤脫あるべし

〔考異〕
(三)みかど…をば—みかどをもけふことなからむをば—みかども今日ことなからむをば—みかどをもとかうとならむをば
(四)てし—てゝ—てら
(五)なるにか—なる故に
(六)近く—近くは
(七)のこりなり—このなり—こちなり—父のちなり—このちなり
(八)のみならざんめるに—のはならざめるに—のならざらんめるに
(九)よからざるれど—上からざると—よからざるれ—よからざるなど
(一〇)皆ならひはててや—皆ならひはつや—皆ならひはてや
(一一)そが中にも—ナシ
(一二)ものを—ものぞや

〔語釋〕
(一)手許におきては留守の間が氣がかりにて

〔考異〕
(二)そらめき—うらみ—うちみ
(三)如—如く
(四)參りて—參るとて
(五)ことをおのれは—ことをれは—ことをれは
(六)ゆるさず—「ず」ナシ

こそ内裏に率て奉らむとすれど、(一)まうのぼりたらむ間のうしろめたく、一の宮の御許にと思へど、人の心も知らず、大將もそらめき(二)給ふべければ、めのみさまなる心もやとて、御方にとこそは思ひ給へつれ。かたはなれたる馬の如(三)あるべかなれば、如何はすべからむを、所々參りて(四)、いと憎げなる事をし給ふなれば、思ひこそ煩ひぬれ。又あやしき事も有りや。みこふさいの人も、ことやうなること(五)を、おのれはゆるさず(六)、例のわざせむとぞあなるや」大宮うち笑ひ給ひて、大宮「若きものの狂ふをだに思ふところに、なほ一の宮の御方にあづけ奉り給へ。その大將は帝の聞召さむにもよからずと思さじ。そが中に、宮にこよなう勝り給はゞこそ」女御の君、仁壽「いさや。人の心を知らねば、恐ろしうこそ。内裏にと思ふがうしろめたきは、この宮たゞ如何にや如何にと宣ふなり。御文も常にあれば、あな恐ろしや。后の宮のようし給はぬところになむ」と宣ふ程に、夜更けぬれば、みな御殿籠りぬ。あくるつとめて、宮より御文あり。

〔語釋〕
(二)あて宮へ

〔考異〕
(一)何なり—何なる

東宮 昨日たちかへりてと思ひ給へしかど、しづかならずと有りしかば、心あわただしくやとて。今宵は、

ありとのみ見ゆる寐覺のわびしきにひとりある頃の夢や何なり(一)

なほ一人はえこそ。夕暮などは、いと便なき心地して、大空をのみなむ。藏人「こと聞え給へり。御使、兵衛の君の兄、藏人の内許されたる、御前に參り、あて宮「庚申にこよひはたゞ一所御遊し給ひつゝ、御殿籠らずなりぬ」と聞ゆれば、あて宮「そはありつらめ」御返、

あて宮 さればこそは聞えさせしか。

程もなく忘れにけりな夢にても思はましかばありと見ましや

あな心みじかや。

と聞え給ひて、「祿はうるさし。後には」と宣へば、笑ひて參りぬ。

かゝる程に一の宮より御文(二)あり、

〔語釋〕
(二)里に御下りの今でさへ御目にもかゝられぬ故
(三)古今集「しづやしづしづのをだまきくりかへし昔を今になすもよしもがな」
(四)其方へ參りて犬宮を先づ見たしと

〔考異〕
(一)などかは—「は」ナシ
(五)して—「て」ナシ

(五)仲忠あて宮を訪ふ。皇子に讀書を授け奉るべき約束。

女一いと珍らしうまかで給へるを、いつしかとこそ待ち聞えつれ。などかは(一)それよりも宣はざらむ。いかで對面も疾くもがな。こゝにてさへ(二)覺束なきまゝに、「昔を今に」(三)とのみなむ。こゝには立寄り給ひげもなきを、其方に參り來む、宣はむまゝに。

と聞え給へり。

あて宮 承りぬ。まかで侍りてはすなはち、(四)珍らしき人をもまづとこそ思ひ給ふれど、こゝにこれかれ物し給へりけるに、聞えさせ承るとなむ。わたらせ給はむとか。いかでか。御まもりは恐ろしかめれど、今其方にを。

と聞え給ふ。

かくて藤壺、あて宮「宮に參りて、犬宮ふとかき抱き奉らむ」大宮、「こゝにえ見ざりしを、餅食はせに物してこそ。それにだに、疾に出だし立てられざりき」女御の君、仁壽「この頃は、いとをかしくなりにたり。起きかへり、暫し這ひなどして、(五)

人見てはたゞ笑ひに笑ひて、白くをかしければ、前に伏せて、常に守らへて(一)ぞあなる」(二)藤壺のいらへ、あて宮「(三)疎き人にこそは。そが中にも、こゝにも(四)何か宮は(五)隠し給はむ」女御の君、仁壽「宮は誰にもかくし給はず。何事も思したらざんめり」(六)藤壺、あて宮「さておとゞには」仁壽、いであなうたてや。女にだに隠さるゝものは」など宣ふ程に、(七)右大將夕つ方、直衣姿にてまうで給へり。例の簀子に(八)褥參り給へり。居給へるを見れば、(九)(一〇)見え給ひつる人にいとこよなし。藤壺なほこれはこよなくもはた、と見給ふ。大將、仲忠「さいつ頃も參りて侍りしかども上にのみなむ。御局の人も參らせ給はず、と承りしかば、覺束なくてなむ。斯くておはしませば、今(一一)はむつかしがらせ給ふまでなむ」(一二)と聞え給ふに、孫王の君していらへさせ給ふ、あて宮「承りぬ。時々訪はせ給ふをなむ、(一三)人心地は」大將、仲忠「いとやすき事にこ(一四)そは。常に參り來ば、如何なる人の御心にか」なんど聞え給ふ程に、(一五)若宮たち二所ながら、乳母たちなどして、大殿の御方よりおはしたり。かの大將の奉り給

〔語釋〕
(三)疎き人にこそは見せぬ事もあらんが
(四)我には
(五)女一宮
(七)正頼
(九)涼をいふなるべし
(一一)うるさく思召す程屢參上すべし
(一三)誤ならんか
(一五)あて宮腹の皇子たち

〔考異〕
(一)守らへてぞあなる—まもらへてぞある
(二)藤壺のいらへ—かれをいかでとく
(六)たらざんめり—たらずとなむ
(八)ものは—「もの」ナシ
(一〇)給ひつる—給へる
(一二)なむと—など
(一四)こそは—「は」ナシ

ひつる馬車ども、持ておはして見せ奉り給ふ。若宮は、いとおとなしく、紐ついさしなどしておはす。母宮、いとめづらしう哀と見奉り給ひて、あて宮「心地こそ頭白くなりにたる樣なれ、かく大きになりに給ひたれば。御手習などはし給ふや。何わざかし給ひつる」と問ひ聞え給へば若宮、一宮「何わざも、せさする人もなければ、(一)大將、かしこう書習はさむと宣ひしかば」母宮、あて宮「いと嬉しき事かな。かの御弟子になり給ひて、萬のわざし給へ」なんど聞え給へば、大將うち笑みて、仲忠「おとなしう、目に見す〳〵人の御親にならせ給ひて。さても、(二)宮には、いかで仕うまつらむと思う給ふるを、今はいとよう、物遊ばしなどし(三)給ふべかめるを、さる仰せごとも無ければ」と聞え給へば、仁壽「誰かは、こゝには知らで籠り侍ればば、おほぞうなるやうなれば、こゝにかくて(四)侍る程に、いかで習はし奉らむ」大將、仲忠「いとやすき事なり。御書を仕うまつらむ。その日と仰せごとを」藤壺、あて宮「手などもまだ習ひ給はざめるを(五)本をこそまづものせさせ給はめ。まこと

〔語釋〕
(一)仲忠
(二)此皇子たちをいふ
(四)自分が居る間に
(五)手本

〔考異〕
(三)給ふ—給ひつ

〔語釋〕
(一)東宮も仲忠に手本をかきてと頼みあるを
(三)犬宮
(四)「からもりの物語」は竹取物語とならびたる古き物語なりしと見ゆ。その物語の主人公なるべし
(五)「などとて」なるべし
(六)涼の奉りたる

〔考異〕
(二)使がら書かむものぞ—使からか見む
(七)つなぎて—つなぎつつ

㊅あて宮等涼の贈物及殿内を見る。涼堀川の邸に移る。

や、宮にも「書きてと聞え給ひける、そゞのかし聞え奉れよ、使がら書かむものぞ」と宣ひしを、賜はりて奉らばや」大將、仲忠「いと怪しく、異樣なる物をぞ召すや。はやく書きてさふらひたれど、つゝましうて參らせ侍らず」と聞え給へば、あて宮「早う奉り給へとぞ。この頃は待たせ給ふとなむ」大將、仲忠「さらば、とまれかうまれ、今參らせ侍らむ。若宮の御料には、たゞ今も侍りなむかし」と聞え給ふ。藤壺、あて宮「今さるべからむ時に聞え侍らむ。その日も取らせ給へ。さて、かの人に見せ給はざんなる人はこゝにいつしか。疾くとこそ思へ」大將、仲忠「いさや、まだきよりいと見憎くげなめれば、からもりがしたりけむ樣にてぞよげなるや」などて、仲忠「さらば靜に、かのからもりを率て參らせむ」とてかへり給ひぬ。
かくてその日暮れつ。つとめて今日よき日なれば、かの小辛櫃をあけて見給へば、銀に塗りものしたる鍵ども多くさしつなぎていと多かなる中に、見給へば、源中納言の御手にてあり、

〔語釋〕
(二)「見つけ給ひて」衍文歟
(三)大宮も仁壽殿も
(四)「笥には甑具しつゝ」歟
〔考異〕
(一)と—ナシ

涼君がためと思ひしやどの鍵を見てあけくれなげく心をも知れ

と有り。見つけ給ひて(一)、北の方見給ひて、うたてありと思して、かくし給ひつ。北の方、今宮(二)「殿の中など、今日御覽ぜよ」と宣へば、宮も(三)此の君も今日出でさせ給はむずればとおぼして、立てたるかうの辛櫃ども、いみじう淸らなる十ばかりあり。あけて見給へば、萬のたから物、きぬ、綾など樣々にあり。又、さま〴〵なる物に入れつゝ、さらぬ物もいと多かり。外には、三尺の沈の御厨子、淺香の四尺の御厨子二よろひ、萬の男女のつかひ給ふべき調度ども、ありがたき淸らにて、數を盡してあり。すべてよろづの調度などあり。六尺ばかりの金銅の蒔繪の厨子四つ、それに銀の御器調じ、よろづの調度、銀にてしすゑたり。今かたへには、さま〴〵の物どもいと多かり。このおとどの西に七間の檜皮葺にてあり。左右の渡殿あり。御厨子所には、その西の屋をしたり。そこには銀の碗二十ばかり、ちひさきなどおなじ。けには(四)こしきくしつゝ、そこの具ども、いとめでたうてあり、

〔語釋〕
(三)涼の上京當時より率ちんと言ひ居たりとの意歟
(四)今宮の生める男子
(七)女子も生るべきものを
〔考異〕
(一)いと—ナシ
(二)給ひつる—給へる
(五)とする—とやとやする
(六)いらへ—いさや
(八)給ひなむ—給はむ
(九)になく—よく

北の外に倉どもあり。その倉には使ふべき物どもいと多かり。その倉の前に十一間の檜皮屋あり。それは納殿にて、米よろづの物を納めたり(一)。かゝれば藤壺、あて宮「思ほえず富をもせさせ給ひつるかな(二)。あなう君よ、あひなだのみして居眠し給はむに」北の方、今宮「などか、さも眠らまほしうなむ。この三條といふ所は、まだ京にも上らざりける時、設けたりけるとかや。此のあめる物の具ぞ(三)、すなはちよりいふめる。されば、あひなだのめにもあらじや」と聞え給へば、あて宮「まことや、などその(四)珍し人は。それもや、何ならば隱し給はむとする(五)」いらへ(六)今宮「思ふ樣ならずとて憎むめれば、こゝにも「見苦し。女兒ならましかば、若宮に奉らましものを」とぞ言ふや」と聞え給ふ。藤壺、あて宮「あぢきな。後にさるも有りなむものを(七)」など聞え給ふ。日暮れぬれば、曉、源中納言殿わたり給ひなむとす(八)。御車二十ばかり、御前いとになく(九)設けられたり。いと裝ほしうてぞわたり給ひぬ。この殿は、堀河よりは東、三條の大路よりは、北二町、吹上のつぼ造りみがきて、よろづの調度はかた

山に積みたる樣にておはす。

かくて三日過ぎぬ。女御の君、大宮、（一）わたり給ひなむとて、大宮、仁壽「かくて徒然とは。彼處にしばしわたり給へ。年頃の物語も聞えむ」と宣へば、あて宮「いま」（二）などてわたり給ひぬ。藤つぼ、源宰相とふらはむと思す。

かくておほき大殿には、（三）二月二十七日の程に、（四）とかくし奉りて、殿にみな集り給ひて、土殿して、男君たちはおはし、宮の君は、（五）御局しておはす。藤壺はおほいとのの御方にわたり給ひぬ。此西の對には、人々おほくさぶらふ。

（六）かくてりやうの鈍色の紙薄らかなる（七）一かさねに書き給ふ、

あて宮年ごろ、覺束なきまでに、などかはそれよりも。時々は、いと哀に思ほし忘れぬやうになむと人の物すれば、思はずに心長くもと承りつる程に、いともく〳〵哀にかなしき御思を、いかに〳〵となむ。いと怪しう御宮仕を怠り給ふべかめる樣なるをだに、いといとほしと思ひ給へるものを。

〔語釋〕
（一）我が御殿へ歸らんとて
（二）「などとて」なるべし
（三）季明邸
（四）季明の遺骸を葬りて
（五）昭陽殿

七季明の葬送。
八あて宮文を實忠に贈る。實忠の返事。

〔考異〕
（六）かくてりやうの――ナシ
（七）薄らかなる――紙のすくよかなる

木隱れてすむときゝつる山川になど藤波の袖にたつらむ

世の中のはかなきにつけても、よろづ思う給へらるゝ。

とて藤の花につけて、兵衛の君の兄の、（一）童なりしが、今は東宮の藏人になし給へるを召して、あて宮「これおほき大殿にもて參りて、人々あまた物し給へらむ、源宰相に定かに奉れ」とて賜へば、よろこびて持て參る。かの御方の人は、皆見知りたり。殿にうちはへものし給ひて、兵衛の君かたらひ給ひし時は、（二）これを使にてぞ、御文通はし給へる。

藏人、かの君の近く使ひ給ひしさぶらひの人に、これはた、「これ、さだかに參らせよ、となむ仰せられつる」とて取らすれば、侍「いみじう思し嘆くに、この御文を御覽ぜば、すこし思し慰めてむ」と喜びて物も聞えで奉れば、實忠「何處よりぞ」侍「知らず。參らせよとて人の申しつる」と申す。ひき開けて見給ふ。かの御手なれば、見はてで、泣きに泣き給ふ。民部卿の（三）、實正「藤壺のなりや（四）。賜へ。見給へむ」い

〔語釋〕
（一）これはた也
（二）實忠が
（三）「の」衍文なるべし

〔考異〕
（四）なりや――なるか

ら へ、實忠「まだ見給へずや、目も見え侍らねば。親と聞ゆるものは、おはしまさぬ世にも、御徳嬉しきものなりけり。こゝらの年頃、身を徒らになして侍りつれど、音もし給はざりつるものを」とていみじう泣き給ふを、宮の君(一)聞き給ひて、

昭陽殿「然言へどもはた、(二)密夫こそとぶらはれためりかし。(三)斯う忍人まうけ給ふめる人をも、二なく思し騒ぐ」と宣ふを民部卿聞き給ひて、實正「いみじう。これ聞き給へ」とてつきじろひて、爪彈をして(四)おはさうず。宰相、實忠「まだ小野に侍りし時、(五)宰相中將ものし給ひたりき。「哀になること」など、時々宣ふ(六)となむ告げし」(七)などて御かへり書き給ふ、

實忠いとも〳〵珍らしきは、限なくよろこび、(八)かくいみじきよろこびの侍りしに(九)も、今日なむすこし年頃の心地思ひ給へ慰むやうに。さても、

なみだ川袂にふちのなかりせば沈むも知らであらむとやせし

身をすてて思う給へ嘆きつるものを、かゝる折の侍る(一〇)べければ、身の爲には

〔語釋〕
(二)あて宮が密夫の許へ音信せりとなり
(五)祐澄
(六)あて宮が
(七)「などとて」なるべし
(八)「よろこび」衍文なるべし
(九)「侍るにしも」歟

〔考異〕
(一)聞き給ひて―見給ひて
(三)斯う―斯く
(四)して―「て」ナシ
(一〇)侍るべければ―侍りければ

いみじき事のあらむのみこそ、と思ひ給ふるも且は心憂くこそ。たまさかに、里におはしますなるを、今忌過ぎ侍りなば參り來て、今日のかしこまりも、喜も聞えさせむ。例の樣になもてなさせ給ひそ。今はたゞ狹しといふなる路一つを。

などいと濃き鈍色の紙に書きて、いとおもしろき八重山吹につけたり。この御使に何わざをせむ、(一)と思しめぐらして、兵衞の君の(二)かへしたりし箱の、外にありける、金入りながら取りに遣はして、鈍色の紙につゝみて、その紙に、

實忠この箱は君に讓らむわが身にはけふとふ人にますものぞ無き

ながき心。

と書きて、實忠「この御使は誰ぞ」と問はせ給へば、「童名これこそと召しゝが今は宮の藏人に侍るなむ參り來たり」(三)君、實忠「むかし睦じかりし人、思して賜へるにこそありけれ。こゝに忍びてたち寄れといへ」と宣へば、簀子も無き、蔀にかゝ

〔語釋〕
(一)實忠が
(二)實忠が黃金を入れて賜りたる箱を兵衞が返したる事前に見えたり
(三)「來たる」なるべし

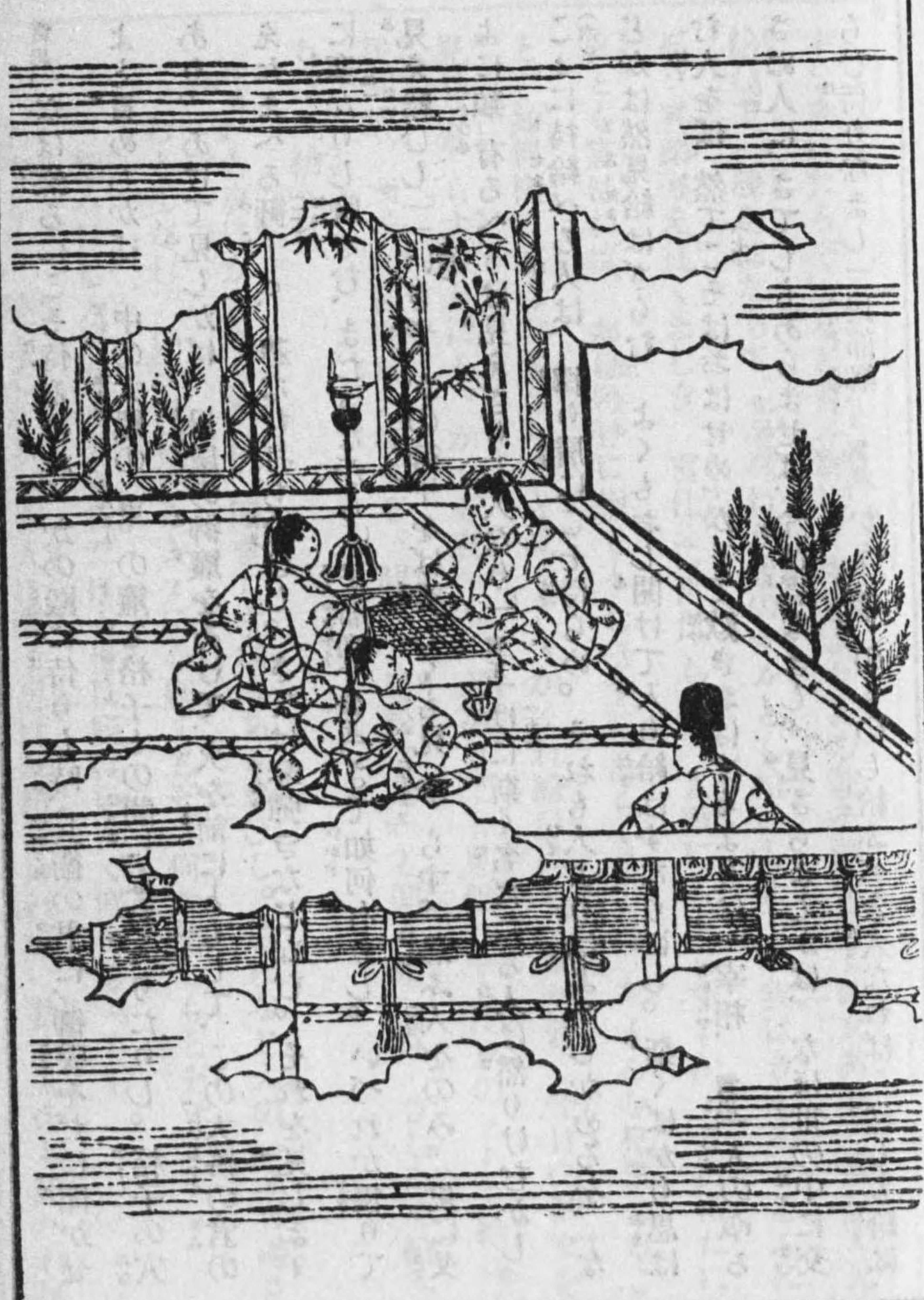
〔語釋〕
(一)季明の死したるを云ふ
(三)御賴申すべき人もあれば

〔考異〕
(二)思う―思ひ
(四)いくよ―「よ」ナシ
(五)いかでか無惡の人は―いちへかばかりの物は

九　實正兄に昔あて宮を見し時の事を語る。東宮より昭陽殿へ御文。昭陽殿の狂喜。

れる所なりければ、そこにて物越にて宣ふ、實忠「いと珍らしく嬉しき御使に、ものせられたなれど、かく人にも見えで籠り侍れば、對面せず。忍びて、妹の君して申させ給へ、「御文には、物もおぼえねば、こと〴〵にも聞えず。今必ずまゐり侍らむ。制し給ひし人もおはせねば、今は山林にも深く入りなむと思う(二)給ふるを、(三)聞えおくべき人の上(一)など侍るを、昔のやうにはな思しそとなむ聞えつる」と申し給へ」と泣く〳〵宣ひて、實忠「これは、たゞならぬ折ならましかば衣をも脱ぐべきを、年頃行ひ出でたる佛舍利なり。(四)いくよなるまでこそは、山籠りは」とて賜へば、これはた「(五)いかでか、無惡の人は、賜はりて失ひ侍りなむ。いと恐ろしき事」と聞ゆれば、實忠「よに侍らざらむかたみにし給へ」とて取らせて入り給ひて、御齋參りするたれど聞食さず、いみじう泣き居給へり。

民部卿、實正「昔いかなる契をなし給へる人なれば、この御爲にかゝる御心あらむ。音にのみ聞く人をば、斯くしも思はぬものを。物越にても、物聞えなどやし給ひし」



〔語釋〕
（一）「入れたりし」歟
（二）女一宮とあて宮と

〔考異〕
（三）塞がりし—塞がりにし
（四）いさや—いらへ
（五）あて宮を其樣に無類の美人と見しは最なり
（六）我が妻にし居る三の君は
（七）こそは—「はし」ナシ

實忠「なほ然るにこそ侍るめれ。かの殿に侍りし時、兵衛の君に、御聲をだに聞かせよと責めしかば、中の大殿の東の簾と格子との間になむ入りたりし(一)。格子の穴あり。あけて見しかば、母屋の御簾をあげて、火を前にともして、この大將の君のえたまへる御子(二)と、碁なむ打ち給ひし。さては琴彈きなどなむ。それを見しまゝに塞がりし(三)胸なむ、まださながら」民部卿、實正「さて如何有りし。いづれか優りて見え給ひし」「(四)いさや、かの御子をば委しくも見奉らず。思ふ人をのみ。更に又よに類有るべうは見えざりし人なり」實正「(五)げに斯く名だたる人は然りけむかし。こゝに持給へる人は、擇り屑にこそ侍らめ。それも人よりはよろしかめるを、な(六)どかは然見給はざらむ。よくもおし開けて入り給はずなりにし。斯くばかり思はむ人をば、然てこそ(七)はおはせめ、かくて歎きおはするよりは」宰相、實忠「人のゆるさぬ人に、さてしもあらませば、今は爲なまし。見ざらましかば、なほ世の中に交らひ侍りなまし」民部卿、實正「かう幸のものし給ふべき人なれば、然しも給は

〔語釋〕
（一）昭陽殿へ
（二）「思ひしを」なるべし

〔考異〕
（三）とぞ—とて

ずなりにたるぞ」など宣ふ程に、東宮より宮の進を御使にて御文あり。喜びて見給ひて、聲をはなちて、昭陽殿「わが親の今々とし給ひしまで、(一)「我はきんちを思ふにぞ、冥路もえ往くまじき、宮仕に出だして、人數にもあらず、かゝる折にだに哀とも宣はねば、おぼろけに憎しとおぼすにあらざめり。かゝるを見棄つること、如何樣に惑はむずらむ」と泣く〳〵かくれ給ひにし。吾が君、今日の御文を見せ奉らずなりにし。かくぞ宣へる。天翔りても見給へ」と泣きのゝしり給ふ。民部卿、實正「如何樣なる御文ぞ。賜へ。見給はむ」と聞え給へば、さし出で給へり。見給へば、

東宮 いと哀にかなしき事は、聞きしすなはちと思ひし(二)。忌むなど人のいふ日過さむとてなむ。いかに程經るまゝに心細くとぞ。何か然しも(三)とぞ。

頼みけむ人はなくとも我だにも世に經ばいたく嘆かざらなむ

あやしく、睦ましかるべき人に疎く思はれ給ふめれば、昔、人のし給へれば

〔語釋〕
(一)季明
(二)あて宮に對して不平ありとも の意歟
(三)我々兄弟が宮の君を構はずと
(八)亡き父に

〔考異〕
(三)思ひ給へずとも―思ふべからむ に と宣はす―思ふ
(四)貴き女…それこそや―かるきめはふるめぞや―みそかをとこぞともそれかぞや
(五)世に人は―よるべは
(六)少し―うち
(七)とぞ―てゝ

こそ、見讓りても。今よりはなほかの人の心ゆかず思ひ給へずとも(一)心をさめ(二)て物し給へ。さて平かに世にあれと思ほせ。

と書き給へり。これかれ見給ひて、「あないとほしや、おの〳〵顧みずと思したる(三)にこそあめれ」宰相、(實忠)「いでや、心肝をまどはして思ふ人は、宮もになうおほすなる、貴き女ぞかしこき女なれ、(四)みそかごとぞともそれこそや」など宣ふ。「いかでかよしとしも思はむは、これは今よりは、世に人はとふらひこそは」(五)などさゝめき給ふ。宮の君に御文かよはせ給ふ。

照陽殿畏まりて承りぬ。あさましういみじき目を見給へて、思ひ給へなげきつるに、いと嬉しき仰せごとを承りてなむ、(六)少し慰み給へる。いでや、昔の人の夜晝思ひ給へなげきし身を、如何樣にとぞ。(七)

見し世にぞかくも言はまし嘆きつゝしでの山路をいかで越ゆらむ

今日の御文を見せ(八)侍らましものを、とぞ思ひ給へ侍る。人の爲によからずと

〔語釋〕
(一)これこそ
(三)兵衞よりかへされたる儘に仕舞ひ置きて終に兵衞の弟にやりたる事よし
(四)「給ひつらむ」なるべし
(七)銀線を結びあはせてつくりたる籠の如きものか
●あて宮の使復命。東宮よりあて宮に御文。御返事。

〔考異〕
(二)宣ひつる事など―宣へる事を
(五)いな―ナシ
(六)銀のむすび物どもを―銀黃金のむすび物などを

宣はせたるは、身の人數に侍らねば、親同胞の思ひあなずり侍るまゝに、幼き心は思ひむつかり侍りしなり。今は何につけても顧みさせ給はずば、親の面をも、君の御面をもふせ侍るべき身にこそは。

とて奉れ給ひつ。

畫詞 こゝはおほき大殿。

かくて藤壺の御使は、(一)歸り參りて御返奉らせて、人も無き折なりければ、侍りつるやう、宣ひつる事など(二)委しく申して、有りつる箱見せ奉れば、あけて見給ふ。書きつけたるものを御覽じて、(あて宮)「これは見つや」とて賜ふ。箱には黃金一箱あり。君、(あて宮)「心深きことはた、又はあらじかし。(三)これを置きて、この族に遂に取らせ給へる。御身に添へてや持ち給へらむ」(四)と宣へば、(これこそ)「いな。(五)外よりなむ持てまうで來つる」と申す。

東宮は(六)銀のむすび(七)物どもを毀たせ給ひて、ほかなる竹原にして、下には銀ほ

〔語釋〕(一)昭陽殿へ文をやりしかば此通り返事し來れりと返事の文を添へてよこしたる也
(二)「御方のみ」歟、女四宮をいふ
(四)嵯峨院が
(五)女四宮を呼ばんと思ふ
(六)「心ありともや思へば」にて實は義理にせまりてする事なるを女四に心ありての事と思はるゝがつらしとの意なるべし

〔考異〕(三)方のみ—方なむ
(七)よごとに露の—よゝに妻のみ

そき緒をむすび、餌袋の樣にして、黑方を土にて、沈の筍つくらせ給ひ、隙もなく植ゑさせ給ひて、節ごとに水銀の露すゑさせ給ひて、藤壺に奉らせ給ふ。

東宮きのふ一昨日は、物忌にてなむ。かの訪らはむとものせられし人の(一)許に遣りたりしかば、斯くなむ。ことに心地ありげもなき人も、斯うこそは思ひけれ。これにつけても、院の方のみ(二)(三)いとほしく、(四)ゆくさき少げに見え給ふを、かくてありとのみ聞召すらむを、この頃物せ(五)むと思ふ。(六)心ありともや思へば、つゝましうてなむ。宣はむにおきて。これは小き人々に持たせ給へとてなむ。さても、

あけゆくときぬき定めぬしのゝめに老のよまでもわびしかりしか

君には如何。こゝには夜晝忘るゝ時なく、まかで給ひにし後は、まだ寐をなむ寐ぬ。

もろ共にふしのみあかしくれ竹のよごとに(七)露のおきてゆくらむ

〔語釋〕(一)あて宮が
(五)女四を召す事は
(七)あて宮の留守中故召されたるならんと女四が思召すとも
(八)嵯峨院が

〔考異〕(二)ましし—ナシ
(三)かな—なり
(四)さも思すべき—さもおぼえおはすべき
(六)事は—事も
(九)この—これは
(一〇)しのゝめぞ—しののめの
(一一)なむ—なむ明暮

ゆく末まだ遠き心地のするこそ。

とて、例の藏人して奉れ給ふ。まだ大臣殿の御方にぞおはし(一)まし(二)ける。これかれ見給ひて、「をかしき筍かな」(三)とて土おし丸がしつゝ、筍一筋づつ取り給ふ。

御返は、

あて宮承りぬ。賜はらせたる人の御文は、げに(四)さも思すべき事にこそは。(五)宣はせたる事(六)は、いとよう侍り。さふらはぬ(七)程にと思さるるとも、御覽じ直す折も侍りなむ。このわたりには、承りぬ。いみじう(八)おもほし嘆くとあれば、いといとほしくなむ。はやう聞え給へ。さてこの、(九)

きぬぐ〳〵の濡れて別れししのゝめ(一〇)ぞあくる夜ごとに思ひ出らるゝ

露は、これにはそれをのみなむ、(一一)

くれ竹のふしにはあらでかゝる身の露のよのみも嘆かるゝかな

とて藏人に、あて宮「かたみにだに」とて、單の御衣に、小袿かさねて賜ふ。

〔十一〕あて宮我が寢殿へ歸らんとす、實忠の噂。仲忠の噂。忠澄等兄弟交代にあて宮の爲に宿直せんとす。あて宮歸る。

〔語釋〕
(一)前に懸想せし男どもが目をつけてよき折ぞとて入り來らば如何せん
(二)我が深窓に居し時こそ人並の女かと思ひて懸想する人もありしならんか
(五)あて宮を迎ひにゆきし時の事をいふなるべし

〔考異〕
(三)斯う…言はるれば—かうさりもて萬の人—かうさかりて萬のはずなどにもかくまさなく言はるれば萬の人
(四)いらへ—いて

かくて大殿の町は、ことに面白き事はなくて、またくいかめし。おほん方々、東の一の對に右大辨、二の對に、二かたにて藏人の少將、大夫の君おはす。さては他人の曹司。君たちは、殿におはせし時はさしもあらざりしかど、里にては人々參りつどひ給ひて見え奉り給へば、いと騷がしとて、藤壺、あて宮「今はあなたに歸り渡りなむ」と聞え給へば、大宮、「いかでか、然ばかりひろき所には。(一)物言ひさしたる人々の、みな見置きて、かゝる折とてはしり入り來ば如何。斯うなくても人によからず思はれ給へれば、名を立てむとて、腹きたなき心つかふ人もあらむ。いとうしろめたき事なり。なほ狹くとも此處にを」と聞え給へば、あて宮「誰か心おきては。昔、御子にて、(二)かくも見えざりし時こそ、もし人の樣にもやとて。(三)斯うさかりて下司などにさへまさなく言はるれば、聞き疎みにたらむものを、宰相の中將見え給へど、大宮「殊にかたはならぬ人はそれしもこそ」(四)いらへ、あて宮「かたはなりと見ゆる人もあらむ」おとゞ正頼「何かは、(五)おのれをも、かの人どもをも、

〔語釋〕
(一)實忠
(三)實忠と同じ心なるに

〔考異〕
(二)知ればこそ人ならぬ—知ればよそ人ならぬ—知ればこそよに人ならぬ
(四)見ゆるなし—見ゆることなし

勘事せられしにこそ、いと面目有りしかど、心々に言ひてさわがれ給ひしこそ、思ふときには面だたしかめれ。なほ人に言はれむ事はつゝましや」藤壺、あて宮「さても、然るべき人は誰かは。さもやと思ふべき人は、ありきすべうもあらざなるを。(一)かの人こそ、いとほしうは聞き侍れ。一日、とぶらひに遣はしたりしかば、いみじう喜びて、「今は心にまかせて、野山にも入り、法師にもなりなむ」とぞ言ひける。さらむ志を思ひ(二)知ればこそ、人ならぬものだにも、物思ひ知るものなれ」と宣へば皆人いとあやしと思ふ。左衞門督の君、忠澄「この族を離ちて、世にある人は、みな(三)然る心のみこそは。この君しも、かく見え奉りたるぞかしこきや」藤壺、あて宮「思ほえぬかな。年頃より言ひはじめて、今に忘れざんなる人は、誰かは。はかなき文などは、あこきなども數多書くめる」大宮、「志うしなはぬ人は、あまた聞ゆや」藤壺、あて宮「今は誰も然こそは。こゝには然(四)見ゆるなし。はかなき宮仕をして、ゆゝしき人々のことどもを聞く時は、あぢきなや、志有りし人に

〔語釋〕
(一)仲澄の事をいふ也
(二)かく入込の處には居られ給はじ
(三)あて宮の方に宿直せん
(四)あて宮を
(五)「なかの君」にてあて宮は我々の主君なりといふ意なるべし
(八)生るべき梨壺腹の皇子に對して兼雅をいふ歟
(九)仲忠

〔考異〕
(六)何に斯うは―何しかそは
(七)さしも―さても

つきてもあるべかりけるものを、さりともかく言はましやは、と思ふ折は多かる。又も(一)心憂くかなしと思ふ事ありや」とて泣き給ふ。大宮、宰相中將は、知り給へば、いと悲しと思す。こと人々は、何事とも知り給はず。あて宮「世の中を知らざりし時は、よろづの事心にも入らざりき。今思へばこそ、哀にも悲しうも」と宣へば宰相中將、祐澄「げに(二)斯くおほぞうにてはえおはせじ。祐澄等よりはじめて、二人づつ、(三)かの御方の宿直仕らむ。行くさき、自らよりはじめて、男女子どもまで、(四)たのみ奉り給へれば、この(五)なか君にこそは」藤壺、あて宮「あなうたてや。(六)何に斯うは。梨壺物し給ふめれば、男にてあらばさしも。四の宮の御許へもまうで通ひ給ふべかなれば。この程にさる事あらば、それこそは世の中定なければ、必ずとも思はず」おとゞ、正頼「梨壺は、(七)さしも知らず。たゞ今、世は右大將親子の御世になりなむとすめり。世の人は(八)おぢおとゞ、わが身よりはじめて、皆靡きはてにたり。それは(九)かの君のおしたち惡きにもあらず。自然に恥かしきによりて、

〔語釋〕
(一)東宮
(二)梨壺腹の皇子を太子にと申さば
(三)「后宮は」歟、后宮は兼雅の同胞也
(四)誤あるべし
(五)仲忠が
(六)あて宮腹の一の皇子
(七)仲忠が
(九)我が子ども仲忠に靡きたるを見ずや
(一〇)宿直の番に
(一一)誤あるべし、「札うちて」歟
(一二)近澄

〔考異〕
(八)べうも―やうも

人の心をつかへば、靡く樣なるなり。(一)宮は内裏にしたがひ奉り給ひ、内裏は右大將にかなひ給へば、かの主たちもちて(二)之をと申さば、何の疑かあらむ、われも口開くべくもあらず。(三)中宮はおはします、故鄕(四)はみな足末なり。例はさる筋にもあらず」宰相中將、祐澄「いと不便なる事のみ聞え侍れ。天下の御子うまれ給へりとも、(五)然る心あるべき人か。その中に、(六)若宮をばいと(七)志深く思ひかしづき聞え給ふものを。この子日、御前の物調じて、もてあそび物七寶を盡して、し設けてこそ。裝束いとうるはしくて、賄しつゝ、手づから參り給ひしにさる物から、よの覺おもしとある人なれば、いさゝかに僻みたる心つかふ(八)べうもあらざめり」おとゞ、正頼「まづ見給へかし。(九)この人どもも、ようこそは靡きためれ」と宣ふ。左衞門督、忠澄「などか(一〇)この番に、忠澄等を入れられぬ。こゝにもせむ」と宣ひて、忠澄「宮あこの侍從、いかに御方の(一一)ふたうして行へ。(一二)藏人は入れじ。宮づかへ忙がし。この御館は、一人をば忌まむやは。二人づつ六番に結ばむ。彼方になほある

人どもは、番々に入れつゝ、この番欠かむ人は一日の饗殘さず仕うまつらせさせ(一)む」と書き給ひて、御名(二)して、宮あこぎみに、「これ預りておはせよ。」御前の柱に押して、欠かむ人をば兄(三)ともいはず勘當し責めそせよや」と宣ひてとらせ給へば、喜び取りつ。宰相の君、祐澄「さらば、これかれ侍る時わたらせ給ひねかし」と聞え給へば、あて宮「いとなやましく侍れば、安き臥し起きもせむ」とて、あて宮「今又も參り來む」とてわたり給ひぬ。御車には四位、五位、ありとある人、ふさに付きて、引きに引く。若宮二所乘り給へり。君だちうち群れて送し給ふ。

かくておとゞ、正頼「あやしく、藤壺のいかに思ひてものしつる事ぞや」大宮、「有る樣あめり。めにちかう心かはりて有るを、思ひてこそ(四)あめれ」おとゞ、正頼「かたき事かな。いみじうすまひしを、公私居立ちて、強ひてしたるをば」宮、大宮「なほそれぞ。宮仕せさせて、さてもなどは思はれたりける。かく、琴彈き、あそびなどするを、若き心に羨ましと思ふなるべし」おとゞ、正頼「今犬に琴ならはさ

〔評釋〕
(一)「させ」衍文なるべし

〔考異〕
(二)御名—御判—御對
(三)兄ともいはず勘當し—勘當せしめ兄ともいはず
(四)思ひてこそ—思ひてにてこそ

む時に、さらば羨むかし(一)」などみそかに宣ふ。

かくて藤壺のおはする町は、いと面白し。遣水のほどに、八重山吹の高くおもしろき咲き出たり。池のほとりに大きなる松に藤のかゝりて數多あり。すべて春の花、秋の紅葉おもしろく、時々の前栽、草木もいとをかし。遣水に瀧おとし、岩立てたる樣なども他處には似ず。かゝる事好み給ふ人(二)なれば、暫しなれど面白うし置きたり。此の西の對は、暗き闇にも照り輝きてぞ見ゆる、世のつねの調度をつかはねば。寢殿は清涼殿の樣を造れ(三)ど、例の調度(四)などは例の所の樣なり。それは二方にしつらはせ給ひて、東は若宮の御方、めのと四人、童、下仕二人づゝあり。皆有るべき所々、せさせ給ひて、東の一の對をさふらひ、藏人所にしたり。方々しおき給へる所々に、あたり〱、政所より始めてしたり。東の二の對は、宮あこの侍從、二の御方、寢殿の西面は、二の宮の御めのと、人々あり。西の對は、二宮の御方のさふらひ、藤壺の御さふらひ、これにはやんごとなき四位、五位、い

㊤あて宮の假御殿。仲忠約束の手本をあて宮に奉る。あて宮東宮と文贈答。あて宮の髮を結ぶ前にて侍女等實忠の噂す。孫王の君、兵衛、木工等の容貌性質。

〔語釋〕
(一)「羨まむかし」歟
(二)涼は

〔考異〕
(三)造れど—造れらば
(四)などは—なれば

〔語釋〕
（二）「しのて」は「葦の手」歟

〔考異〕
（一）本か―本をか

と多く參り仕うまつる。次の對は藤壺の御方の親族たちの御曹司、西の廊はおしなべての人の曹司。御門は東南にあり。かく廣けれど、なほ狹く住みなし給へり。宿直の君だち、夜毎に檜割籠、らうある物ども調じて、御前にも臺盤所にもまゐる。

かゝる程に、「右大將殿より」とて手本四卷、色々の色紙に書きて、花の枝に付けて、孫王の君の許に御文してあり。

仲忠みづから持て參るべきを、仰せごと侍りし宮の御手本、持て參るとてなむ。これは、若宮の御料にと宣はせしかば、習はせ給ひつべくも侍らねど、召侍りしかばなむ急ぎ參らする、と聞えさせ給へ。さて御私には、（一）何の本か御要ある。此處には、世のためしになむ。

とて奉れ給へり。御前に持て參りたり。見給へば、黃ばみたる色紙に書きて、山吹に付けたるはしのて、（二）春の字、青き色紙に書きて松に付けたるは草にて夏の字、

赤き色紙に書きて卯の花に付けたるは假名、はじめには男手にもあらず、女手にもあらず、あめつちぞ。(一)(二)その次に男手、離ち書きに書きて、同じ文字を樣々に變(三)へて書けり。

仲忠　わがかきてはるに傳ふるみづくきもすみかはりてや見えむとすらむ(四)

女手にて

仲忠　まだ知らぬ道にぞ惑ふうとからじ(五)千鳥のあともとまらざりけり

さしつぎに、

仲忠　とぶ鳥にあとある物と知らすれば(六)雲路はふかくふみ通ひなむ

次に片假名、

仲忠　いにしへも今ゆくさきも路々に思ふ心を(七)わするなよ(八)君

葦手、

仲忠　底きよくすむとも見えて行く水の袖にもめにもたゞずもあるかな

〔語釋〕
(一)「あめつちほしそら云々」といふ文にて此頃の手習のはじめに兒童のならひしもの
(四)墨に澄みをかけたり

〔考異〕
(二)あめつちぞ―あつめかきて―あつめてかき
(三)變へて書けり―かきかへてかきたり
(五)うとからじ―うといふらし
(六)知らすれば―知らすれど
(七)心を―心に―心あり
(八)わするなよ君―君忘るなよ

といと大きに書きて、一卷にしたり。見給ひて、あて宮「いとほしくよろづの事に手(一)をえみ給ふ人の、樣々に書き給へるかな、一日、たはぶれに物せしを。(二)宮の年頃召しつるも、今日こそは奉らるゝなれ。此の返事は我せむ。使は誰ぞ」と問はせ給へば、孫王(三)「奉り置きてまかりにけり」と聞ゆれば、「いと心地なき所の人かな。彼よりかゝる物あらむ使やる、心せよ」(四)と宣ひて、白き色紙のいと厚らかなる一かさねに、

あて宮　賜はせためれど(五)、「人をとふとも」と言ふなればなむ。此の本どもを、かく樣々に書かせて賜へるなむ、限なく喜び聞ゆ(六)。なほ(七)此の人々は、御弟子にし給ひて、これならぬ事も知らせ給へ。誠に後にもとめられたるは、(八)(九)何事にかあめる。我ならぬ人にやと思ふこそうしろめたけれ。

と例よりめでたう、墨つきて、大きやかに書かせ給ひて、あて宮「これ、また心あらむ者して奉り置きてかへり來ね」(一〇)とて奉れつ。(一一)

〔語釋〕
(一)「手をしみ給ふ人の」なるべし
(三)孫王の君をいふ
(四)かゝる使をかへすには無關にせぬ樣に注意せよ
(五)古今集「玉ぼこの路は常にも惑ひなむ人をとふとも我かと思はむ」
(七)あて宮腹の皇子たちをいふ
(八)「御私には」とありし條の返事なり

〔考異〕
(二)物せしを―物せしに
(六)聞ゆ―聞え
(九)後に―あと―何とか
(一〇)奉り―奉らせ
(一一)奉れつ―奉りつ

（語釋）
（一）前のあて宮の返事にいへる事也
（二）其方へ行きたしとも思へども
（三）女四宮の方へ行きたりと也
（五）女四方
（六）女四が東宮へ
（七）「うち」は「うへ」歟
（八）「なむ」衍文歟
（九）「參りうき」歟。一本「しりたき」

（考異）
（四）なは…なりてばをさ―ナシ

かゝる程に宮より御文、

東宮 日頃は如何となむ。されば、「夜の間にも」(一)とかありしかば、頼めてもと言ふなれば、夜毎になむ。(二)そこにもいかでと思へども、然はえせぬ事なりければ、心にもあらでなむ。彼の物したりし(三)所には一日なむ。いでや、

筑波根の蔭につけつゝ時の間も思ひわするゝ折のなきかな

なほ夜の間には必ず。世の中になくなりてば、をさなき人を如何などおぼさ(四)ば、物の憂くもあらじ。

とて奉り給へり。上問はせ給ふ。あて宮「院(五)の御方へは、何時かわたらせ給へりし。幾度ばかりか(六)まうのぼり給ひぬる」藏人、「朔日、うち(七)になむ渡らせ給へりし。さては夜一夜なむまうのぼり給へりし。上は、此の頃は、講師日々に參り御書遊ばす。夜は夜更くるまで御手習せさせ給ふ」などなむ(八)聞ゆ。御返書き給ふ。

あて宮 日頃は、あやしう惱ましうのみ侍りて、如何ならむと心細き心地なむ。まゐ(九)りたき事になむ侍りける。夜の間には、さ思ひ給ふれど、聊か動きもせられ侍らねば、人に知られぬまかりありきは難くなむ。まことや、蔭につけつゝとか。

思ひいづる折しもあらじ筑波根のます蔭をのみ添ふる身なれば

とのみなむ。一日と宣はせたる事(一)は、いとよかなり。さてのみも慕ひ參り來るものならば、さて心安くは。

と聞え給へり。

又右大將殿より、今朝の御返聞え給へり、

仲忠 見えざりける程に、賜はせたりけるは、唯今なむ。みづから參り來て、この畏まりも聞えさせむとするを、今まで御前にさふらひていと苦しうてなむまかでしか。若宮に侍り參るべき志侍るうち斯く宣はせたれば、いかでけし(二)、雜役にもとなむ。誠は、世にとまらぬと侍りつるは、何事にか。其かた〴〵に、

はま千鳥わが袖のうへに見しあとは涙にのみもまづ消えしかな

（語釋）
（一）他に寵姫のあるをいふ。古今「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにます蔭はなし」
（二）「けし」は家司歟。一本「けし」の代りに「か侍りける」

〔語釋〕
(一)あて宮の御手跡を
(二)實忠より贈られし黄金入りの箱
(三)「ば」衍なるべし
(四)「おとと」は註文の紛れ入りたるなるべし、これはたは兵衛の弟にて實忠より箱をもらひし人也
(五)實忠
(六)入内前ならば
(七)他人の出來ぬ事にはの意歟
(八)實忠が一人居る

さだかにだにも見(一)給へらずなりにしものを、今日のみこそ
と聞え給へり。
又の日になりて、上、孫王の君して、御髪參らせ給ふ。御前に孫王の君、兵衛、木工さふらひて、御粥まゐり、御賄なんどす。兵衛の君の聞ゆる、「昔見給へし箱(二)は、此の一日見給へしこそ、いと哀に見侍りしかば」(三)孫王の君、「彼の箱なりし物をかけて侍りしかば、三千兩こそ侍りしか」兵衛、「二百兩賜ひてき。さては、これかれ皆賜ひて、これはたおとと(四)には賜はずなりにき」上、あて宮「あやしの物數へや」孫王の君、「かけつれば多かめるをだにこそ。あはれ此の頃こそ昔思ひ出でらるれ。宰(五)相の君の思ひ惑ひ給ひし事もこそ、つれ〴〵と思ひ出でらるれ」孫王の君いらへ、「かく里におはしませば、斯かる物もうち見ゆるや。内裏に籠りおはしませば、さうざうしくこそ。此の頃かく離れ住みし給ふを、昔なりせば(六)、如何なる事あらまし」兵衛、「宰相の君(七)よ人し給はざりしは、一所(八)おはせし御曹司に召しゝに、常に參り

〔語釋〕
(一)あて宮に
(三)「少將」前に見えず誤なるべし
(七)「上」は「もく」の誤か一本「もて」
(九)卽ち孫王の君也
(一〇)仲忠
(一一)涼
(一二)此孫王の君を親しみしかば
(一三)涼に仕ふる妹をいふ
〔考異〕
(二)あるとて—あなる
(四)いさや—いらへ
(五)まろら—まろ
(六)いらへ—いでや
(八)母の—はらから

しが、と聞えよ、かう聞えよとのみこそ(一)。いさゝかなる私たはぶれをこそし給はざりしか。若き人は然やはある(二)」とて兵衛「いでやかく聖になり給ひける」(三)少將「何かは私事も言はぬ。されど、人こそ耳に聞き入れね」兵衛、「いさや(四)、まろら(五)が恐しければにやありけむ、聞かでこそ止みにしか」孫王の君いらへ(六)、「まめ人もなきものぞや」(七)上、「然かし。君のみこそは」と言ふ。此の孫王の君の母(八)の帥の君は優にざれたれば、此の源中納言殿の渡り給ひぬれど、あざれていと畏まらず。女子は三人あり。(九)大い君はこれに、中の君は大將殿の孫王(一〇)、三の君は源中納言殿の孫王(一一)、此の御方の、昔容貌なんどよくて、髪長にあまりて、物々しう清げなる人の、心にくゝ心有るなり。右大將むかし思ひて語らひしかば(一二)、それをのみ思ひて、よき人君だち宣へど、耳にも聞き入れず、君の御身に添ひて、御前片時去らであり。紀伊國(一三)のをば、萬に勞りて、局なる童、おとな、下仕まていたはる。大將も忍びてをかしき樣にて、物志しなどし給ひしかど、宮の御上參り給ひし後は然も

あらず。兵衛の君は、見めきたる人の、髪長に一尺ばかりあまりて、いといたうはやりざれたり。木工は、ふくらかに、愛敬づきたる人の、髪長にて、いとりやう〳〵じき、あこきは兵衛の君に似て、頭つき、姿つき、いとよき程にて、をかしげにて、髪長に一尺ばかり餘りて、いとらう〳〵し。あこ君も、それにぞ似たる。それはいとはやりざれたり。

かゝる程に、三月二十八日ばかりなり。(一)一の宮、女宮たち一つ車にて、五位、四位數知らず、君だちも御供にて渡り給へり。(二)おろし奉りて入り給ひぬ。御裝束例のごと。藤壺は紫のかいねりの御衣一かさね、薄鈍の張りあはせの御衣奉りて、あて宮「其方にこそ參り來むと思ひ給へつれ。御傍守りの隙なくものし給ふなれば、(三)思ひ給へ(四)つゝみて侍りし程に、いと畏くわたらせ給へるをなむ」と聞え給ふ。女二「まもり怖ぢ給ふは如何なるぞ」あて宮「(五)彼の家をならひて、知らぬ人と時々は交ろひ奉りて、さては徒然と眺め侍るを、いとこそ怪しけれ。宮仕心ゆくとは、何をか

〔語釋〕
(一)女一宮と女二宮女三宮なるべし
(二)あて宮の假御殿へ
(五)我が生家にすみなれての意歟
(要)女一宮、女二宮女三宮を伴ひてあて宮を訪ふ。仲忠母子の琴の噂。髪の長さを較ぶ。孫王の君姉妹、上野宮の噂をす。
〔考異〕
(三)なればーければ
(四)つゝみて侍りしーつゝみつる

言ひ侍りけむ」宮、女二「此處にもこれかれ集ひて、男にも女にも、疎からぬどち遊をもし、物語などをもしならひて、(一)さりし人をばいと疎くもてなして、音にも聞え影にも見ざりしかば、恐ろしく恥かしと思ひしものに向ひ居たるは、我か人にもあらず怪しきまゝに、昔の戀しく思ほゆれば、すなはちまうで來むと思ひしかど、辛うじてこそ」と聞え給ふ。藤壺、あて宮「(二)などかく、珍らしき人はとゞめ奉り(三)給へるぞ。其れをこそ、先づと思ひ給ふめれ」宮、女二「(四)いさや、(五)前に伏せてのみ置きつれば」藤壺、あて宮「などて人には隱し給ふぞ。小き程には、(六)このおはしますなどを、皆この中には見奉りしは」宮、女二「(七)(八)然前にのみあれば、彼が前には人の物せねばにこそあめれ。かゝる物を見ならはざりければ、たゞに(九)其を友だちにてぞ籠り居ためる」藤壺、あて宮「いでや、聞えても〳〵、(一〇)彼の御時の物の音を承らずなりにしこそ。まかでむと聞えしかど、車も賜はせず、御消息も宣はずなりにしかば、いみじうくち惜しうこそ。内裏の上も、「いかで疾く降り居て、彼の人

〔語釋〕
(一)「ありし人」歟
(二)なぜ御子を連れて來給はぬぞ
(五)仲忠が
(六)女二女三をいふ
(七)仲忠の
(九)仲忠が我子を友だちにして
(一〇)犬宮の生れし時仲忠母子がひきたる琴の音
〔考異〕
(三)給へるぞー「ぞ」ナシ
(四)いさやーいらへ
(八)然前にーお前に

（語釋）
（一）仲忠が先に彈きたり
（四）俊蔭女の琴は
（五）仲忠の琴
（七）あて宮を妻にしたらば

（考異）
（二）ぞや—「ヤ」ナシ
（三）聲—手
（六）いさや—いらへ

に琴彈かせて、聞かむ。呼ばむに物せずば、家に入りて彈かせむ」とさへ宣はするものを。此處にはさる事の侍りけるを、と思ふこそ言ふかひなく妬く。誰か先づは遊ばしけむ。何れの御琴ぞや」と聞え給へば、女二「彼の三條にありつる琴ぞや。(一)(二)子こそ先づあめりしか。親のはいと悲しう聞きしかば、たゞ泣きにぞ泣かれし。それ聞きしまゝに、苦しき事もなくて起き居にし。琴の聲の、(三)いと荒々しく恐ろしく覺えて胸なむはしりし」藤壺、あて宮「(四)彼の御琴は然ぞある。清涼殿にて、仕うまつり給ひし夜、せめて聞かまほしかりしかば、おとゞ人々にも泣く〱責め聞えしかば、あな物狂ほしとむつかり給ひしかど、人々の中に率ておはして聞かせ給ひしを聞きしが、何處に生れにたるとこそ覺えしか。あなかま、かう聞ゆと宣ひながら、(五)おとゞのをぞまだ聞き侍らぬ」宮、女二「(六)いさや、其の人のをぞ委しう聞かぬ。いかで聞かむと思へど、更に聞かせず。さて言ふ樣は、「(七)そこの御許にあらましかば、此の手はいとよく習はし奉りてまし。此の世には、其處にのみなむ、

（語釋）
（一）思ひもよらぬ女二を娶りて
（三）あて宮に對して
（四）「責め給はゞ」なるべし
（五）「たて」衍文なるべし

（考異）
（二）此の族の—そこらの
（六）言ふ—言ふめる
（七）かねて—かきて
（八）袿といと等し—袿にひとし

(一)此の族の手は彈き給ふべき人は物し給ふ。すゞろに、(二)思ひの外なる所にありて、(三)御爲に志なき樣に見え奉ること」とて、常にのみぞ言ふや」藤壺、あて宮「あなうたてや。世にも然は。御聞きなしならむ。などかは、かゝる便に、夜晝責め(四)給ひて、教へ聞え給はぬ樣はありなむや」宮、女二「さ言へど聽かず。「今、上降り居給ひなむとき、御前にて、何事も手をつくして仕り聞かせ(五)たて奉らむとす。かくてあらせ給ふ御心のいとかしこき畏まりには、斯かる事をだにこそは。其處に參りてを聞け」なんどぞ言ふ(六)」藤壺、あて宮「いみじき事にもあるかな。然侍らむ時は、御消息(七)かねて宣へ。忍びて御供に仕うまつらむ。それをさへはづさせ給ふな。御前には、行末もあり、彼の音あくまで聞召してむ、犬の御德に」宮、女二「あな久しや」など多くの御物語などし給ひて、女二「いで御髮は。こゝのは皆落ちぬ」とてひき較べて見給へば、藤壺のは今三寸ばかり優りたり。女二「いと等しかりしものを、多くも優り給ひにけるものかな」とて、二の宮のを見給へば、袿の裾(八)といと等し。

筋、かゝりば、一の宮の御髪(一)にいとよく似たり。すべていと同じ様におはするが、これは少しふくらかに、氣近きになむ。(二)三の宮はまだ小くおはするが、あてにそびやかなる御容貌の、御髪長に少しあまりたり。

かゝる程に、(三)大殿の御方より、檜割籠、御酒、椿餅など奉り給へり。(四)左の大殿よりは、梨子、柑子、橘、荒巻など有り。所々よりをかしき物ども、多に奉れ給へり。宮の御供には孫王の君、中納言の君、此處の御前には、孫王の君、兵衛なり。孫王たちは物語す。姉君、一孫王「われらが宮(五)は(六)などや、此の下﨟の女を上とは思したらむ」中の君、二孫王「更なることかな。一日、(七)それより來たりし人に問ひしかば、或る人、「東宮にさふらひ給ひしぞ九の君とは申すめれ」と言ひければ、捕へていみじう打たせ給ひて、下に籠められければ、更にかけて言ふ人なかなり。限なくかしづきてぞ置かれたる」姉君、一孫王「あな物狂(八)ほしや。人聞きこそやさしけれ。御方の(九)おとゞや、かやうの事聞き給ふらむと、思ふこそ面恥かしけれ」彼の君、

〈語釋〉
(三)正頼
(四)忠雅
(五)上野宮が木幡の娘をあて宮と思ひてかしづき居るをいふなるべし。さらば此の孫王姉妹は上野宮のゆかりの者なるべし
(七)上野宮より
(九)仲忠

〈考異〉
(一)御髪—「髪」ナシ
(二)三の宮—ひめ宮
(六)などや—「や」ナシ
(八)物狂ほしや—物狂はしや

二孫王「更なることをもし給ふかな。(一)言種にし笑ひ給ふものを。彼の御子の御子に(二)え、其處たちいかで斯うだにあらむと宣ふ」など言ふ。藤壺あて宮「何事ぞや。(三)此の君かくて物せらるゝを、御供ならずとも、時々はものし給へかし」彼の君、二孫王「然思ひ給へれど、(四)渡らせ給はむとありつれば、同じくばとてなむ。(五)一日は、御方の御事によりて、(六)おとゞにかしこく騒がれ奉りしはや。奉り給へりし御文を、下仕のもの持てまうで來たりしかば、(七)侍りながら聞えぬと、「君こそ、などかは參りこぬとは聞えさせざりし、侍りながら。すべて心地なき」など、例のことに物し給はぬ人のむつからせ給ひしこそ、いとほしく侍りしか。さて見給ひて、「御文はこればかり寶はあらじ。今行末は、かくてしも得賜はじ」とて、人に手も觸れさせ給はぬ御厨子に納めさせ給ひて、と聞く。はしたなき目をなむ見給へりし」藤壺あて宮「孫王の君の御許にあめりし本どもを、いと煩はしく書かせ給ふめりしが、其の喜び聞えさせしぞや。此處にこそ、いと心地なしとは物せしか。賜へりける

〈語釋〉
(一)仲忠が
(二)「御子にてそこたち」歟。さらばこの孫王たちは上野宮の子どもなるべし。一本「御子そえそこたち」
(三)我方には姉の孫王が居る事故
(四)女一が御出になるとの仰せ故同じ事なら御供してと思ひて
(六)仲忠に
(七)私が居ながら取次をせぬとて

〈考異〉
(五)一日は—「は」ナシ

〈語釋〉
(一)祐澄
圖あて宮女一宮等奏樂。仲忠女一の宮の迎に來りて立聞く。女一宮歸らず。仲忠再び迎に來る。なほ歸らず。仲忠あて宮の方に宿す。
(二)近澄、女二の宮に思ひかけたる人
(四)音樂
(五)仲忠が
(七)女一方の孫王
(八)仲忠の手に
(九)仲忠が清涼殿にてひきし手を聞き覺えたるならん

〈考異〉
(三)二の宮―女二の宮
(六)取り出ださせ―を取り出ださせ―とくいださせ

人に御文を取らせずなりにけることを」など宣ふほどに日暮れぬ。

宰相中將(一)の君御番の夜、同じ番の男女まうのぼりたり。藏人(二)の少將は二の宮(三)の渡り給ひぬれば、御臺盤所に物し給ふ。藤壺、あて宮「いと久しうし侍らぬわざ(四)、今宵いかで。御前には常に遊ばすらむものを」宮、女二「更に此處にもせず。徒然なるにかき鳴らせば、つれなしや、まばゆしや」など笑(五)ひ給へば、見だにぞ見ぬ。いざ今宵、忍びて」とて、琴の御琴ども取(六)り出ださせ給ふ。かたち風をば藤壺、やまもり風は一の宮、箏の琴は二の宮、琵琶は姫宮、やまと琴はあなたの孫王(七)。御前ごとにうち置きて、先づ琴の御琴をかき合せつゝ遊ばす。いと面白し。宮、女二「あやしう、此の御手こそ、聞くあたり(八)の御手にはいと善く似たれ。いかで斯くはなりにたるぞ」藤壺、あて宮「あなむくつけや。いかでそれは、聞きにだに聞かぬものを」宮、女二「いかで、かのわたりならで聞き給ひけむ。彼(九)の夜のならむかし。此處には然ばかりだにぞ聞かせぬ」いらへ、あて宮「いとうたてある事をも聞えてけるかな。

ゆめ〳〵(一)斯く宣はすな」と宣ひて、御琴の音ども彈き合はせて遊び給ふほどに、(二)大將、宮の御迎にとて物し給ひけるを、琴どもの聲しければ、みそかに立ち寄りて勾欄の下にて聞き(三)給ふを、然も知り給はで、よろづの手を遊ばすを聞き給ひて思ひ給ふ樣、いかでか、我淸涼殿にて仕うまつりしを彈き給ふらむ、内裏の人ならばこそ、まうのぼりて聞き給はめ、いと怪しくもあるかな、と聞き驚き給ふ。御琴の音ども一つに合ひて、面白き手どもを遊ばしはやりて、人の有り無しも知ろしめさず。宰相の中將の君、藏人少將、宮あこの侍從ど間に籠り格子の内、母屋の御簾あげておはします。大將、御階よりやをらのぼりて、御簾の、御てはな穴をもとめ給へど、いみじく麗はしく造りたれば、隙もなし。あくべき物も無ければ、如何にせむと思ひ立ち給へり。かくて、夜半ばかりまで遊び給ふ。遊びはてて、物など聞食して、御殿籠りなどする程に、うち聲づくりして、仲忠「孫王の君は此處にか」と宣へば、宮たち、藤

〔語釋〕
(一)仲忠に今夜我琴ひきたりと告げ給ふな
(二)仲忠

〔考異〕
(三)聞き給ふを然も—聞き給ふさも—聞き給ふをさ

壺も心地を惑はして、「あないみじや。如何にしつる事どもぞ。(一)常に、かく心地なき事どもをする事」とて物も宣はず。宰相中將、驚きて出で給ひて、御座など敷き給へば、仲忠「此處には、宿直に參りつるなり、君の御宿直所に」と宣へば、入れ奉り給ふ。南向におはすれば、南と西との隅に、縁を織物にしたる三尺の屛風、唐錦の端さしたる御座など、中納言殿のしおき給へる物どもあり。(二)宮たち、御かたいとほしく思されて入り給ひぬ。大將、宰相の中將は内に、他君だちは簀子に、大將孫王の君して、仲忠「三條にまかり渡りて、今なむ歸りまうで來つる。覺束なきになむ。今宵は渡(三)らせ給ふまじきか」と聞え給へば宮、女二「此處には、辛うじて對面したれば、暫し斯うてなむ。彼處にあらむもの(四)一人してあらむを、などか見棄てては」大將、(五)あやしの(六)乳母おほせ言や、げにうしろめたく、と思す。夜更けぬれば、宰相中將、祐澄「怪しく昔覺えたる夜や。(七)大將などもかやうにてぞ」など物語し給ふ程に明けぬれば、つとめて歸(八)り給ひぬ。

〔語釋〕
(二)女一女二女三あて宮等
(三)御歸りなさらぬか
(四)犬宮
(五)我に乳母の役をさせんとするはけしからぬ仰かな
(七)昔は仲忠なども今夜の樣によくあて宮の許に來られしものぞ
(八)仲忠が

〔考異〕
(一)常にかく—よのつねかく
(六)乳母おほせ言や—めのとはおほせ言や

宮の御許に御文あり。

仲忠「昨夜、御遊ども承るとて、さも久しく、しらぶとは音にぞ聞きしことの音をまことにかともひきし宵かなたち歸り、すくまりてこそ(一)。内裏より召あれば參り侍りぬ。今、夜うさり御迎に。」

と聞え給へり。藤壺、あて宮「さればよ(二)」いそ(三)、女二「昔だに、唯其處(四)にのみなむおはするを」と言ふを、まして今は、珍らしき手ども彈き給へば(五)、いとかしこくなりにけりとぞ聞きけむ。まろをこそをかしと思ひたらめ。ことは皆聞きたり。此の御箏の事は、いとよくなりぬべしと言へばあへなむ」とて御返もなし。あやしと思ひつゝ(六)參り給ひて、夕さりつ方、内裏より御文あり、

仲忠「まかで侍りなむとするを、去年仕りさしゝ御文、今日仕れと仰せらるれば、皆御覽じ果てゝなむ。少しなむ難き所まじり侍りける(七)。明日の夜さりま

〔語釋〕
(一)すくまりてあかしたりといふ意歟
(三)「いそ」は「いらへ」の誤なるべし
(四)箏の上手はあて宮のみなりと仲忠が言ひしに
(六)仲忠が内裏へ

〔考異〕
(二)さればよいそ―されぱこそ
(五)給へば―給ひつ
(七)少しなむ難き所まじり侍りける―少し難き心まじり侍りけり

かで侍らむ。

と聞え給へり。女二「然らばよかなり」と言葉に聞え給て、御文はなし。女御の君おはしまして、宿直もの、寢裝束などは奉れ給ふ。

つとめて、東宮より例の藏人して御文あり、

東宮「一日いと心憂かりしかば、かく物せむと思へども、いりてらるゝ(一)と言ふめればなむ。同じ心ならましかば、と思ふこそ。

浦風にたち出でざりける白波のいまよりとのみ賴みけるかな

空言(二)をこそねたけれ。

とあり。一の宮も(三)、女二「何事をかは賴み聞え給ひし」藤壺、あて宮「厭ひて(四)など、空言は聞えさせしなめり」とて笑ひ給へば宮、女二「唯一人々々こそ、さやうにも宣へ」藤壺、藏人に、あて宮「何わざ(五)か此の頃はし給ふ」と問はせ給へば、藏人「日頃は、晝は御書遊ばし、夜はなどは人の許に遣はすや」と問はせ給へば、

〔語釋〕
(一)誤あらんか
(二)あて宮が「夜は忍びて參らん」といひし事
(三)「一宮も」の「も」衍文なるべし
(四)あて宮が參らぬは東宮を厭ひての事なりと空言せしといふ意歟
(五)東宮が

御手習、飽くまでせさせ給ふ。(一)院の御方なむ、此の月となりて、三夜ばかり(二)まうのぼらせ給ひぬる。今日は、(三)渡り給ひての日、ひとたびなむ。さてはのぼり給ふ人もなし。御文は、(四)左のおとゞの御方になむ、一度侍りし。(五)左大將殿の御方になむ、此の月に三度ばかり奉り給へる。一夜は(六)參り侍りき。(七)おとゞ、彼の御方におはします折にて、いとかしこく饗ぜさせ給ひき」あて宮「いかでか、其處のみまうでまほしからむ。祿はありきや」藏人、「女のよそひ侍りき」一の宮女二「梨壺、猶立ち交り給ふなめり」藤壺、あて宮「時の人ぞや。心いと善しとて、(八)いとらうたうし給ふ。其がうちに、親兄弟は恥かしとて、容貌も右大將になむ似給へるとぞ宣ふ。よろづの人憂きこと聞く中に、彼の事ぞまだ聞かぬ。左の大殿のは、(九)いとすくよかにいかめしき人の、萬のこと、思ひながら言はぬかな。(一〇)式部卿の宮のは、(一一)孫王のかたちにて、何心もなくなむ(一二)聞き侍る。(一三)平中納言殿は、いとさゝやかに馴れたる人の、らう〳〵しきなり。(一四)院のは見奉りき。いと物々しうなむ。淸らに、す

〔語釋〕
(一)女四宮
(三)「渡り給ひて日一日なむ」歟、東宮が女四の方へ行きて止り居給へりといふ意なるべし
(四)麗景殿、忠雅の女
(五)梨壺
(六)私が御使に
(七)兼雅が居合せて
(八)東宮が寵愛なさる
(一〇)登華殿
(一一)孫王の君に似たる容貌にての意歟
(一三)宣耀殿、正明の三女、「殿のは」なるべし
(一四)女四宮

〔考異〕
(二)まうのぼらせ—まうのぼり
(九)すくよか—すくやか—すろど
(一二)聞き—見き

べて望月の樣に、いと見まほしき容貌になむ。(一)宮、それをいとやんごとなきものに、御志もよう(二)あゐて、唯我こそと思して(三)心高くおはすめれば、常に(四)御中そばそばしきぞ」など宣ふ。かくて御文書かせ給ふ、

あて宮承りぬ。此處にも、いかで〳〵まことにと思ひ給ふれば、聞えさせたりし樣に、日の經るまゝに苦しう侍ればなむ。(五)立ちいぬと宣はせたる、

しづけきを(六)うちみざらなむ君が爲今より浪のたゝぬなるらむ

(七)とのみ聞え給ふ。內裏より又大將殿御文(八)あり。宮の御許に、

仲忠度々聞えさすれど、御返の侍らぬは、如何なるにか。かゝる御心ばへの有るにこそ、(九)如何なるにかあらむと、しづ心なく思ひ給へられて、御文も仕うまつり違ふれば、(一〇)笑はせ給ふも御面臥にこそ。

春日山今日もふみみぬものならば花はのこらず散りぬと思はむ

犬いかに侍らむ。必ず御返。

〔語釋〕
(一)東宮
(二)誤りあるべし、「ありて」は「あれど」歟
(五)「立ち出でぬと」なるべし、前の東宮の歌の詞
(六)「うちみ」は「うらみ」なるべし
(一〇)朱雀が

〔考異〕
(三)心高くおはすめれば—心にかけて思はすめれば
(四)御中そば〳〵しきぞ—御中はあしきぞ
(七)のみ—のみぞ
(八)あり—ナシ
(九)如何にかあらむと—ナシ

〔語釋〕
(一)東宮の
(二)仲忠が
(三)仲忠が退出したらば到底犬宮を見せてはくれまじ
(六)仲忠は女一を輕んずれども犬宮を珍重すと也
(七)御返事を取りて來ずば此儘放逐すべし
(九)「いふかひなや」歟

〔考異〕
(四)だに―ナシ
(五)などもさだかに―などもなほざりに―などなほざりに
(八)仰せられし―仰せられつる

と聞え給へり。藤壺見給ひて、あて宮「いとよく宮の(一)御手に似たりかし」とて、あて宮「さし較べて見るに、優にはえぞあるまじき。まかで給はぬ先に、犬宮迎へ奉り給へ。(三)おはせむ時は不用なめり」宮、女二「よう乳母(二)どもに言ひ置きたれば。先にも、これかれ「見む」と宣ひしかど、大輔とかくして出ださずなりにき」藤壺、あて宮「さらば、今の間にいざ給へ。いかでか、かゝる折に(四)だに見奉らでは」女二「宮など(五)もさだかに見給はじかし。(六)此の人は、己をば物にもせず、物も言はねど、彼をぞ恐ろしきものには。それが出でて行くとては、唯此の事をのみ、返す〴〵言ひ置きたれば、更に人にも見せず」藤壺、あて宮「あなまさり顔こそ」と宣ふ。御つかひ「(七)御返賜はずば、やがてさふらはせ給はじ」(八)と仰せられし。必ず賜はり侍らむ。今更に追はせ給はゞ、わびしく侍るべし」と申さすれば、女二「怪しや。難かるべき事ならばこそ。異なる事もなければむつかしさに、とて、

女一有りしは見しかど、覺束なからぬ程なりしかばなむ。山路には(九)ゆふかひなや。

〔語釋〕
(一)仲忠
(二)早く歸り給へ
(三)仲忠は帝の御前に勤めてありし事故

さやは。

とて、

女二山しげみふみはみずとも風またでちるべき花の色とやはみる

犬は彼方にを。

と聞え給ふ。

かくて、日暮れぬれば、(一)大將まかで給ふ。やがて物し給へり。簀子に御座などよそひて物し給ふ。御車、御前などして御車寄せさせ給ひて、消息聞え給ふ、仲忠「まかで給へるまゝに、渡らせ給ひぬべくばとてなむ、御迎に」と聞え給へれば彼方には、女二「此處に、いと久しう聞えざりつる事どもをなむ、聞えさせたる。今日明日此處になむ。(二)彼方にを早」と聞え給へれば大將、仲忠「あからさまに渡らせ給ひて、又かへらせ給へかし」宮、女二「何か騷がしき樣に」と宣へば、藤壺、あて宮「(三)御前にさふらひ給へらむものを、苦しうもこそ思さるれ。渡らせ給ひね。其方に參り來む」

〔考異〕
(一)見ずとも—「と」ナシ
(二)大將も—「も」ナシ
(三)内に—「に」ナシ
(四)若宮の御方の藏人所臺盤所—臺盤所若宮の御方の藏人所
(五)こゝの—たゞ

と聞え給へば、女二「何か此處には見ずとも、苦しからむ事はおのづから」と宣へば、大將も此方に物し給ふを、強ひてはえ聞え給はず、いと苦しと思して、仲忠「さらば、此方の宿直にこそは」とて物し給へば藤壺、南のひさしに御屏風立て、御座敷かせて、あて宮「さらば此處にを」と聞え給へば宮、女二「あな見苦しや、狹き所に。犬の許に去ね」と宣へば、大將、仲忠「何せむにか、犬の許に。内に伏すとこそ言ふなれ」とて、一日物し給ひし、君たちの宿直所に入り給ひぬ。今宵、東宮のすけの君と、物など調じて、若宮の御方の藏人所、臺盤所に物せさせ給ふ。御前どもには、折敷などして參り給ふ。大將殿の御前には、宮の御前のをまゐる。されど參らず。御宿直物取りに遣はして臥し給ひぬ。内よりも御衾出だし給ふ。御供の人もやがてあり。それにも物など賜ふ。大將、仲忠「こゝの御簾のもとに出でさせ給へ。聞えさすべき事」などあれば、女二「あな見苦しや」とて御帳の内に入り給ひぬ。皆御殿籠りぬ。

(梗)梨壺、皇子を産みたりとの報知によりて仲忠夫婦歸る。あて宮、藏人に梨壺の樣子を聞く。

〔語釋〕
(一)觸穢の事ありといふに梨壺の御産の事ならんと悟りて男か女かと問ふ也
(三)東宮より

〔考異〕
(一)侍れば—侍り
(四)有りつや—ありや

かくて夜なかばかりに、三條殿よりおとゞの御消息あり。乘雅「あからさまに物し給へ。とみなる事」などあれば、驚きて、仲忠「何事ぞ」と問はせ給へば、使「宮の御方の惱ませ給へば」と申す。仲忠「内裏より唯今まかで侍りて、みだり心地東西知らず侍れば、今ためらひて、唯今」と聞え給ひつ。とばかり有りて御使、「よし。なわたり給ひそ。觸穢の事ありて」とあれば驚き給ひて、仲忠「何ぞ」と問はせ給へば、使「知らず。へば、使「男と聞え給ふ」仲忠「宮より御使は有りつや」と問はせ給へば、使「知らず。え見給へずなりぬ」と申して參りぬ。曉になりて、中納言の君といふして、仲忠「三條にかゝる事侍るなれば、今の間にまかり渡り、立ちながら參らむ」とて出で給ふ。藤壺、あて宮「何とし給へらむ」と宣へば宮、女二「男とか言ひつや」と宣へば、あて宮「おぢきなの事や」と聞え給ふ。大將穢らはで歸り給ひて、切に聞え給へば、其の日の夕さりつ方、梨壺もとぶらひ聞え給はむ、とて渡り給ひぬ。かゝる程に、御使にはあらで、藏人まかでたり。上御前に召して問はせ給ふ、

あて宮「梨壺には、御使幾度か遣はしゝ」藏人、「聞召さゞりしに、いたく煩らひ給ふことありとて、御消息申されたる事ありしになむ。驚かさせ給ひて、其の夜、さては今朝なむ參りて侍る。男におはするなりとて、(一)人は、さこそ言へ、終にし給ひつめるかし、(二)いかでか覺えぬ筋にはなむ、申しのゝしる。あな聞き憎くや斯樣の事は」聞かぬ樣にて、物も宣はず。

畫詞 こゝは西の對。

かくて三日の夜、一の宮産養し給ふ。五日夜は大將殿、七日の夜なむ、東宮より例の御とぶらひはありける。産屋いと面白う淸らにあり。父おとゞを始めて左のつかさ人、宮人引きて、幄うちて、夜一夜遊び明かす。其の夜は(三)太政大臣、后の宮、御産養し給へり。右の大殿の君たち、左近中將に、宰相中將、左近少將に藏人の少將、頭の中將など、さらでは上達部、藤大納言、其の御弟の宰相、然らぬもいと多かり。

〔語釋〕
(一)人の噂を藏人が傳ふる也、何といひても終に梨壺が皇子を生み奉りたれば
(二)誤あるべし

(三)梨壺腹の皇子の産養。兼雅、皇子を酷愛す。梨壺の母女三宮の勢やうやく盛なり。

畫詞 こゝは梨壺の御産屋。

又九日の夜は、右の大將の御産養、例の銀の衝重、すみ物、碁代(一)など奉れり。(二)祖父おとゞ、この産れ給へる君を、限なくかなしくし給ひて、臍の緒つきながら抱き持ちて、宣ふ樣、兼雅「子といふものは、かく悲しきものにこそありけれ。(三)唯宮の小くおはするにもこそあめれ。これに、同じくば、(四)參り給ひて、一二年の程に斯からましかば、如何に嬉しからまし」と宣へば、俊蔭女「(五)のちおひのと言ふことのあれば」(六)などて、俊蔭女「我が孫にこそあれ、必らず異筋とも思ひつくらむ。院の后の宮は、(七)其處の筋にはものし給はずや。うちのは、御心もことにはあらずや。(八)などわかこそこのみにならむからに、此の筋の絶ゆべき」と宣へばおとゞ、兼雅「うたてある事かけてもえ言ふまじき事なり。昔なりせば、(九)何の疑は」など宣ふ。兼雅「小き子は、この(一〇)子持のみ(一一)こそは、目に近くは。(一二)中納言は見ずなりにき」(一三)などて此の君見奉りに常におはすれど、かんのおとゞは惡しとも宣はず。おとゞ、

〔語釋〕
(二)兼雅
(三)東宮
(四)梨壺入内後一二年の間に斯の如くならば
(五)後に生れたる方仕合せよしといふ諺歟
(六)「などとて」なるべし
(七)嵯峨院の后宮は兼雅の姉妹也
(八)誤あるべし、一本「みに」の「に」なし
(九)此皇子疑なく皇太子に立ち給ふべきに
(一〇)我が赤兒を見るはこれがはじめて「子持」は誤なるべし
(一一)「こそは」―「は」ナシ
(一二)仲忠の赤兒の時は我は見ざりき
(一三)「などとて」なるべし

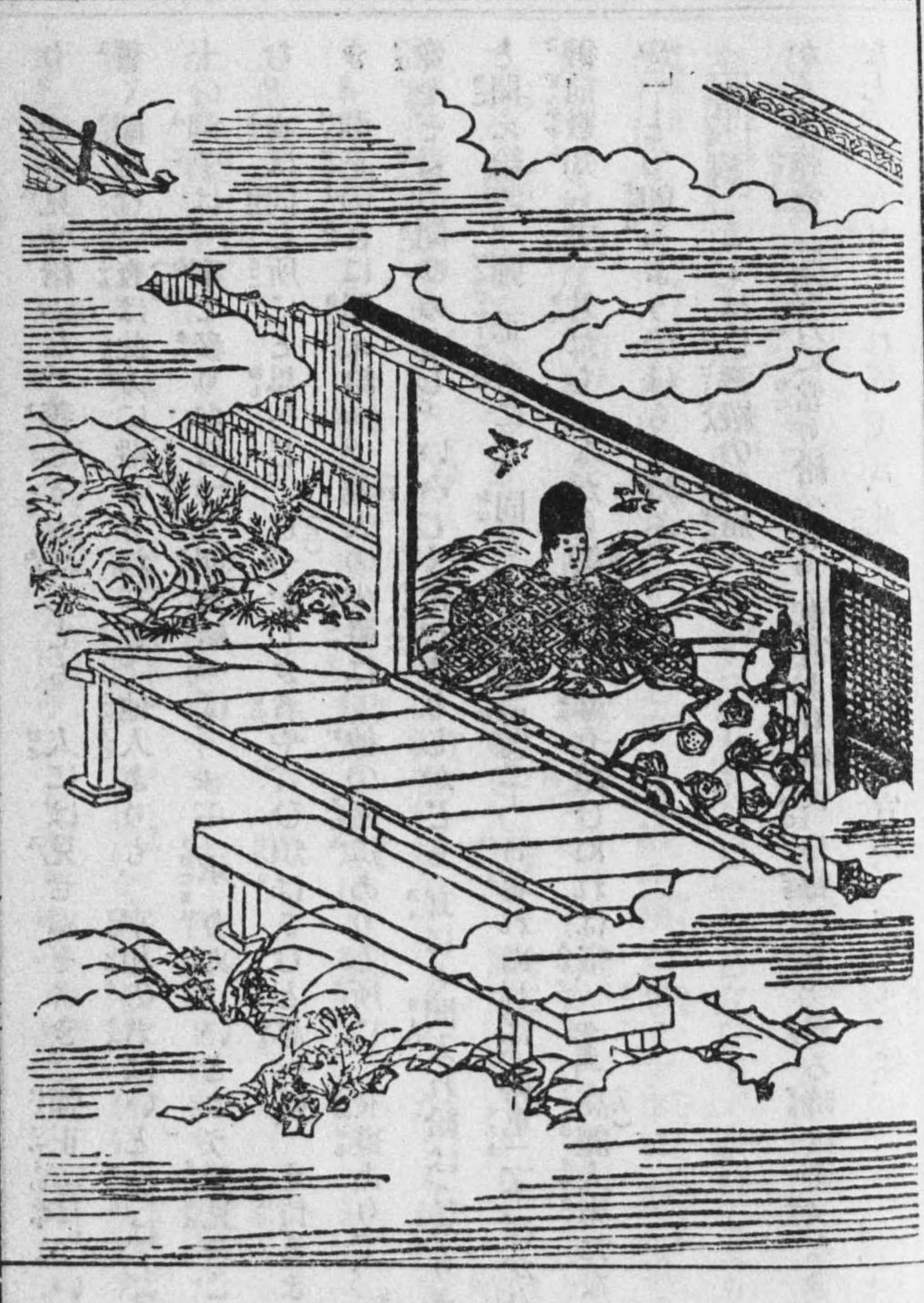
〔考異〕
(一)など奉れり―などし奉れり

兼雅「末の世に、らうたき人の物し給へば、見るとて彼方がちなるを、(一)見習はぬ心地し給ふらむと思へば、いとなむ恐ろしき」と宣へば北の方、俊蔭女「何か。おはせよ。かゝらでも物は習ふめれば、今よりこそは」おとゞ、兼雅「さればよ。前はかう宣はざりきかし」と宣ふ。されど宮の御方には、夜宿り給ふこといと稀なり。中の君とありしも、あからさまにぞ訪らひ給ふ。かくておとゞ、(二)此の宮に御心止め給ひて、次第に(三)母宮儀式いかめしくなり給ふ。

かくて月立ちぬれば仁壽殿の女御の、御衣更して、五日の日參り給ふとて、一の宮に聞え給ふやう、仁壽「參らまほしくあらねど、御國讓も近くあべかなるに、此の頃は内裏わたりにもと思ひてなむ。其の中にも、いと憎げなる(四)樣に常に(五)宣へば參る。(六)犬宮を見奉らざらむ事の覺束なかるべきを(七)なむ。さて、此の宮たちを、殿の御方に渡し奉らむとすれども、思ふ心ありてなむ。然聞ゆる樣(八)あり。此方にする。奉り給ひて、御眼離たず、見とぶらひ給へ。(九)大將いと物ゆかしくし給ふめ

〔語釋〕
(二)梨壺腹皇子
(三)梨壺の母女三宮
(五)朱雀が
(七)梨壺が
(八)女二宮姫宮
(九)仲忠

〔考異〕
㊇仁壽殿女御、女一宮に女二宮の保護を托して内裏に歸る
(一)見習はぬ—見習ひ給はぬ
(四)樣に常に宣へば—こと常に宣はすれば
(六)犬宮—「宮」ナシ
(七)なむ—ナシ



り。ゆめ見せ給ふな。善しとも悪しとも、人には見せぬぞよき。彈正宮に、いと善く聞えむ、(一)夜は此方に(二)殿ごもれなど。他人よりも、宰相の君はいと煩はしき。十の御子は、率て參りなむ」と聞え給へば、女二「承りぬ。いとよう後見きこえむ。夜は同じ所にと思へど、(三)むづかしき者や言ひ煩はさむと思へば、え侍るまじき。彈正の宮に聞え給へ。(四)藏人の少將は、彼の南にありし所に、夜晝ありて、藤壺をぞ責め聞ゆめりし。いみじく恨むめりしかども、耳にも聞入れ給はざめりき」と聞え給ふ。彈正宮にも、同じごと聞え置きて、日暮れぬれば、御車二十ばかり、御前數知らず、君だちさながら(五)御供に、參り給ひぬれば帝、朱雀(六)「高麗人來たなりや」とて卽ちまうのぼらせ給ふ。

畫詞　こゝは仁壽殿の御局。

かくて藤壺、(七)此の月に當り給へり。東宮より御使日每なり。參る時は御文なき折なし。十五日になれば、大宮、此方に渡り給ひて宣ふ、大宮(八)「先のは、彼の寢殿にて

〔語釋〕
(二)彈正宮は同胞なれば宿直して保護せよと言付けんと也
(三)仲忠をいふ
(四)近澄、女二宮に懸想せる人
(五)「御供にて」歟
(六)久々にての參內を戯れて譬へたる也
(七)御產
(八)前々の產は
〔考異〕
(二)殿ごもれ―宿直し
❻あて宮の安產及びあて宮腹の皇子立太子の祈

こそは。其處にて、そこらの子ども出で來、いと平かなり。此の君だちも、生れ給ひしかども、さて(一)人の御方となりにたるを、かゝる事なむ有ると聞ゆべきにあらず。此處にてこそは。萬のこと、所がらにもあらじ」など宣ひて、かねてより修法行はせ給ふ山々寺々に、禱の師を据ゑて申させ給ふ樣、「(二)思ほす事に疑出で來たる。これ事なく平かに、さては(三)此度の御事(四)思すやうに平かにて」と手をあがきて祈り、願をせさせ給ふ。おとゞ、此の事を疑ひて(五)思す。藤壺、あて宮「さりとも(六)宮知り給はであるべき事か。天下の(七)院の(八)御方の御腹に出でて、とも、かうも思ほすべうもあらず」と宣ひ、物など思ほして、親たちは思ほし歎けど、いとつれなくておはす。

かゝる程に中旬になりぬ。(九)太政大臣の御四十九日は、四月六日ばかりに當りたれば、御わざ果てて、暫しありて帝、(一〇)大將を、御位にておはします程に、大納言になし給ひてむと思して、唯今太政大臣無くてもありぬべく思して、なり給ふべ

〔語釋〕
(一)今は寢殿に女二宮等あれば也
(二)あて宮腹の皇子立太子の事
(三)今度の御產
(六)梨壺腹の皇子が太子に立たぬ筈はなし
(七)梨壺の母は嵯峨院の皇女なればいふ歟
(九)季明
(一〇)仲忠を我在位中に
〔考異〕
(四)思す―思ふ
(五)思す―おもほす
❾忠雅正賴兼雅仲忠以下昇進。人々の御禮まはり。
(八)御方の御腹に―御かたはらに

〔語釋〕
(一)忠雅
(二)「大納言」は「中納言」の誤か、この處誤脱あるべし
(三)正頼
(四)實忠をいふ
(六)祐澄
(七)左大辨を越えて他人が出世することは
〔考異〕
(五)設し—「し」ナシ
(八)もの—こと
(九)他の事—たが事も
(一〇)男ども—この子ども
(一一)かくれ—かくれて
(一二)惠ませ—召させ
(一三)上は—「は」ナシ

き人(一)御年若けれど、大納言(二)のやんごとなければなむ、右のおとゞ(三)、いかで此の大臣召の缺に、中納言に思ふ人(四)なさむ、と思ほす程に、祭過ぎて、二十二日に大臣召あるべし。殿ばら、其の設し(五)給ふ。左大將殿いとになく設し給ふ。右大將おりたちて政事し給ふ。此の日になりて、皆參り給ふ。左のおとゞは太政大臣、右は左に、左大將は右大臣になり給ひて、大納言には、又右大將なり給ふ。中納言には、帝、宰相(六)中將をと思ほす。右のおとゞは源宰相をと思ほす。上、朱雀「定められよ」と仰せらるれば右のおとゞ、正頼「此度の順、師澄朝臣にぞあたりて侍る。左大辨(七)の前わたり、まかりならぬもの(八)なり。かゝれど、正頼が思ひ侍るは、故太政大臣の、終取り侍るとて呼び侍りしにまかりて侍りしかば、他の事(九)申さず、實忠朝臣の上をなむ、返すぐ申し侍りしかば、「男ども(一〇)の上をば知らで、必ず相顧みむ」と申し侍りしを、喜びてまかりかくれ(一一)侍りしを、此の度の缺は、彼を惠ませ(一二)給へ」と奏し給へば上は(一三)、「師澄朝臣はさるべき事なれど、思ふ樣は、院のおはしましゝ、

〔語釋〕
(一)此處誤あるべし
(二)春海翁曰、潛上の字音歟
(三)季明
(四)誰なりとも思ひ通りに任じ給へ
〔考異〕
(五)なし給ひつ他官—なし給ふつかさ
(六)忠雅、衆雅、仲忠

此處(一)になどかくてあるを、同じ親王の胤すハずやなど言ひて、いと下臈なれば、せてう(二)なるを、さる例も有るを、祐澄朝臣をなむ思ふ。實忠朝臣は、かけたる所もなく、今は世を捨てて、法師の樣になりたる人は、何のつかさの用かあるべき」と仰せらるれば、正頼「當時におや侍る正頼が男どもまかりなり侍りて、彼等がおくれ侍らむは、此(三)の朝臣の靈の見侍らむ事なむ、いとほしく悲しう侍り。身を捨てて侍るにおいては、空しうなりて侍る後に賜ふ例と侍りなむ。況んや生きて侍らむに、などかまかりならざらむ」と申し給へば上、朱雀「さらば、ともかくも御計らひにあるべき事なるを、先づと思はれむを、誰も〳〵(四)」と仰せらるれば、源宰相をなし給ふ。おとゞの、なり給ふべき君だち怪しと思す。宰相には、御心と頭中將を(五)なし給ひつ。他官ども皆なりぬ。かくて、まかで給ふまゝに、太政大臣(六)、右のおとゞ、右大將、仁壽殿に參り給ひて、右大將、仲忠「度々の喜びを、御方にのみなむ。一の宮の御德ならずば、かく其の

〳〵と申すにも侍らず、唯今まかりなるべき職にもあらぬを、且は思ひ給へつゝみ、且は喜び聞えさする」とあれば女御の君、仁壽「いと覺えぬ筋に思しなるを」など宣ふ。(一)父おとゞも參り給へり。大將は(二)拜し奉り給ふ。后の宮、近くて御覽じて、いと憎しと思ほす。かくて今日は、太政大臣の大饗に皆參り給ひぬ。又の日、(三)左の大殿のし給ふべきなれど、忌ませ給ふことありて明日なり。藤壺のおはします西の對に、(四)宮もおとゞもおはします程に、右のおとゞ、大宮の御許に喜び申しに參り給へり。驚きながら、廂に御座よそひて、對面し給へり。おとゞ、兼雅「すなはち參らむと思う給へしを、昨日は饗の事侍りしかば、それに障りてなむ」大宮「いとも嬉しき御喜びとなむ、例よりも嬉しく。この宮にさふらふ人の、(五)(六)見苦しく珍らしげなき事にかく侍れば、(七)はじめ物し給ふだに、こと榮もなかんめるに、見苦しけれど、此處にさへは見放ち侍らむやは、となむ、此の頃此處に侍るを」おとゞ、兼雅「いと怪しう、皆人の羨み聞ゆる事の、かくのみ物し給ふこそ。などかこと物は榮なくは。今の人行末の君とこそ」宮、大宮「(一)いでや、何か斯しうは、習ひたるに侍らねば、唯此の人の姉の、殿にさふらふ御後などの數多物し給ふをのみこそ、かこちもや聞えましと思う給ふれ」おとゞ、兼雅「筋かはりたる樣に宣はすれど、兼雅が後は、大人も、童も、子孫まで皆御中にし侍れば、更に隔て聞ゆること侍らず。近きをも、遠きをも、幼きものどもは、此方に顧みさせ給へ、となむ思う給ふる。若宮、此の世のものにも見え給はねば、御方をば忝きものに。そが中にも、かくまだき、まかりなるまじき職に(二)なり侍れば、世中を長くもえ思ひ給へずなむ」宮、大宮「あなゆゝしや。御親の樣なる人だに、然も思(三)ひ給はざなるものを」と宣へば、兼雅「よろづの事御後安くを」(四)など宣ひて立ち給ひぬ。宮、さりとも我等が爲にうしろめたくも物し給はむやは、と思ほす。晝つかた、右大殿、一の宮の御許にまうで給へり。やがて藤壺の御許に御消息あり。

〔語釋〕
(一)正頼
(三)正頼
(四)正頼夫婦
(五)あて宮
(六)産の事
(七)初産でも

〔考異〕
(二)拜し—をがみ

〔語釋〕
(二)右大臣に榮進したるをいふ
(四)立太子の事を含めて言へるなるべし

〔考異〕
(一)いでや—いちへ
(三)思ひ—思う

〔語釋〕
(一)未考
(三)仲忠
(四)實賴

〔考異〕
(二)心地して侍る—心地し侍り

兼雅をはり法師の樣なる喜びに侍れど、聞えさせでやはとてなむ。
宰相中將(一)して聞え給へり。御返、
あて宮いと畏く、かく宣はするをなむ、此處には時知らるゝ心地(二)して侍る。
など聞え給へり。
歸り給ひぬすなはち、右大將(三)限なく裝束きて、花やかに、伯父にも父にも優れてまうで給ひて、大宮を拜み奉り給ふ。藏人の少將して、仲忠「暫し侍るべきを、此處彼處、喜び申さむとてなむ。御方には、今殊更にさふらはむと聞え給へ」とて出で給ふを、宮も御方も、すべての人、御簾の内に居て見奉り給ひて、あて宮「なほ似るものは無かりけり。一の宮こそ幸おはすれ。見聞くかひある人を、獨り領じ給ひて、つかひ人よりけに從へ給ふなる」と藤壺は宣ふ。(四)宰相、參り、喜び申させ給ふ。裝束いと善くして、拜み奉り給ひて出で給ひぬ。
此の頃は、藤壺今日明日とおはすとて、里の人々參り集ひて、五十人ばかりあり。宮の御方の人もいと多かり。御前にこれかれ候ひ給ひて、宰相の中將の君、祐澄「此度の悅をし侍らぬこそ、祐澄悅には思ひ給ふれ。時々、小野にまかりて見給へしかば、いと悲しげに、世中を深く心憂しと思ひて物し給ひしを、哀と思ひ給(一)へしかば、みづからの悅(二)あらましよりも嬉しくなむ。皆人然なむ思ひ侍るなる。右大殿の(三)右大將などは、かく心深く、更に恥かしき事なむ皆聞え給ひし」藤壺、あて宮「怪しき事と聞え置き給ひければ、君だちをおき奉りて、申し給ひければにこそあなれ。此處に知るべき事かは」祐澄「いで然も侍らず。(四)そなたにて宣ひし事を思したるなり。さらずば、此度はよも。(五)辨の君はいと多く先だちてなり給ひき。更に言ふべくもあらぬを、祐澄は後にまかりなりしかど、上の御心しらひに仰せられしなり」藤壺、(六)あて宮「さては君だちにも覺えまさられたりけり」とて笑ひ給ふ。
かくて夕暮になりぬ。おとゞもおはするに、(七)新中納言參り給ひて、御消息聞え給ひて、御前に出でて、(八)おとゞを拜み奉り給ふ。花やかに淸らなりし名殘に、精

〔語釋〕
(二)實忠の中納言になりたるを悅ぶ
(三)仲忠
(四)あて宮の口添による事と思ふ
(五)師澄
(七)實忠

〔考異〕
(一)思ひ—思う
(六)あらぬを—あらず
(八)おとゞを拜み—おとゞ拜し

(廿)實忠あて宮の許へ禮廻りに來る。あて宮實忠に山を出でて舊妻と同棲せんことを勸む

〔語釋〕
(一)「と」衍文歟
(三)あて宮の懷胎したるが此頃が産むべき月なれば
(四)誤なるべし、一本「いひえんと物宣はん人」
(五)「おはしまさせしを」なるべし
〔考異〕
(二)思ひ―思う

進にて損はれたれど、様もてなしなめきてめでたしと、(一)おとゞ悦び給ひて御裝束して、簀子に御座敷きて、すゑ奉り給へり。正頼「いと嬉しく、年頃覺束なく、え對面せざりつるを、思ひ給へ歎きつるを、過り給へるを、限なく悦び申し侍り。近くは殿に參りて侍りしに、(二)え對面せざりしをなむ、思ひ給へ歎きつる」中納言、實忠「世中のはかなく侍りしかば、行もし侍らむとて、しめやかなる所もとめて年頃籠り侍るを、殿の御事にてまかり出で侍りぬ。思ほえぬ悦び侍れば、驚きかしこまりてなむ。かく徒ら人にて侍れば、つかさ位の用も侍らねど、御志を見給へるなむいとかしこく侍る」と泣き給ふに、おとども、正頼「昔より、おなじ所にて見奉り馴れたれば、よからぬ子どもに等しくこそは思ひ聞ゆれ。されど思ほし疎みたれば、これをなむとり申し侍る。此處には此の宮に侍る者の、とかう侍りける、此の頃物(三)すべき頃なりければ、此方に侍るなり。本意ありていむ(四)えんと物し給はむ人、同じ所にて見語らひ奉らむとて、おはしませしを(五)、ある

〔語釋〕
(一)忠雅が太政大臣になりたるをいふ
(二)あて宮に
(四)季明
(七)「と」は「公」の誤歟
(九)仲澄
(一〇)私を
(一一)仲澄
〔考異〕
(三)魂もなく―魂を失ひ
(五)有る―侍る
(六)面伏すべきは―面伏なるは
(八)まじらひても―まじらはむも
(一二)給へむ―給へなむ

は一(一)のかみなどになり給ひぬれば、「いかでかゝる所には」とて皆殿に渡らせ給ひにしかば、此處をば、此の(二)人にかく取らせて侍るなり」中納言、實忠「もとより愚に侍るうちに、年頃魂(三)もなく、物覺えず侍りて、故殿(四)、宣ひしやうにて、さる御をはりのことも承りしが、ともかくも覺えず侍りしかば、とり申すやうも思ほえず侍りて、自ら心しも有る(五)様になり侍りける」おとゞ、正頼「何かはさしも。正頼、子ども數多持て侍れど、まことには悔しう面伏(六)すべきは侍らねど、公に交らはむに、面だたしく侍るべきもなく、人の遊せむ所には、草刈笛吹くばかりの心どもにて、いと無心にて侍り。辛うじて(七)、とざまにまじらひ(八)ても恥なかりしは(九)、はかなくて先づ隱れにき。されば、忝くとも、今はた親もおはしまさぬを、頼もしげなくとも、殿の御代(一〇)と思ほせ。正頼は、昔侍り(一一)しものの斯くなり給へると思ひ給へむ(一二)」など宣へば、中納言、物も宣はず、涙をのみ流し給へば、おとゞ、如何ばかり上手めきたりし人の、かう涙をも惜まず、世の中を心憂しとおもひ

〔語釋〕
(三)あて宮が御里に下られてからは
(四)あて宮も

〔考異〕
(一)我等は―我所々は
(二)宣ひけり―宣はゞ
(五)樣に―樣にて

たるを、おぼろけにはあらざめり、かゝる心ながら、徒らになりなば、恐ろしくもあるかな、うへ(一)我等は哀なりとは宣ひけり(二)、と思して、多くの御物語し給ひて、おとゞ、正頼「兵衛は、此處に物し給はゞ對面せむと有りし。昔人物し給へり。聞えよ」とて入り給ひぬれば、兵衛の君、御簾の内にて、兵衛「むかしを今にとこそ聞えさせ給ふべけれ」と言ふ聲いと近ければ、中納言、實忠「いと珍らしき御聲にもあるかな」とて、御簾のもとなる柱のもとに寄りて、實忠「さも久しくなりにける」など宣へば、「何れの世にか忘れ聞えさせむ。片時も思う給へ怠らねど、餘所に離れおはしますなる中に、物馴れたる樣なれば、さしわけても聞えさせねば、げに忘れずながら年頃になむ。まして(三)此方に渡らせ給ひて後は、おはしましゝ方のみ見やられ侍りて、常に昔戀しくなむ。(四)上にも、更に忘れ聞えさせ給はず、「思はずに、まめやかなる御志の有りけること」と聞え給ふ」中納言、實忠「今まで世の中に侍ると見え奉るをこそ、志なき樣に(五)。昔より今まで思う給へ集め

〔考異〕
(一)うしろめたき―うしろめたなき
(二)此處にて―「て」ナシ
(三)なほ此處もとに―こゝになほ
(四)此の簾を―と宣ひて―このすみすを―と宣ひてこのすだれを

たる事を聞えで、世の中になからむことなむ、いと(一)うしろめたき心地する。早う聞え煩らひて、死にかへり惑はれし心地なれど、今は思ほし疎むべきにもあらぬを、唯こゝもとに出でさせ給ひなむや」と聞え給へ」と宣へば、兵衛、「かく」など聞ゆれば、母屋の御簾の柱のもとに臥し給ひて、あて宮「此處にも、いかで聞えむと年頃思ひつるに、いと嬉しく物し給ふなるをなむ。さて、宣ひつべからむ事は、なほ宣へ。(二)此處にていとよう聞ゆ」と言はせ給へば中納言、實忠「今は耳も聞え侍らず。人の聞召すばかり物も聞えねば、遠くてはえなむ」と聞え給ふ。上、あて宮「かたは人にこそは。睦ましうは物し給はざりけり」と宣ふ御聲いと近ければ、いと怪しく、珍らしく思ほえて、實忠「それも、誰がしなさせ給へるにか」と聞え給ふ。兵衛、(三)「なほ此處もとに出でさせ給へ。おとゞの君も、「御消息聞えよ」と宣はせつるものを」と聞ゆれば、あて宮「いと苦しければぞや。(四)此の簾を上げ給へ」と宣ひて、御几帳外に押し出ださせ給ひて、少しさし出でさせ給へり。中納言、實忠「嬉しきに

も先づ物も覺えぬものになむ。昔、さもせむ方なく惑はれ侍りしかば、魂をしづめむと、度々(一)たゞ御文一行を見給はむ、と兵衞を責め侍りしかど、え見給はざりしを、そのかみ死(二)に侍らましかば、かゝる折もなく死なば」上、あて宮「此處にも、年頃、いかで聞えむと思(三)ふことあれど、さるべき折なくてなむ。此の山里住し給ふこそ、いと心憂けれ。自(四)ら近く聞き給ふ樣もあらむ。さやうにのみ、皆あんなる世の中なれば、うたて言ひなしつゝ驚けば、いと聞きにくしや」(五)いかで、實忠「世の中に片時侍るべうもあらず、せむ樣もなかりしかば、(六)見所侍る所の世離れたるにて、思ひ給へ慰むやとてまかりありきしに、年頃は侍れど「世の憂きよりは」(七)と言ふなれど、猶同じ樣にわびしく侍れば、所がらにも侍らず」と聞え給ふ。あて宮「まだ物の心知らざりし時は、人に物聞えず、疎きものと思ひしを、思へば今こそ、人につらしと思ほさるゝは、いとほしき心地しけれ。人々の心に見較べ奉れば、まだ忘れ給はざりけるを、常にいとほしと思ひ聞ゆるをも、聞き給はずやあらむ」

〔語釋〕
(五)「いかで」は「いら(へ)」歟
(七)古今集「山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり」

〔考異〕
(一)先づ―ナシ
(二)たゞ―ナシ
(三)侍らましかば―侍りなましかば
(四)なく死なば―なくてせば
(六)なかりしかば見所―なかりしかば如何はせん見所

と聞え給へば、實忠「世の中の事聞え侍らぬ所なれば、まして思ほされむ事はいかでか。今は親も物し給はず、よろづに身の徒らにならむを、宣ふべき人も物し給はねば、樣異(一)になりて、深き山に入りなむと思う給ふるを、斯くとだに聞え承らでや、とてなむ。覺えぬ悅の侍るを、いとも怪しがり侍るに、人のつぐる樣に侍りしかば、「さまでさて覺しける事。さりとも聞えさせてむ」と賴みてなむ」上、あて宮「御悅の事は、此度はこゝにも知り侍らず。行くさき半(二)かにも侍り、思ふ樣にも侍らば、內裏わたりの御後見は、となむ思う給ふるを、なほ此の御行の事は止め給ひて、例人の有る樣に、宮仕などし給ひなんどして物し給はゞ、此處にも絕えず聞え承らむ。さらば、げに此のわたりに御志ありとは知るべき。かく聞ゆるに、さもし給はずば、なほ元よりさる御心有りけりとなむ」中納言、實忠「かく宣はせば、時々里にまかり通ひても侍りもしなむ。世の人の樣に、人(四)につきてはえ侍るまじ。此處に聞えさせし時より、人の許には侍らず。殿に侍りしまでは

〔語釋〕
(一)出家して
(二)私の預りてせし事てはなし
(三)安產して
(四)妻を持ちては

〔語釋〕
（一）あて宮入内の後
（二）先妻
（三）元の樣にして
（四）實忠及妻子の料として父より受けたる遺産も
（七）女の形したるものは一切見たくなし

〔考異〕
（五）彼等—ナシ
（六）世の中に—世の中には

女を餘所に見給へき。それも、兵衞の君に物聞え給へてなむ。參らせ給ひて後、山里にまかり籠りては、下司にても、さる者をなむ見給へぬ。（二）自ら、君だち時々物し給ひて見給ひつらむ。今更に、なでふことかは見給ふべき。斯くながら死なむとこそ思ひ給ふれ」とて涙をつぶ／＼と落して、痛くためらひて、聞えもやり給はねば、いと哀と思ほして、あて宮「知らぬ人の、今珍らしきこそあらざらめ、昔（三）見給ひけむ人の哀なるも、持たまへるを、（三）物し給ひけむ樣にて經給へかし。世の中に見苦しかりし事どもは、皆あらまほしき樣にのみなりにためるを、只其處に斯うて物し給ふなるのみなむ、まだ見苦しかなる」中納言。實忠「それは、まかりにけむ方も知らず。（四）故殿の、（五）實忠彼等が料に侍るなるも、徒らなるべくなむ。自らも侍るべくもあらず。彼等も、（六）世の中に在るにや、無きにや、有らむとも」あて宮「民部卿こそ、在所知りたる樣に物せられしか」實忠「尋ね出でば、若し近く侍る所には、それら侍らむ。さりとも名殘なく、（七）さる容貌ならむものも見給へじ」と聞

〔語釋〕
（二）妻として持たずともよくはなきかの意歟
（三）私のいふ樣にして居給へ

〔考異〕
（一）御行心—御行の心
（四）思ひ—思う
（五）多く參り集ひ給へり—多くまゐり給へり

え給ふを、あて宮「怖ぢ給ふは、いみじき御行（一）心にこそあなれ。など（二）かは筋異なる樣には」と聞え給へば、實忠「其の筋を心憂しと思う給へ入りにしなり」と聞え給ふ。あて宮「まめやかには、こゝの爲に御志あるものならば、（三）聞ゆる樣にて物し給へ。聞ゆる樣にてあらじと思すとも、かう聞ゆることに叶ふと思して、思さるゝものならば、疎からず常に聞え承らむ。さらぬものならば、疎くて聞えじ」と宣へば、實忠「例の人の樣にては、なほえ侍らじ。斯樣に時々侍らむ、仰せごとに從ふと（四）思ひ給へて」と聞え給へば、あて宮「よし、多くも聞えじ。此處にも世の中に侍らむとも知らず。平かに侍るものならば、時々兵衞が許に訪はせ給へ。さてを聞えむ。たゞ今は、行く先の事聞えにくし」とて入り給ひぬ。中納言の君は、兵衞の君と物語し給ひて、曉に歸り給ふとなむ。

畫詞　こゝは西の對に、慶の人々（五）多くまゐり集ひ給へり。中納言、藤壺、物語し給へり。

國譲（中）

梗概

㊀正頼任大臣の大饗。兼雅任大臣の大饗。㊁實正、實忠に京に歸りて舊妻と同棲せんことを勸む。滋賀の山本に實忠の舊妻を訪ひて京に出でん事を勸む。㊂東宮よりあて宮へ贈物。出處不明の贈物。㊃あて宮第四の皇子を生む。正頼の喜。産養。㊄仲忠の産養の贈物。内侍のすけ、あて宮の前にて仲忠夫婦の噂す。實忠、あて宮に文を贈る。㊅宮の君、あて宮を罵る。實正再實忠に舊妻と同棲せんことを勸む。實正、實忠の妻子を三條の家に迎ふ。㊆東宮屢あて宮を召す。女四宮懷胎の噂。皇太子の地位につきての正頼一家の危惧。㊇女一宮懷胎。彈正宮の見舞。仲忠の痛心。兼雅、仲忠を招きて立太子に關する后宮の密旨を告ぐ。仲忠、忠こそを招きて女一宮を加持せしむ。帶を忠こそに示す。㊈兼雅、女一宮の病を見舞ふ。踏鞠。仲忠、女二宮を隙見す。兼雅、正頼に小倉の遊覽を約す。㊉近澄等の女二宮に對する熱心。⑪仲忠、女一宮の懷胎を悟る。⑫女一宮、女二宮、女四宮、兼雅、俊蔭女、仲忠等桂の別莊にゆく。兼雅、犬宮を愛す。鮎を捕りて處々に贈る。詠歌、管絃。⑬仲忠鮎をあて宮腹の若君に奉る。若君の御文を見て仲忠其の筆跡を褒む。⑭近澄、女二宮の乳母に消息す。⑮梨壺、あて宮等處々に誡す。⑯梨壺腹の皇子の東宮に立つべき噂。正頼等の心痛。⑰彈正宮、あて宮を訪ふ。⑱實正、實忠を其の舊妻を置ける三條邸に導く。實忠、女を見識らず。そで君の愁嘆。實正、實頼と共に實忠を三條邸に留めんとして盡力す。⑲實忠その舊妻に逢ひて昔を語る。⑳仲忠、實忠を訪ふ。正頼、實忠を

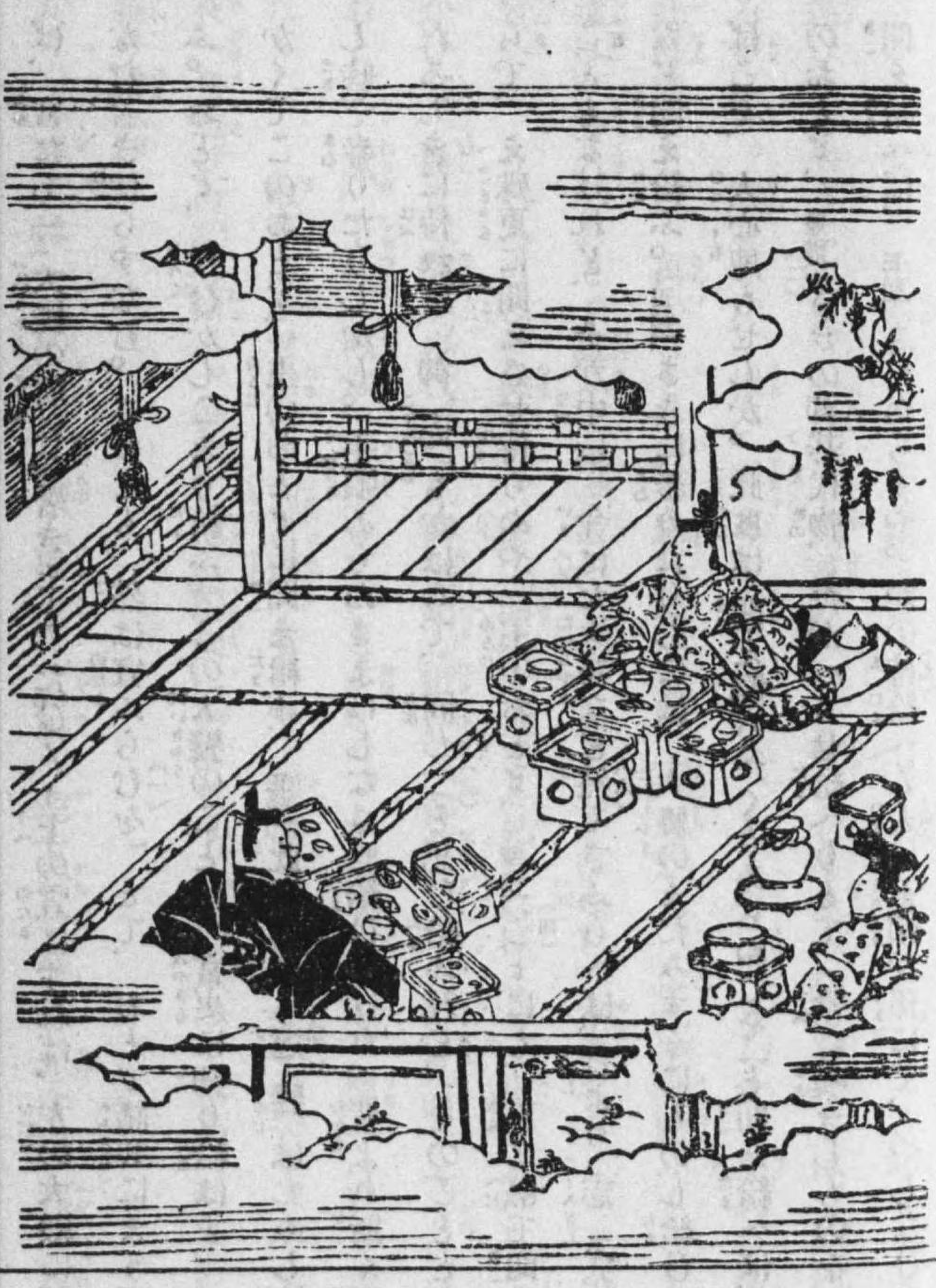
㉑正頼任大臣の大饗。兼雅任大臣の大饗。

〔語釋〕（二）正頼
（三）あて宮
（四）兼雅任大臣の大饗

〔考異〕（一）かくて—かうて
（五）大殿の—大臣殿
（六）たり—ナシ
（七）しつゝ—して
（八）て率て—ナシ

訪ふ。㉑實忠、あて宮と文を贈答す。㉒實忠夫婦の情舊に復す。實正、實忠の文を見て其の情を悟る。㉓正頼食物を實忠に贈る。實忠小野に歸る。㉔東宮よりあて宮へ消息。東宮、あて宮の返事なきを怪む。

（一）かくて今日は、（二）左の大殿の大饗、やがて（三）この御方の御前にて、寢殿おもしろく、造り様いかめしければ、し給ふ。例の如いかめし。上達部は、皆例の人々なれば、御方ことに見給はず。右のおとゞとばかりぞ客人にて物し給へる。又の日は、（四）右の（五）大殿の、いといかめしうし給ふ。三條殿いとおもしろく淸らに造りなされたれば、其處にてし給ふ。寢殿は上達部の座にしつらはれたり（六）。東の一の對をば宮たちの御座、大臣の座には二の對、廊かけて、所々せられたり。上達部、つねに物し給はぬ所なれば、御心づかひしつゝ（七）まうで給ふ。左のおとゞも物し給ふ。右のおとゞ、兼雅「こゝには、この大饗しはじむる日なるを、畏くとも、宮たちかたらひ聞えて率て（八）奉り給へ」と聞え給へれば、彈正の宮、帥の宮に斯う〳〵と聞え給へ



〔語釋〕
(二)俊蔭の卷の末に見えたり
(六)仲忠が正頼の外孫たる女一を娶りたれば
(七)「みすく」、田中道麿曰、未熟歟、一本「みすゝ」
(八)あて宮を仲忠に娶せんと還饗の時約束せし事
(九)仲忠が妻の女一宮は

〔考異〕
(一)らむをとて―らむを聞きていかゞとて
(三)ごと―ごとく
(四)こゝにも―こゝにても
(五)こととも―こととども

ば、宮たち「大饗の所にな著きそと、たび〳〵上の宣はすれば、左の大殿にだになむ著き侍らずなむ。さりとも、然は宣ふらむを(二)」とて、おとゞ諸共にまうで給ふ。おとゞ、悦びかしこまり給ふ。この大饗のことは、宮吏に知り給はず。

かくてこのおとゞ、主のおとゞに聞え給ふ、正頼「此處には、還饗(三)はじめし給ひし時ぞ參りたりしかし。年頃あらぬさまにしなさせ給ひてけり。昔より斯く習ひたるしきに侍れば、御志もかはらで、同じごと思ひ給ふれど、そのことども侍らで、え殊更に聞えさせ侍らぬや」主のおとゞ、兼雅「こゝ(四)にも、更に隔て聞ゆる(五)こともなけれど、そが中に、今はた大將など然て(六)さふらへば、昔より志ふかく」など聞え給ふ。正頼「さきに參りたりしには、大將のまだみすく(七)にものし給ひしかばこそ、人心地もせしか。此度は、聞え觸るべくもあらぬこそ」と聞え給へば、主のおとゞ、兼雅「さきの御碁(八)代物、たがへさせ給へりとて、常に嘆きしものを」と聞え給へば、正頼「さて奉らずや。かの持(九)給へる人は正頼が孫にて、やしなひ奉る

〔語釋〕
(三)實忠
(四)實忠が參られたるは
(五)誤脫あるべし、季明の賴みによりて特に實忠を保護したる也との意なるべし
(七)あて宮の事
(九)實忠

〔考異〕
(一)あらじ―ナシ
(二)なむ―なむ侍る
(六)なむ―ナシ
(八)など―と

㊁實正、實忠に京に歸りて舊妻と同棲せんことを勸む。滋賀の山本に實忠の舊妻を訪ひて京に出でんことを勸む。

ぞかし。見奉り給ふに效なくはよにもあらじ(一)」主のおとゞ、兼雅「されど、本意違ひたるやうになむ(二)。一日、(三)中納言の、いと珍らしう參られたりけるは、如何なる事にか。殿をふかく恨み奉りて交らはれぬ、とこそ承りしか。然(四)あるは、此度のことは、萬のことを斯う忘れぬべき御志ぞかし。これを見給ふるこそ心遣は」客人のおとゞ宣ふ。正頼「故おとゞ(五)のありしかばなむ(六)」主のおとゞ、兼雅「さ宣へる、うしろめたき樣なり。(七)かの筋によりてと見たればこそ、世の人みな心づかひし、畏まり聞ゆめれ(八)」など御物語し給ひて、御中いとよけに見ゆ。女方には、おとな、童、下仕、限なく裝束きていと多かり。かづけ物ども、樣々にいとめでたくして取り出させ給ひ、引出物みなあり。御たちはいと心ことなり。かくて夜一夜遊びあかし給ふ。御前の池に鶴樂にあはせて、出で來つゝ舞ふ。つとめて歸り給ふ。

かくて中納言(九)は、此の殿に又物し給ひて、小野へ還り給ひなむと思すに、藤壺宣ひ

〔語釋〕
（一）あて宮が
（二）あて宮の話を聞かぬ時と同樣の生活をせば
（四）以下あて宮の事
（五）「つくしやかに」歟、一本「つゝしやかに」
（六）あて宮
（七）季明存命にて
（九）師澄
（一一）舊妻
（一二）洗濯
（一三）あて宮にも啁したる事なるが

〔考異〕
（三）あばめて—あはせて
（八）おとゞ世におはしまして—おとゞもおはしまし世に
（一〇）には—にも

しこと如何にせむ、然宣ふとて里住をせば、今は何の効かは。心ならぬやうに、世の人こそ思はめ、強ひて山里にあらば、本意かくてあらむと思ふにこそ有りけれ、とこそは（一）思ほすべかめれ、など思ほしわづらひて民部卿に、實忠「斯う〳〵なむ有りし」と聞え給へば、實正「然りけむものを、まことにその事を思ほさば、（二）同じやうにて物し給へば、志なき様にこそは。かくて物し給はゞ、公私惜しみ聞ゆれば、聞きにくさには。事し侘び、うちあばめて（三）、泣く〳〵まじり給ひしかど、夢ばかりの聲をだにし給はず、世の中に心をも（五）つくしやかに（六）思はれ給へる人の、今（四）更に對面してさ聞え給ひけむも聽き給はず、年頃の御志の消えぬるにこそはあらめ。この度の御悅は、（七）（八）おとゞ世におはしまして交らひても、右大辨（九）をば越し給ふべくもあらぬを、おほろけの御志（一〇）にはあらず。なほ時々は小野にも通ひ給ふとも、かの山里に物し給ふ人（一一）、むかへ奉り給ひて、御すまし（一二）の事など申させ奉り給へ」中納言、實忠「身一つは京に通ひつゝも侍りぬべし。（一三）彼處にも聞えてき、古

〔語釋〕
（一）妻は持つまじ
（二）袖君
（四）此後子が出來たりとも
（五）自分が袖君を世話せねばなるまじ
（七）實忠の舊妻
（九）實忠の舊妻

〔考異〕
（三）大君も—大君は
（六）御料の御調度ども—そこらのたからなども
（八）民部卿は—民部卿母
（一〇）いで—いらへ

きにもあれ新しきにもあれ人（一）は更に見給はじ」と宣へば、實正「さらば、かの（二）大（三）君も知り給はじとするか。また出で來とも、小くこそはあらめ。大人になり給へる人を知らじと思すらむこそ（四）」實忠「いで、何か今は。身をだに知らぬものを」と宣へば、實正「さらば、（五）此處にこそは尋ね聞ゆべかなれ。殿の奉られたんなる御料（六）の御調度ども、家など、誰にかは。徒らになされて効なくこそは」など宣ふ。中納言、實忠「こゝに賜へる所は、え侍りぬらむや。然りぬべくば、時々侍りぬべからむ様にしなさせ給へ」いらへ、實正「其處は、全く無くはあらざりし所なり。（七）女君の御料なるなむ、萬の物具して、たゞ今も、おはしたらむに便なかるまじき」など聞え給ふ。

かくて民部卿（八）は北の方（九）の住み給ふ山里にまうで給へれば、北の方對面し給へり。民部卿、實正「年頃いとおほつかなく、何處にものし給ふらむともえ承らざりしを、ある人の、斯うてなど申すにつきてなむ、承りし。いで（一〇）あさましや。されど、

あやしき御中ならむ、御歎なるべし。中納言の君の、ありし様にもあらずなりためる(一)」と聞え給へば、實忠妻「あなうたてや。悪しかれとも思う給へねばこそ、あらまほしきやうにては。さても、訪ふべき人(二)だに、年頃まで夢の中にも聞えぬに、思ひの外におはしましたるをなむ」民部卿、實正「宣(三)はせしことのある(四)を、すなはち參り來むとせしかど、程なく御思になりにしかばなむ。宣はせしやうは、「こゝに物したらむ女君をば、(五)殿の御子になし奉りて、實正ら(六)仕うまつれ。親は世の中思ひ離れ給へる(七)人なめり。さればえ知り奉り給はじ」とて奉り給ひし物ども記したる文奉り給ふ。實正「この得給へる殿は、ことに廣くはあらねど、若き人の住み給はむに、いとおもしろき所なり。(八)かく思ほしてにやありつらむ、年頃御心とどめて造らせ給ひ、(九)有るべきこと皆なむせられたる。はやく渡らせ給へ。この南殿は、中納言の君なむ賜はり給へる。近隣にて、今だに御中よくてものし給へ」と聞え給ふ。北の方も見給ひて、いみじく泣き給ふ。實忠妻「かくあさましき所なれば、

（語釋）
（一）他に仔細ありての別居ならば一入の歎なるべし
（二）實忠
（三）季明の遺言
（五）父の喪に服することとなりし故延引せり
（六）父の
（七）袖君を季明の子にして
（八）季明がかねて袖君に讓る積なりしと見えて

（考異）
（四）あるを—あるをなむ
（九）有るべきこと—有るべききさま

世の中のことをさへ聞えぬを、殿(一)の御事も、久しくありてなむ承りし。いみじく悲しく、親もなき様なる人を(二)持ち侍りて、さりともおはしまさば(三)と思う給へ(四)つるものを、かゝる事をさへ宣ひける」とて泣き給ひ御服などをも著給へり。例の御服をぞ(五)君は著給へる。實忠妻「かく承らましかば、この侍る人にも重き御服をこそ著せ侍るべかりけれ。心ときめきの様なれども」とて濃き鈍色の御衣一かさね、黒橡の御小袿取り出でて、著せ奉り給へり。民部卿、泣き給ひて、北の方、

實正 山里(六)にひとりながめてわが宿の藤のさかり(七)をいかで聞きけむ

忠實妻 松かれて藤のみありときゝしかば我も袂はふかくなりにき

と聞え給ふ。民部卿、實正「そもそも女君は、(八)いかゞ生ひ出で給へる。昔は、名だたる人に劣るまじく聞え給ひしを」とて御簾をかき揚げて見奉り給へば、鈍色の御几帳立てて、親も子も居給へり。姫君、薄鈍の一かさね、(九)御小袿、かいねりの

（語釋）
（一）季明の薨去も
（二）袖君
（三）季明御存生ならばと
（五）袖君は喪服を著ざる也
（七）喪服をきるべき時

（考異）
（四）思う—思ひ
（六）山里に—山里を
（八）いかゞ—いかに
（九）御小袿—御袿

袿一かさね著給へり。御年十七ばかりにて、(一)御髪いとめでたし。頭つき御有様いと美しげにておはす。母君、いと物々しく愛敬づきて、髪うるはしく、清げなり。今は年三十五のほどにて居給へり。民部卿、(二)女君に、實正「まろを親とはおほせ。今はよろづに仕うまつらむ」(三)なとて御髪をかき出でて見給へば、いと多くて、七尺ばかりあり。北の方、實忠妻「髪などは生ひぬべく侍りしかど、世の中の斯くなりにしより、夜晝おもひ歎き、ある時は伏し沈み、頭ももたげず嘆きて、顔かたちも、人のやうにも生ひ出でぬなめり。怪しく、この子どもは、人にも似ず親を戀ひかなしみつゝ、一人は徒らになりぬめりき。(四)これも、今に忘れざめれば、また如何あらむ、となむ」民部卿、實正「いと怪しや。何でふ契ある事にかありけむ。萬の事妨のやうにあめれば、世の常ならぬ(五)御好となむ見給ふる。今はなほ、里の殿へ出で給へ。今よき日とりて、御迎に」と聞え給へば、實忠妻「いなや。今更に、(六)憂かりし里にも何か。(七)若き人の、(八)おはしまさむ所にも參り侍れかし。此處には、やがて(九)黒き

〔語釋〕
(二)袖君
(三)「などとて」なるべし
(四)袖君も今に父を戀ひ慕ひ居る故
(八)若き袖君は實正の處へ引取らるゝもよからん
(九)身を墨染にやつして

〔考異〕
(一)十七ばかり―十七さいばかり
(五)御好と―御好に―御好にと
(六)憂かりし―便りしもなき
(七)何か―何かは

さまにても歇み侍りなむ。此處ながらもなむ」いらへ、實正「あぢきなき事を。早わたり給へ。そこにさへ添ひ奉り給はずは、いかでか、(一)後見聞え給ふ人なくては。さても世捨て給ふばかりの程にはあらざめり。(二)かの君も、つひにさてのみや歇み給はましと思す心なぐさめ給ふ折も有りなむ」(三)など聞え給ふ。斯うて物まゐり給ふ。色々の折敷四つして、ひきほし、菓物などして、御肴とて、(四)前に柑子、橘、ひとこ、(五)あふちなど有るをとらせ給ひて、御酒まゐり給ふ。御供の人には、御前にも、(六)下人にも、皆さまぐに、御前には皆腰插賜ひ、下人には祿など賜ひてかへり給ひぬ。

[畫詞]こゝは志賀の山本。

かくて藤壺、(七)今日明日にあたり給へば、みな御産屋のまうけさせ給ひて、大殿におはしませば、君たちは、三所、四所、夜ごとに宿直し給ふ。御方におはしまして、あるは夜とまり給ひなどする程に(八)宮より、(九)よき程なる銀、黄金の橘、一餌袋、

〔語釋〕
(三)實忠
(五)未考
(七)あて宮の御産
(九)東宮

〔考異〕
(一)いかでか―いかで
(二)世捨て―世なれ
(四)とて―にて
(六)あふち―あぶらもちち
㊂東宮よりあて宮へ贈物。出處不明の贈物。
(八)給ひなど―給ふありなど

〔語釋〕

(五)皇子たちへ贈ると也

(六)古今集「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

〔考異〕

(一)思ひ―思う

(二)過されし―過されにし

(三)つらさにこそ―つらさにもこそ

(四)やられ―やられて

(七)切りて―「て」ナシ

(八)似せて―ほらせて

(九)仰せごと―仰せごとを

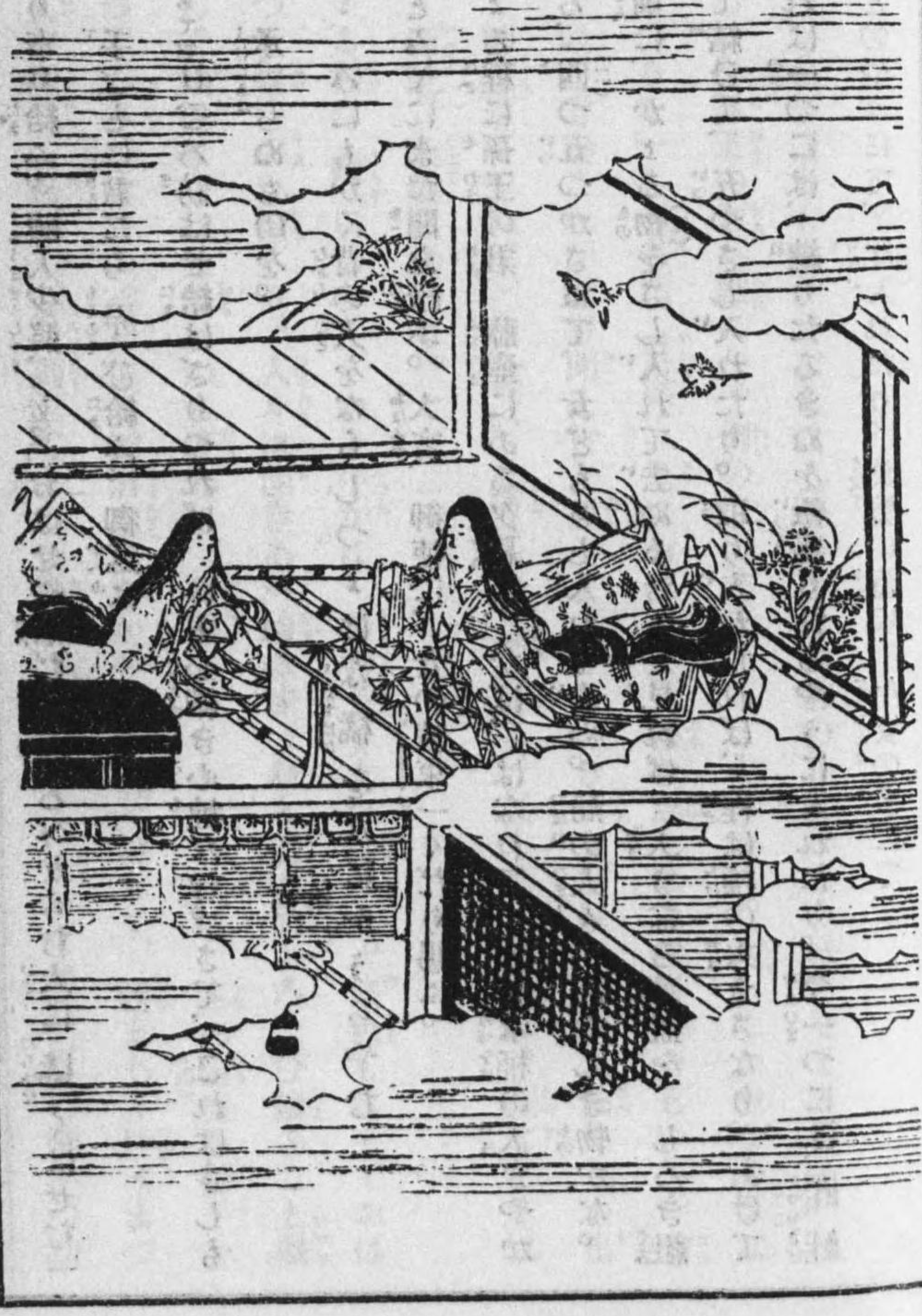
黄ばみたる色紙一かさね掩ひて、龍膽の組して結ひて、八重山吹の造り花につけてあり。おほん文には、

東宮 おほつかなからぬ程にと思ひ(一)給へど、たのめし程を過され(二)しかば、それがつ(三)らさにこそ此の頃は夜の間はいかゞと、覺束なく思ひやら(四)れ。さて、これは幼き人々(五)に、そこに見給ふほとだに、哀にし給へかし。

うらやましいま(六)五月まつ橘やわがみにひとはいつか待ち出む

と思ふ、心もとなくなむ。

とて奉り給へり。大宮、御袋あけて見給へば、大いなる橘の皮を、横さまに切り(七)て、黄金を實に似せ(八)て、包みつゝ、一袋あり。大宮、「あな煩はしや。いかで、こは、せさせ給ひしぞ」と問はせ給へれば、例の藏人、「兵衛殿、中納言殿の仰せごと(九)承り給ひて、お前にて、これかれなむ仕うまつり給ひし」宮、大宮「かやうのをかしきわざは、かの君ばかりぞし給ひ出でられけむかし」これかれに、押し包みてく



ばり奉り給ふ。藏人少將、近澄「おはせや(一)君だち、然るべからむ人に橘くはせむ」
と、手ごとに君だち弄び給ふ。御返は、
あて宮「日ごろ訪はせ給はざりつれば、いと心細き心地なむ。さて、これはさしも
承らぬものを。
　みにもかく昔の人をならしつゝはな橘をなにかうらやむ
ことゞ〻にまた聞え給ふ。大宮、御使に、女の裝束一くだり賜ふ。
かゝる程に孫王の君、藤壺にある夕暮に、かは、はなれてくろき水桶の大きやか
なる、(二)四つ五つかさねて、女どもさし入れて去ぬ。局の人々、「あやしき物かな。
御前に、かゝる物(三)をさし入れて去ぬる」とて見れば、大きなる葉盤を、しろき組
して結ひて、五つさし入れたり。取り入れたれば、程は桶の大きさなり。あけて
見れば一つには、練りたるきぬを飯盛りたるやうに入れたり。今一つには、鰹、鮭
などのやうにて、沈入れたり(四)。葉盤の蓋に、生女の手にて、

〔考異〕
(一)おはせや―おはすや
(二)四つ五つかさねて―四つついかされて
(三)物を―「を」ナシ
(四)沈入れ―沈を入れ

　今日ならむ辛うじて(一)一つづつのりつかひしてくまにはなとか
　ねぎごとも肯かずなりにしかさまには神のおほかるくほてそてとぞ
とあるを(二)孫王の君、「誰にか。例の人のすさびにこそあめれ。久しくかやうの事な
かりつるを」と宣ふ。乳母、「里におはします程を思したるなめり」といふ。(三)君
は、いかでかこれが返事聞えむと思へど、さるべき折もなければ、お前にとり出
でて御覽ぜさすれば、あて宮「いと淸げなる神のおろしかな」と宣ふ。鰹などくば
り、飯粒、葉盤は持たり。
かゝる程に晦になりて、いと平かに、男御子うまれ給へり。氣色もなくておは
しつる程に生れ給へり。人々は聞きあへ給はず。おとゞ、宮、よろこび給ふこと限
なし。如何ならむと思ひつる度しも、何事もなくし給へれば、生れ給へる(四)御子を
うつくしみ(五)おはさふ。宮より御消息たちかへりあり。おとゞ、睦ましく仕うまつ
る人を御前に召して、萬調じてまゐり(六)給ひ、思ふやうに人のえせぬをば、御手づか

〔語釋〕
(三)孫王の君
(六)あて宮に食はせ

〔考異〕
(一)一つ…なとか―一つい〻のりつるひしてくすにはなとか
(二)此歌誤脫あるべし

㊃あて宮第四の皇子を産む。正頼の喜

(四)給へる―給ひつる
(五)おはさふ―おはさうす

らし給ふ。宮の御腹の君だちは、籠りておはす。御手づからし給へば、君だち、「何(一)事をか仕うまつらむ」と聞え給へばおとゞ、正頼「其處たちは、まだ見知らぬならむ。翁は、多くの子、孫の母も勞りならひたり。(二)かゝる人をば、この折によく勞り心しらひつれば、容貌もことに損(三)はれぬものなり。宮の斯う思すなるに、つひやかさでこそは參らせめ」とてよろづに有り難き物をしてまゐり給ふ。

產養し給はぬ人なく、いと淸らにし給ふ。(四)宮より、七日のは、御屛風、御座よりはじめて、長持の脚つきたる三つ、辛櫃五よろひに、綾錦よりはじめて、萬の物入れさせ給へり。御文あり。御使は太夫。

東宮(五)たび〱のは見給へき。自ら宣はねば、おぼつかなくなむ。如何にと思ふ驗にや、ことなる事なくて物し給ふなるを。よろこび、萬の事見ぬ物となりにけるこそ、あらためまほしくこそ。さて、これは、旅人(六)の料にとて。あまたの親になり給ひぬるをなむ、いと哀に。今は、とく對面もがな。とのみ

〔語釋〕
(二)產婦をば
(三)損害なき樣にしてあて宮を內裏へ還すべし
(四)東宮
(五)度々の御返事は
(六)あて宮をいふ

〔考異〕
(一)何事をか仕うまつらむ—何事をつかまつらむ

なむ。然りぬべくば、夢ばかりも自らも宣へ。うちも驚かされたりとも(一)、いとよく見えつべしや。

とて奉り給へり。大宮見給ひて、大宮「かく人の親になり給ひて、心しておはしますこそ哀なれ。覺束なしとあめるを、御返(二)も、臥しながら聞え給へかし」と宣へば聞え給ふ、

あて宮 承りぬ。まだ筆も取られ侍らねど、覺つかなしと宣はせたれば、臥しながら聞えさする。如何にと思ひ歎きつるを、今日まではがく聞えさするを、後はいかゞ。人の親にとか宣はせたるは、よろづ(三)はや見るとかいふなることをなむ、今斯う思ひ給ふるこそ。旅人に賜はせたる物は、あるじまでなむ悦び聞ゆる。他事には。

と書き給へれば、宮つゝませ給ひて、御使に女のよそひ、下人に祿など賜ひて、奉り給ひつ。

〔考異〕
(一)ともいとよく—とていとゞよく
(二)御返も—御返事も—御返しも
(三)よろづ—よう

一の宮の御方より、子持の御前、おとゞの御前、兒の御衣、襁褓、いと淸らに調じて奉り給へり。白き折櫃に、黄ばみたる繒かきて、白き黄ばみたる錢つゝみたり。御いし(一)の臺に、例の鶴あり。洲濱に、

ゆく末も思ひやらるゝいしにのみ千歳の鶴をあまた見つれば

大將の君の手にてかき給へり。

源中納言殿の北の方、いといかめしう仕うまつり給ふ。男がたのは、左衛門督(二)の君、よろづの所々のこと、皆君だちあたり給ひつゝし給へり。所々より御産養し給はぬなし。おとゞの君は、外に出で居給ひて、おはしまさひし時は客人御子(四)たちもいさゝか集(三)ひ給ひしを、今さしもあらねど、太政大臣、御子たちをはなち奉りて、右大殿(五)よりはじめて、まうで給へり。宮の殿上人などは、無きなし。下人も殘るなく參れり。かくておとゞ(六)の御笛、御琴ども遊ばせば大將、仲忠「年頃、久しく承らざりつる御遊は、今宵の料におかせ給ひけるにこそは」おとゞ、正賴「後

〈語釋〉
(一)石の臺歟
(二)忠澄
(三)此處解しがたし誤あらんか
(六)正賴

〈考異〉
(四)御子たち―きんだち
(五)右大殿―右大臣

生の恐ろしかりしかば、みゝ(一)はすはりにしを、今宵は、いたちのまとこそ聞き給へけるは、物一つあそばせ。仕うまつりて試みむ」と宣ひ(二)て、笙の笛を奉り給ふ。おとゞはかはぶえ(三)を遊ばす。兵衛督、中納言、大篳篥。これかれ御琴ども遊ばして、夜一夜遊びあかし給ひ、歌などよみ給ひつゝ、曉には、みな物などかづき給ひてかへり給ひぬ。つとめて宮、昨夜の物、こゝかしこへ奉れ(四)給ふ。涼の中納言、はての日いといかめしくし給ふ。

かくて九日の夜は、大殿、内裏の大饗の御前のものし給ふ。こゝかしこより、いと淸らにて奉り給ふ。右大將殿、大いなる海のかたをして、蓬萊の山の下の龜の腹には、かうばしき(五)葡萄を入れたり。山には黑方、侍從、薰衣香、あはせ薰物どもを土にて、小鳥、玉の枝、竝み立ちたり。海のつらに、色黑き鶴四つ、皆しとゞに濡れて、そらなる鶴をばいと黑う(六)、白きも六つ、大きさ、例の鶴のほどにて、銀をはら(七)ふくらに鑄させたり。それには麝香、よろづの有りがたき藥(八)一つ

〈語釋〉
(一)耳は
(二)謂か
(三)口笛

〈考異〉
(四)奉れ―奉り

㊄仲忠の産養の贈物。内侍のすけ、あて宮に仲忠夫婦の喩す。實忠文をあて宮に贈る。

(五)かうばしき―かぐはしき
(六)黑う―ナシ
(七)はらふくらに―はらふくちに
(八)藥―菓

〔語釋〕
(四)あて宮の

〔考異〕
(一)近く—近う
(二)ごとして—ごとくして
(三)裝束など—裝束どもなど

づつ、入れたり。その鶴に、

　藥おふる山のふもとにすむ鶴のはをならべてもかへる雛鳥

何處よりともなくて夕暮の紛にかきすゑたり。涼の中納言の君、かやうに弄び物の具まで奉り給ふ。その夜も、これかれおほみ遊などして、今宵は氣近く(一)してなまめきたり。

夜明けぬれば、つとめて御座敷きかへ、例のごと(二)して、人々裝束(三)などしてさふらふ。内侍のすけ、はじめより參りて、例の御湯殿の行事す。御湯殿は、孫王の君に、殿守といふ參る。しめやかなる折にて、お前にてこれかれ物語するついでに、内侍のすけ聞ゆ、すけ「こゝらの御産屋にあひまうでける中に、物多く賑はゝしかりし事は、(四)この御産屋。七の寶降り、おもしろく、心肝榮えし事は、犬宮の御産屋。此度のは、いとあらまほしう、淸らにぞ侍るめる。兵衛督殿は、おもしろき事はなくて、いかめしく賑はゝしき事はいみじく侍りき。かづけ物淸らに、萬の

〔語釋〕
(二)仲忠
(三)女一宮
(四)女一があて宮方に
(五)仲忠が迎に

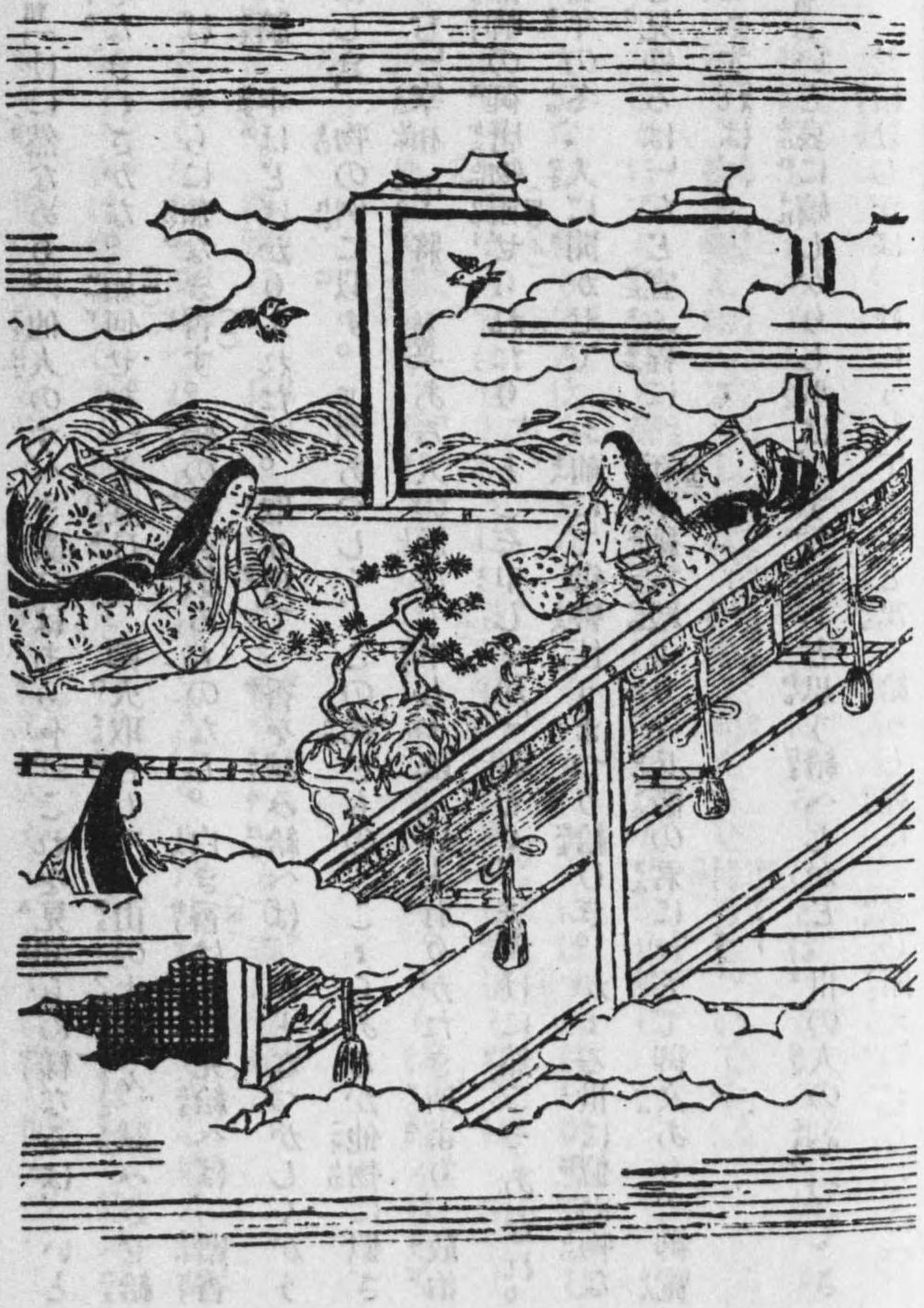
〔考異〕
(一)心地は—「は」ナシ
(六)此以下誤あるべし

物は七の寶にしかへして、いと淸らなりきや」といへば藤壺は、あて宮「一の宮の御方にて、けに珍らしき心地(一)はし給ひけむかし。さる人の、心に入れて、居立ちてし給ひける事なれば」内侍のすけ、「さて、更にも生れおち給ひしすなはち、父おとゞの舞し給ひしよりはじめて、面白き事ぞ限なく侍りし。大殿、七日夜は舞し給ふ事、こと上達部すかし給ふとて宣ひ、琴彈かれなどせさせ給ひしは、さる事は何處にか。さる效ありて、犬宮のいとをかしくぞおはする。この頃這ひなどして居給へり。人御覽じては、たゞ笑ひに笑ひ給ふ。(二)おとゞの君は、とみの事あれど、率て遊ばせ給ひつゝ、はた立ち給はず、夜、晝、膝にぞすゑ奉り給へる。けにいと美しきや」御方、あて宮「宮(三)との御中は如何あなる」すけ、「如何ばかりめでたき御中ぞ。そは、先つ頃此方(四)におはしけるに、參り(五)給ひけれど物聞え給はざりければ、五日六日入り臥し給ひてこそは、恨み奉り給ひしか。(六)御遊これかれし給ひしを立ち聞きしかば、御方の琴の御琴を、この筋にあそばしゝがいと怪しかりし

〔語釋〕（一）仲忠が奉りたるものなれば

（二）孫王の君が

かな、同じ樣なる物の音とは言ひながら、此の族は筋ことなることの、お前にて仕うまつりてはなむ、恐ぢ給ひしか」あて宮「さて宮はいかゞ宣ひし」と問ひ給へば、すけ「いかでか、斯うはしも聞き給はぬものを。まことに聞えたるならむとこそきゝ給ひしか」と聞ゆれば、よくも宣ひけるかなと聞召す。かくて大宮は、孫王の君に一夜とり置かせし物どもして參れり。蓬萊の山を御覽じて、あて宮「いと煩はしくしたるものかな。何處のならむ」と宣ふ。孫王の君に語らひて、參らせ給へれば、（一）をかしと思ひつれども、岩の上に立ちたるこの鶴どもを取り放ちつゝ見給へば、（二）沈の鶴はいと重くて、取る手しとゞに濡る。「あないみじの物どもや」と言ひのゝしる、銀のは、かねなれど殊に重くもあらず。腹に物をしたに入れたり。書きつけたる歌は、黄金の泥して、葦手なり。「これは、誰が手ぞ」とあつまりて見給へどえ知り給はす。御方御覽じて、あて宮「大將の御手にてこそあめれ。若宮にとて、手本あめりし、同じ手なめり」と聞え給へば、おとゞ、



〔語釋〕
(五)實忠

〔考異〕
(一)如何—いかに
(二)香す—かをりす
(三)香はなど—かはなど
(四)領ぜられたり—えられたり

正頼「げに然なめり。他人のすべき業にはあらや。これを見知らぬ様なるは、いと心なきわざかな。如何せむ(一)」と宣ひて、御火取召して、山の土所々試みさせ給へば、さらに類なき香す(二)。鶴の香も似るものなし。白き香はなど(三)見給へば、麝香の臍、半ほどばかり入れたり。取う出て、香を試み給へば、いとなつかしくかうばしき、物の例に似ず。正頼「あやしく、この物どもの、こゝらあるが他物に似ざらむ」宰相中將、祐澄「ある人の忍びて申しゝは、「いと有りがたき所より、故治部卿の御唐物領ぜられたり(四)」とこそ申しゝか」おとゞ、正頼「げに然こそあなれ。去年の冬、人に聞かせで、お前にて御書仕うまつり給ひき。かゝる世に似ぬ物など見ゆるは」など宣ふ程に、新中納言殿より(五)「兵衛の君に」とて御文あり。御覽ぜさすれば、

實忠いと哀に嬉しかりし事は、すなはちと思う給へしかど、世の人の心つくさせ給ひしかば、げにうたてもやと思う給へし程に、念じ聞えししるしにや、

〔語釋〕
(一)あて宮の平産を
(三)「一日は」歟
(四)「侍りけむ」歟
(五)誤なるべし
(八)正頼
(九)「昔の侍從の」なるべし。侍從は仲澄
(一一)あて宮に

〔考異〕
(二)ためらひて—がうちに
(六)侍る—ある
(七)すれば—それは
(一〇)歸らじ—つらゝ

思う給ふるやうにて、平かに(一)おはしますを、限なく喜び聞えさせつれど、物騒がしさためらひて(二)、今までなり侍りにける。ひとは(三)、昔のみ思う給へられて、物も覺え給へざりしかば、何事を聞えさせ侍らむ(四)。いでや、

こゝにてもきゝける聲を時鳥などはれしかなしでの山路に

とてなむ(五)。獨り侍る(六)はらからなどをこそ、女たよりにはすれば(七)、御覽ずらむかし。おとゞも宣はせしやうに(八)、昔侍從の(九)君の御代に思ほしなさば、宣ひし所へもまかり歸らじ(一〇)。今日明日のほどにまかりて、今。さらば、時々は近くを。

と聞えたり。御覽じて、兵衛に、あて宮「かく書き給へ」とて書かせ給ふ。

あて宮かくなむと聞えつれば(一一)、自ら聞えむとすれど、まだはかぐ〜しき心地もせぬを。一夜は御すまひ制し聞えむとてなむ。などかは今は、または歸り給ふべからむ。世の人の有るやうにて、近く物し給へかし。さらば思ひ聞えつべし

〔語釋〕
(一)實頼が昭陽殿へ
(二)東宮

㊅宮の君、あて宮を罵る。實正再實忠に舊妻と同棲せんことを勸む。實正、實忠の妻子を三條の家に迎ふ。

や。
と聞え給ひて、奥の方に、
あて宮 惑ひけむとか。然らざりせば、
山べにしすむときかずば時鳥なべて知らせぬ聲はせましや
哀ときゝしかば。
とて賜へれば、私にも文かきて取らせつ。西の對の御産養の物ども取り出でたれば、君だちいどみつゝ取り給へり。物に入れてをさめ給ふ。
かくして中納言御文見給ひて、「げに、わが志を見給へばこそ、かくも宣へ」など宣ふ。
宰相(一)参り給ひて、實頼「宮(二)にも内裏にも昨日参りて侍りしに、宮の御消息、「日頃經るまゝに、いかに心細く、今は效なし。世に人の皆ある事にこそあめれ。たゞ例の人の有るやうにて物し給へ。何かさて物し給ふ、など聞えよ」となむ」宮の君、昭陽「など己は、密夫し、人と文通はしやはする。然る人(一)をこそは、よきにはし給ふめれ」宰相、實頼「かゝる(二)をぞ宣ひし(三)ぞかし。誰か密なるわざする。疎(四)からぬ御中にこそ。かくな宣ひそ」宮の君、昭陽「誰かは、宮にある人の限、この盗人(五)をよしといふ。人は幸(六)のおにこそあめれ。ありとある限、御子にもおはせよ、上臈にもあれ、面やは見え給へる。夜晝(七)入り居給へれば、宮人は上のも下のも、わびごとをこそすなりしか。出(八)でて去にたれば、院の御方もまうのぼり給ひて、立ちぬる月(九)よりは、さはり物し給はず、惱み給ふなり。こゝにも御文賜ふ(一〇)。御返宣ひ聞えさせずなりにけむこそ、陰陽師、巫、神佛もなき世なめれ。許多の人の、我をもとにて、せぬわざをすればとだに言はずなりにけるこそ。同じくば、この(一一)宮、男産み給はなむ、我こそはと思ひて、生み連ねたる者(一二)の、口開かず(一三)押し伏せつべく」と宣へば宰相の君、實頼「天下にいへど、時の人の母とするや。梨壺(一四)と世に思ひためれど、何事もあらじ。まして、更にはおはすとも、宮(一五)などのは、我心よせ

〔語釋〕
(一)あて宮をいふ
(二)其樣な事をいふのを東宮も嫌ひ給ふ也
(四)君とあて宮とは從姉妹なり
(五)あて宮
(六)誤あらんか
(七)東宮が
(八)あて宮が里に下りたれば
(九)月
(一一)女四宮
(一二)あて宮をいふ
(一四)此次の太子は梨壺腹の皇子ならんと世人は思へど然あるまじ
(一五)女四腹の皇子には贔負はあらじの意なるべし「我心よせもあらむ」は「御心よせもあらじ」歟

〔考異〕
(三)宣ひしぞ—宣ふぞ
(一〇)賜ふ—賜ひ
(一三)開かず—あかで

もあらむ」と宣へば、昭陽「いで、あなかま、給へ」など腹立ち給ふを、中納言(一)聞き給ひ、かたはらいたく思ほす程に、民部卿おはして、物語し給ふついでに、實頼「先つ頃かの(二)山本にまうでて侍りき。かの(三)宣ひおきし事ども侍りし文ども奉りて、「此方わたり給ひね」と聞えしかば、「今更に何しにかは、若き(四)人は然も」などなむ。御服いとおもく著給へりき。不益(五)(六)にしなし奉り給へるは、如何にぞとて、隱れ給ひしかど、見奉りしかば、皆(七)かたち人にこそは。年頃、さばかり物を思しつつ、服やつれし給へれど、さらぬ人にも多く勝りてなむ。女君(八)は、いとをかしげにて、見まほしき容貌なむし給ひけるに、御髮のいと長げなりしを、掻い越して見給へりしかば、いとうるはしく覺(九)えて、七尺ばかりにぞありし。頭つき、顔樣、いとめでたかりき。かかる人を見(一〇)給はで徒らになし給ふ、何でふわざぞ。よき女子は親の面をも起すもの(一一)にはあらずや。(一二)人の容貌を音に聞き給ひて、御身をも妻子をも、徒らになし給はなむ。そこの思ほし騷ぎ給ひし人(一三)に、かの君劣り給

〔語釋〕
(一)實忠
(二)實忠の舊妻の處へ
(三)季明の遺言の劵
(四)袖君は遣りてもよし
(五)實忠がすてたる娘はどの樣になりしぞとて也
(七)母子ともに器量よし
(八)袖君
(九)「おぼくて」歟、一本「おもほえて」
(一〇)世話せずして
(一二)あて宮の
(一三)あて宮

〔考異〕
(六)不益—ふよう
(一一)もの—ナシ

はじや。見苦し。(一)早くともかくもし給へ」と聞え給へば、實忠「昔はさても侍りぬべかりし。年頃まからねば、忘れ侍りにけむ。今は人(二)見給へむも思(三)ひ給へず。なほ彼の賜びたる所におかせ給ひて、時々を(四)訪はせ給へ。ここには、小野にまかりて、暑き程過して、あるやうに隨ひて、まうで來べくば、時々もまうで來むかし」民部卿、實正「何せむにか(五)今更に又かへり給ふべき。年頃さて物し給へるを、公私惜しみ給ひ、交らひのついでなどにも、常に思ひ出でられ給ひつつ、いみじく悲しくなむ侍る。今はかく、親もおはしまさずなりぬるを、數多(六)ある中らひにもあらず、今は斯うて物し給ふに、旅の樣に思ほさる(七)らむ。今は、侍る所もいと便なくなりにたり。昔のやうにはあらで、童べ(八)の侍る所に入りて見給ひて、同じ所に物し給へ。何せむに歸り給ふべき」と申し給へば、實忠「鈍(九)色のきぬのけにや侍らむ、いとむづかしう侍れば湯など湧かさせて、物せむとなり。今侍りしやうにはあらで、京にもまうで來なむや」と宣へば民部卿、

〔語釋〕
(二)妻を持たんとは思はず
(八)實正の妻の居る簾内にも入りての意歟
(九)喪服を著て居る故か

〔考異〕
(一)早く—早う
(三)思ひ—思う
(四)時々を—「を」ナシ
(五)にか今更に—にかは今又
(六)ある中らひにも—あるなる子にも
(七)思ほさるらむ—思はすらむ

實正今はかくのべ見し人もなきものを君さへ外へ行かずもあらなむ

と宣へば中納言(一)の君(二)、

實忠わが故となげきし路(三)にわたれかし君がしるべにならむとぞ思ふ

と聞え給へば宰相、

實正なき人の路のしるべに君なくばおくれて我もなにか(四)惑はむ

と宣ふを宮の君聞き給ひて

照陽有りし世もかゝらばとのみ歎かれて君にもつひに後れぬるかな

と聞え給ふ。中納言は、御前などして出で給ひぬ。民部卿も、宰相も、宮の君に、實正實賴「いかに心細く思ほすらむ。今、たがひにしば〳〵參らむ。宿直人などもさゝせてを」とて殿におはしぬ。

かくて六日になりぬ。民部卿、そで君の御迎し給はむとて、三條殿に物し給ひて、損はれたる所つくろはせ、池拂はせ、御調度どもは、皆あれば、置所有るべきやうにしつらはせ、御簾かけさせ給ふ。屛風、御帳よりはじめて新しく淸げなり。この殿は一町は檜皮のおとゞ、板廊、渡殿、板屋どもあまた、藏などあり。池近くをかしげなり。三日まで物參るべき事など人々に宣ひて、御車三つ御前などあまたして、かの麓におはして、近くなれば、我先だちておはして、聞え給ふ、實正「さきには、日の暮れにしかばなむ急ぎて。さらば渡らせ給へ、とてなむ。いと暑く苦しく侍れども、今日ならでよろしき日の侍らざりつれば、參り來つ」(一)と聞え給へば、實正「なでふ心をか。たゞおはすらむまゝにて、人見るべき所にも侍らぬを」と聞え給へば實忠妻「さらば、(二)早く率ておはしましねかし。(三)わいても、世を憂しと入りぬめりしを、(四)いづちにこそ」聞え給へに實正「などおもほす事や、(五)いてこむ、わたらせ給ふまじきさまに宣へ(六)ば、如何なる事ぞ(七)」北の方、實忠妻「こゝには何しにかは。(八)これより深くとこそは。世の中の心憂く思ひ給へられしかばこそ、年頃斷(九)うてもうとからぬ(一〇)」實正「一所は(一一)、かく此處にもいかでかものし給はむ。こ

〔語釋〕
(三)誤あるべし

〔考異〕
(一)のべ見し—のべにし
(二)の君—ナシ
(四)なにか—などか

〔語釋〕
(一)「と聞え給へば」衍文なるべし
(三)「わいても」は「わが身は」歟
(四)「いづちにこそ」は「いづちにかと」歟
(五)誤あるべし
(六)「宣へば」は「宣ふは」歟
(八)一層深き山に隠れん積なり
(一〇)誤あるべし
(一一)袖君一人では

〔考異〕
(二)早く—早々
(七)事ぞ—事ぞや
(九)斷うても—かくても

（語釋）
（一）誤あるべし
（二）三條の家の靜さは
（三）侍女の名
（六）母君の居所も
（七）内には入らずして
（八）實頼
（九）實忠と同棲の事
（考異）
（四）どもも—ども
（五）はひ入りて—はひりて
（一〇）聞え給ふ物など心して奉り給ふ—聞ゆ

の御後見し給ふとおぼしてこそは、(一)かく山里には、この君をすまはせ奉り給ふべき。さりとも、(二)此處には劣らじ。そが内に侍る、(三)中納言の君おはせよ。こゝよく守りて、人に毀たせで仕うまつれ」と仰せ給ひて、われも御車にておはしぬ。北の方は、漫に思さるれど、この君を斯くだにあらせむやは、と思しておはして見給へば、いとおもしろく廣くて、(四)調度どももなき物なし。いと淸げにて、(五)はひ入りて見給ふに、物憂がり給ひつれど、斯うてもありぬべしと見給ふ。御座所は、(六)このおはすべきも、姬君のおはすべき方など樣々なり。おとゞの出居のかた〳〵ならむと思ほす。人々の曹司などは、いとよくて有り。御藏には、故殿の置かせ給へる、布、錢などあり。こまかなる物などは無し。御前の物などは、宣ひおきたる人々參る。民部卿は實正「三日過して參らむ」とて、(七)外ながら歸り給ひぬ。かうて三日過ぎぬれば、(八)新宰相もろともにおはして、實正「いと目やすくおはしぬる。(九)今一つの事も、いかでせさせ奉りてしがな」と(一〇)聞え給ふ。物など心して奉り給ふ。

㊆東宮度々あて宮を召す、女四宮懷胎の噂。皇太子の地位につきての正頼一家の危惧。

（語釋）
（一）「つやゝかにて」歟
（二）大宮
（三）仁壽殿も然り
（四）誤あるべし
（五）此若宮が太子に立たるゝものと思ひて斯く人人が追從するを
（考異）
（六）思す—思ほす

畫詞　こゝは三條殿。

かくて藤壺には、御心地も今はさわだち給ひにたれど、大殿はなほおはしまして、勞り奉り給へばにやあらむ、殊に損はれ給はず、(一)づしやかにて、あてになり勝り給ひて、めでたくおはす。綾の搔練のひとへがさね、二藍の織物のきぬ、脫ぎかけておはするを、おとゞ見奉り給ふ。君だちのおはするに、正頼「若き主たちにならひ給へ。子持はかくぞ勞りなすよ」と宣へば、誰も〳〵ほゝ笑みておはさうす。宰相の君、祐澄「人がらにこそ物し給ふめれ」おとゞ、正頼「(二)わが御方も、かく恐ろしげなる人こゝら作り出で給へれど、然りげにやは。(三)内裏のなどよ」と宣ひて、若宮の御方を見やり給へば、やんごとなき人參りつどひて(四)ころたちて、此方などにもわたり給はず、いときら〳〵しくておはするを、如何ならむ、人々の(五)然思ひてかくはあめるを、恥や見むずらむ、と(六)思すほどに宮より、

東宮　日頃は如何。うちはへ、此處には惱ましくなむあれば、まだえ對面せずやと

思ふに、そこには怪しうは物し給はじを、下局にやは。うしろめたくはこそ。
人(一)もろ共によ。いでや
君をまつわがごとわれを思ひせばいままでこゝに來ざらましやは
思ふこそ妬く。まかでられし時も、(二)はかるやうにて、かく數にも思はれざめれば、しばしは(三)ものせじと思へど、怪しく心より外に(四)。となむあるを御方、あて宮「あな怪しや。たゞにてやは。例の憎げ言し給ふめり。あないとほし」とて、あて宮「此の頃は、誰々かものし給ふ。いづくにか御使は遣はす。内裏わたりには何事かある」と宣はすれば、使「此の頃は、例の御書あそばしなどはせさせ給はず、御心地惱ましとて。まうのぼり給ふ事は、院の御方にこそは。其處にさふらふ左衞門といふ人、忍びて申しゝは、五月ばかりより(六)御氣色ありて(五)惱ませ給ふ、となむ申しゝ(七)。御使は、一日まゐり侍りしかど、申すまじき事なれど、内裏わたりには、梨壺の御方の(八)おほんせう(九)し給へる事をなむ、やんごとなき

〔語釋〕
(一)生兒と共に參內あれ
(二)欺く樣にして退出せられて
(三)文もやるまじと
(五)女四に仕ふる
(六)御懷胎の御樣子
(八)「おほんせうし」は「御子うみ」歟
〔考異〕
(四)外に—外にて
(七)申しゝ—申しさふらふ
(九)せう—せうそこ

所々、よろこばせ給ふなる。ある所には「物の筋といふもの、絶えぬと見れ(一)ど、つひには出で來ぬるものなりけり。(二)かゝる折にあはせ給へる事」とて、常にある所には御文通(三)はさせ給ふとなむ承る。(四)かの御方も、とく參り給へと侍るなる」と聞ゆ。宮の御返、
あて宮 承りぬ。惱ましげに宣ふなるは、如何やうにか。いとも〳〵聞えさせぬ。此處にも、なほいと苦しくなむ侍れば、え參り侍らぬことや。待つ我がとか侍るは、
下葉よりしたより色はかはりつゝまつとは更に言はずもあらなむ
とて奉り給ひつ。正頼(五)「かの事は」おとゞ、正頼「空言にあらじ。内裏の后、いとおぞく心かしこくおはし給ふ。(六)やんごとなき人に御子たちうまれ給へらば、必ず然思すらむ。后宮、大臣、公卿たち、心を一つにし、例を引きてこれをと申さむには、(七)何の疑かあらむ。我は馬にまじりたらむ牛の樣にて、何事をかは。(八)民部卿ばかり

〔語釋〕
(二)恰も東宮即位の時に當りて皇子の生れたる事喜ぶべし
(四)梨壺にも早く內裏へ歸る樣にと東宮より御文あり
(五)「おとゞかの事は」なるべし
(六)梨壺
(七)梨壺腹の皇子の太子に立たれん事は
(八)實正のみは我が味方ならん
〔考異〕
(一)見れど—見れば
(三)通はさせ—通はせ

〔語釋〕
(一)季明
(二)季明の子
(三)我が血筋を帝位に立てたしと
(四)あて宮を取返したりとも
(五)あて宮自身
(六)「老のはてに」歟
(七)忠雅の態度を見たく思へど
(八)誤あるべし
(一〇)皇太子を梨壺腹に
(一二)若宮が
(一三)立太子疑なしと思ふ折に
(一四)太子に立たるゝ御運のなきなるべし
(一六)「子にて」は「御子にて」歟
(一七)誤あるべし
(一九)梨壺腹の皇子の太子に立たるゝ噂と

〔考異〕
(九)何か—何かいと
(一一)にな—にを—を
(一五)まじきに—まじき
(一八)あが佛さき生ひの子の—あが佛をつるのこの—あがはとりをいのりの子の
(二〇)ゆめ人々に—ゆめゆめ
(二一)給ふなと—給ふなど

こそは。(一)太政大臣だにも物し給はましかばこそは。物のあしきにやあらむ、折しもこそあれ、物し給はず。(二)子どもとてあるは、下﨟なり。院かくて物し給へども、(三)わが筋をと思さむ道理なり。女子をば、何とかは心憂しと思ひて、(四)子どもをあらせ奉らずとも、(五)わが身ぞ、寡にて徒らにならめ。何の面目かあらむ。それは、皆思ひたらむかし。いみじき恥をも、(六)老のなみに見つるかな。(七)太政大臣の御氣色は見むと思へど、(八)おこはまだしう物せぬ」と宣へば藤壺、あて宮「(九)何か、むつかしうは思ほす。まことに定め果てられぬと聞召すとも夢ばかりものしき氣色にな(一一)。この折に人々の御志(一〇)どもを見給へ。人の志のみこそ、哀にもつらうもあれ。年頃(一二)かくて物し給へるに、(一三)然もあらでしもや、と思ふ折にかゝる事のあるは、え(一四)然る(一五)まじきにこそは。また(一六)子にておはするには、などかは。吾が佛(一七)(一八)さき生ひの子のといふ事も有るを、(一九)聞召したる氣色、(二〇)ゆめ人々に見え給ふな」と聞え給へば、正頼「あないみじや。若宮をば、いかでかたゞ、御子にては(二一)見奉らむ。かゝる御

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)嵯峨院の懇なる仰は帝も背き給はじ
(三)若宮以外に太子の立たるゝ樣ならば口出しせんとす
(六)女四宮に女兒の生るゝ事もあるべければ
(八)折かへし此文を遣る

〔考異〕
(四)御位—わうゐ
(五)一つにして—一つにて
(七)宣ひておはす—宣ふ

事よ。思はずなる御心ぞや」とほろと〳〵泣き給ふ。左衞門督、忠澄「何かは、思さじ。よに然るやう侍らじ。こと人々は知らず。(一)おほき大殿腹なるを、え思し棄てじ。何處にも、いかで見給ふれば、疎なる御中どもにも侍らざめり。いかでか御爲にうしろめたき心は」大宮「これはさるものにて、四の宮の男生み給ひつらむ時まで定まらずばぞむづかしからむ。(二)院の切に聞え給はむ事は、いかでか」おとゞ正頼「それは、天下に御眼七つ八つつき給へる男、一度に三つ四つうまれ給ふとも、さかしら、さしいらへせむとす。世を政ちなれ給へる(四)御位だにも、下の諸口と申す(三)事は、え否び給はぬことなり。そのかみ、聟も舅も、心を(五)一つにしてうれへ奏せむ、これこそむづかしけれ。それも、よう思ふ時は、(六)女兒もあれば、さりともと思ふものを」など(七)宣ひておはす。かくて又宮より御文あり、東宮心ゆかぬやうに有りつれば怪しさに、(八)たちかへり。何と聞き給へるやうやあ